

第6章 歴史地理調査

第1節 調査の概要

姉小路氏城館跡が所在する古川盆地の中世から近世初頭までの地理的変遷を検討するため、各拠点地域の景観復原を主とする歴史地理調査を実施した。今回の各山城における発掘調査によって、多くの発見があった。その一つが、いずれの山城でも建物跡等の遺構を検出したことである。さらには出土遺物の年代から姉小路氏段階の使用が想定できるとともに、一部の拠点については地誌類に伝えられている金森期の再利用が想定できるようになるなど、実態の一端が明らかになった。一方、文献史料に見える歴史的な推移から、各山城を拠点とした勢力はある時には相反し、16世紀中頃以降からは統合しつつ変遷した状況が推測される。そのため、対象を広く捉えなければこの地域全体の変遷は十分に理解できない。盆地内における各勢力の変遷過程をふまえつつ、その拠点機能と周辺地域の関係性を含めた、広域的な想定が必要である。そして、姉小路氏城館跡がこの地域において果たした役割とその移り変わりを捉える必要がある。

本調査は、古川盆地における武家勢力の拠点形成について麓の集落も含めた拠点地域の個別事例を検討し、飛騨国内の様相にフィードバックして広域的に検討した。さらに姉小路氏城館跡が所在する古川盆地全体の空間構造の変遷を検討し、各段階における勢力の拠点形成の特徴や地域的な差異を整理した。本調査実施にあたって、関連する絵図資料調査を実施した。また、土地の利用状況・歴史的変遷を可能な限り詳細に把握するため、明治前期の地籍図の調査を実施し、その合成・分析作業を行って各拠点周辺の景観復原を行った。本調査における景観復原は、地籍図・絵図等に見える近世末から明治初期にかけての地形や要素の配置を基本としつつ、発掘調査・測量調査・文献史料調査といった他の調査成果もふまえて、中世から近世初頭までの様相を広く推定・解釈している。なお、本章では武家拠点の呼称として「○○城」と表記し、遺跡として言及する場合は「○○城跡」と表記する。拠点地域として呼称する場合は「城」・「城跡」を省略する。

1 絵図資料調査

(1) 国絵図

飛騨国の国絵図について、中世から近世初期における城郭・街道・河川・集落等の広域的な展開を把握するため、可能な限り古い段階の国絵図に調査対象を限定した。近世最古のものとして、全国的には慶長度作成の国絵図が知られているが、飛騨国については今まで絵図の存在が確認できない。統いて、寛永10年（1633）の幕府巡査使の国廻りに際して幕府に収納された国絵図の縮写図（以下「日本六十余州図」）が存在し、佐竹文庫・毛利家文庫・池田家文庫・南葵文庫・永青文庫・蓬左文庫において所蔵されている（川村博忠 2002）。本報告では、複数の系統の絵図のうち、飛騨国絵図のデジタルデータ公開を行っている、池田家本（岡山大学付属図書館所蔵）及び佐竹文庫（秋田県公文書館所蔵）の2種類の飛騨国絵図を掲載する。

○【絵図1-1～1-5】池田家本 飛騨国絵図（図版40、41、42）

○【絵図2-1～2-5】日本六十余州国々切絵図 飛騨国（図版43、44、45）

「日本六十余州図」のうち池田家本については、岡山大学付属図書館より貸与を受けたデジタルデータを掲載し、佐竹文庫本については秋田県公文書館のデジタルアーカイブの画像を編集して掲載する。「日本六十余州図」の記載内容については川村博忠によって分析が行われているため（川村博忠 2002）、それをもとに飛騨国絵図についても分析を加えたい。通常、図面の中央部に国名を墨書して長方形で囲むが、飛騨国については、中央部に高山等の主要都市が存在するためか、やや北寄りの位置に記される。村々は小判型の棒に村名を書くが、後世の国絵図と比較すると記載される村数は少ない。赤線で表記される街道沿いの村々の記載を重視している傾向がある。「日本六十余州図」には郡区分を示す国絵図も存在するが、飛騨国の絵図には郡区分や郡境線が無い。また、四角形の棒の中を赤色で塗りつぶし、その中に文字を記載したものとして、位山のみ確認できる。

武家拠点について、大名の居城は四角の中に丸を描き、四隅を墨で塗りつぶし（惣構方郭型）、その中に城名を記す。飛騨国絵図において該当するのは高山である。古城については、大名の居城よりやや小さめの白抜きの四角形の棒内に「何々古城」もしくは単に「古城」と表記する。飛騨国絵図について、「何々古城」と表記のあるものは「増島古城」「もずみ（茂住）古城」「下呂古城」である。単に「古城」と表記されるものについては、その位置から東町・萩原・下原が想定できる。なお、城や古城の周辺については、拡大図を掲載している【絵図 1-2 ~ 1-5、2-2 ~ 2-5】。

池田家本と佐竹文庫本を比較すると、色彩や山・川の表現、村や城名の向きなどの違いが確認できるが、絵図の記載内容について明確な違いは確認できない。ただし、川村博忠が指摘するとおり、池田家本には端書郡数・郡名・石高が記され、居城「高山」の下に付箋を貼って石高と大名の名を記している。

この寛永度の飛騨国絵図については、後の正保絵図と比較すると簡略な記載ながら、統一的に作成された最も古い段階の飛騨国の絵図として注目される。また、居城と古城の表記から、寛永 10 年当時における金森氏の居城と古城の認識を示す基礎史料となるものである。一方、この図に表記される城や古城は在郷町や街道の要衝を基本とするものに限られ、入国当時に金森氏が一時使用したと伝わる鍋山・古川・小島等の山城の記載は確認できない。そのため金森氏入国以前の在地勢力の拠点とあわせて、入国当初の金森氏による一時的な利用については別途検討を要する。

（2）陸軍參謀本部陸地測量部作成 五万分の一地形図 飛騨古川【絵図 3-1 ~ 3-4】

旧陸軍が作成した地形図。本報告では大正元年測量、昭和 5 年修正図を使用し、各拠点の周辺を拡大して掲載している。また、姉小路氏城館跡については第 4 章掲載の各山城の遺構配置図をもとに城山のおおよその範囲を赤線で示し、その他の城館跡についても主要部の位置を赤丸で示した。

○【絵図 3-1】小島城跡周辺拡大図（図版 46）

城山は山林であり、東側に太江と沼町の集落を結ぶ峠道が存在していたことが確認できる。なお、周辺については太江の中心集落や杉崎の中心集落が展開する様相が確認できる。一方、小島城の南麓部の沼町付近は、現在は土地改良が終了して耕地と住宅地が混在するが、この当時は一帯に水田が広がっている状況が確認できる。

○【絵図 3-2】古川城跡周辺拡大図（図版 46）

城山は山林であり、北麓に高野集落が展開する。南麓の武家屋敷伝承地付近は耕地として利用されている。宮川対岸の向町にも目立った集落の表記が無い。一方、増島城下に取付く越中街道を中心に宅地が展開している様子が確認できる。

○【絵図3-3】野口城跡周辺拡大図（図版47）

城山は山林であり、西側には野口の集落が展開する。東側は耕地を挟んだやや離れた位置に袈裟丸の集落が展開する。宮川沿いに新たな道が建設されているが、野口城南麓の山際を通行する道や城山東側の峠道といった古道も確認できる。

○【絵図3-4】向小島城跡・小鷹利城跡周辺拡大図（図版47）

両城とも城山は山林である。城山周辺の集落や街道の配置が確認できる。また、信包集落から小鷹利城方面へ至る湯峰峠方面は、現在利用されない谷沿いの道が主要な街道であったことが確認できる。

（3）米軍撮影航空写真【写真1～5】

昭和23年に米軍が撮影した航空写真である。国土地理院ウェブサイト（地図・空中写真閲覧サービス）から対象地域周辺の画像を取得・引用した。陸軍地形図と同様に、第4章掲載の造構配置図をもとに各山城のおおよその範囲を赤線で示した。古川町内における土地の区画整理は昭和30年代以降に本格化するため、それ以前の土地の詳細な様相を確認できる貴重な資料である。

○【写真1】小島城跡周辺航空写真（図版48）

城山は山林であり、城の東側を通行する峠道も白い線として確認できる。周辺部の耕地についても、土地改良前の状況が良く分かる。特に沼田・杉崎の街区構造は、明治21年段階の地籍図の記載情報と大きく変化していない状況が確認できる。

○【写真2】古川城跡周辺航空写真（図版49）

城山は山林である。東麓・南麓部の武家屋敷伝承地には方形区画の耕地が展開し、平坦面の縁に沿って線状の地形が確認できる。これらは切岸や土星等の痕跡の可能性が想定される。対岸の古町周辺についても、土地改良が未実施の時期であり、耕地が広がる状況が確認できる。

○【写真3】野口城跡周辺航空写真（図版50）

主郭付近は樹木が少ないため、曲輪の形状が確認できる。また、城山周辺の谷筋は樹木が少なく、近い時期まで耕地として使用していた状況が想定される。東麓の袈裟丸側について、山際の低位段丘上は黒色が濃く表示されている。袈裟丸集落はこの低位段丘上に展開していることが分かる。

○【写真4】向小島城跡周辺航空写真（図版51）

○【写真5】小鷹利城跡周辺航空写真（図版51）

この地区は【写真1～3】と比較すると引いた構図の航空写真しか確認できないため、詳細は判然としない。しかし、白い点や線から山城周囲の集落や道の配置が確認できる。

（4）城絵図・山絵図・村絵図

近世から明治初期にかけて作成された城絵図・山絵図・村絵図について、所蔵者ごとに記述する。

①飛驒高山まちの博物館所蔵絵図

○【絵図4-1～4-4】『飛州志』所載の城絵図（図版52、53）

『飛州志』は飛驒国代官・長谷川忠崇著とされる飛驒国の地誌であり、文政12年（1829）に成立した。同書には飛驒国内の約20カ所の城跡の絵図が掲載されている。この絵図に関する本文解説には「本土ニ於テ古来城跡ト称スル地名凡ソ六十余数アリ、然レドモ往古綱張ノ大旨其地形ノ遺存スルモノ今二十数アリ。即チ図ヲ作ッテ下ニ出セリ。是以テ郭ノ綱キ虎口ノ所在等分明ナラザルモノ多シ。仍テ

其概略ヲ載ス」とある。つまり、当時認識していた60ヶ所余りの城跡のうち、現地で繩張りが良く確認できる約20ヶ所余りの城跡を選定して作図したもので、内容は概略を描いたものである。そのため、各絵図の城郭遺構の記載は模式的な表現となっている。一方、これらの絵図は城郭史の視点から、曲輪の形態については巨視的に見ると符号し、部分的に記される曲輪の規模の値も現状と大きく矛盾することは少ないと評価されている（高田徹 2005）。実際に、以下に紹介する姉小路氏城館跡の絵図と現地の状況は概ね合致している。以上から、本絵図の資料的な価値は相応に高いと言える。

姉小路氏城館跡の城絵図については、野口城跡を除く4城の絵図が収録される。本書では彩色された写本として、飛騨高山まちの博物館所蔵の写本を掲載する（書写年不明）。図は墨書きで全体に簡略化して描かれている。曲輪は白地であり、山林は黄色、河川は水色で彩色される（ただし、古川城跡南側の谷川は茶色である）。集落や宗教施設については円型もしくは方形の枠内に赤色を塗り、地名や施設名を記している。主要な曲輪は大きさを測り、本丸と認識している曲輪は「本丸」もしくは「本」と表記する。

【絵図4-1】は小島城跡の絵図である。尾根上に展開する曲輪を描いている。本丸の表記のある曲輪や東側に位置する櫓台等、記載は簡略ながら現地に則した絵図となっている。本丸南側の通路状の区画には古井戸の記載がある。周辺の集落は太江と杉崎の表記があり、南麓部の沼田付近は「此邊往古 小島町」と記載される。また、城山西側の太江川上に「ホソエ（細江）」の記載が見える。

【絵図4-2】は古川城跡の絵図である。山上部の曲輪配置は簡略ながら現地の状況に則している。南麓部には五段の平坦地を描き、最も上段（西側）の区画には「自是以下屋敷跡」と記載がある。さらに三段下の区画には五社神社につながる「物見坂」が描かれる。また、現在は山上部に存在する蛤石は、屋敷跡とされる平坦地の最下段に描かれている。周辺については、谷川を挟んだ位置にある五社神社の他、高野集落が描かれ、宮川には「古橋跡」が描かれている。

【絵図4-3】は向小島城跡の絵図である。本丸周辺を中心とした限定的な範囲を描いている。現状と同じく本丸は帯曲輪が取り巻いている。本丸西側に描かれる出丸は、その方位から畠状空堀群が存在する曲輪周辺を表現したものと想定される。周辺は殿川と想定される「谷川」と信包の集落が記載される。

【絵図4-4】は「黒内城」とあるが、曲輪配置から小鷹利城跡の絵図と想定される。向小島城跡の絵図と同様に本丸周辺に限定して描かれ、本丸周囲に帯曲輪が取り巻き、そこから派生する尾根上の出丸が1ヶ所描かれる。また、本丸の下側に赤点線で道を記載する。これは黒内・信包地区の大字境の尾根道を表していると考えられる。麓の集落は黒内のみ表記する。谷川は一筋記載が見える。その方位から湯峰峠方向の谷川を描いているものと考えられる。現状から想定すると方位の南北が逆となっている。また、現地の主郭周辺にも曲輪が何段にも存在するが、絵図のような帯曲輪ではない。

②岐阜県歴史資料館所蔵絵図

岐阜県歴史資料館所蔵「飛騨郡代高山陣屋文書」の中から、姉小路氏城館跡周辺を描いた近世の絵図を掲載する。

- 【絵図5-1～5-3】（天保度一村限山絵図写）吉城・信包村（図版54、55）
- 【絵図6-1、6-2】（天保度一村限山絵図写）吉城・笛ヶ洞村（図版56、58）
- 【絵図7-1、7-2】（天保度一村限山絵図写）沼田耕地山林絵図（図版57、58）
- 【絵図8-1、8-2】（天保度一村限山絵図写）吉城・稻越村（図版59）

天保14年～15年に幕府によって実施された天保度山林調査によって、飛騨国内の全村に「天保箇所附帳」の提出が命じられた。箇所付帳には必ず御林山絵図の添付が義務付けられ、高山御役所に提出された。その一部の山絵図が伝存している。本書では、実見できた絵図のうち、姉小路氏城館跡を含む地域の山林絵図を掲載する。これらの絵図からは、山林の利用形態や往還道・居村との距離等の情報を得る事ができる。

【絵図5-1～5-3】は向小島城跡・小鷹利城跡の拠点集落と想定される信包村の絵図である。全体的に色彩豊かであり、図には山林の様相や谷川・街道の他、宗教施設の記載がある。【絵図5-1】は図全体である。【絵図5-2】は向小島城跡周辺の拡大図であり、「城山」の表記が見える。【絵図5-3】は小鷹利城跡付近の拡大図である。城山周辺には「牛ヶ谷」「七曲り」という近代以降も使われる字名が確認できる。また、大字境の尾根道沿い周辺は入会地であったことが分かる。

【絵図6-1、6-2】は向小島城跡を含む惣ヶ洞村の絵図である。図の表現は信包村のものと同一であり色彩豊かである。【絵図6-1】は図全体、【絵図6-2】は向小島城跡付近の拡大図である。信包村と同様に「城山」という記載が見える。また、惣ヶ洞側は城山の一部に焼畑が存在していることが分かる。

【絵図7-1】は小島城跡南側に位置する沼町村の絵図である。【絵図7-2】は小島城跡付近の拡大図である。先の小鷹利郷2村の図と比較すると記載内容や表現が異なる。小島城跡の城山全体が私有林であり、表記される字名のうち、「本城後平」「扇平」「日面平」等は、明治以降も確認できる地名である。城山の南麓部については、宅地が山際に集中している様子や、複数の方形区画が存在しながら耕地として利用されている様子が確認できる。

【絵図8-1】は小鷹利城東側に位置する稻越村の絵図であり、【絵図8-2】は城跡付近の拡大図である。基本的に墨書きで道のみ赤線で表記される。河川は二重黒線で示される。地名について、「小字すけ(管)田」の一部が地籍図の「菅谷」に相当すると考えられる。また、黒内境・信包境が表記され、「湯舟山」の付近には赤道で湯蜂峠が表記される。稻越側から城山へ至る谷筋には谷川が確認できるが、道の表記は確認できない。

○【絵図9】吉城郡黒内村信包村古城跡論書裁許状写付属絵図（図版60）

黒内・信包・稻越村の入会場であった小鷹利城の古城跡の入りの裁定に付属した絵図である。この裁許では出丸跡は黒内村の進退とされ、本丸跡は信包村敷であるが黒内・信包・稻越の3ヶ村の入会場とされた。図は中央部に「黒内城」「本丸」と記され、南側に切岸を表現したものと想定される2筋の線が見える。線分の間には字が記入されているように見えるが、判然としない。その南側には「ホリ」という記載が見える。南西尾根には出丸が描かれ、その先には黒内・稻越村境の線が表記される。南東方向には信包・黒内村境が表記され、赤道が描かれる。赤道は本丸付近で「ホリ」の南側を通行する道と、本丸の二段目に至る道に分岐する。本丸の北側にも東西2方向に尾根道が描かれて、このうち北西側は信包・稻越村境の赤道が描かれる。本丸東側にも短い尾根筋が表記される。いずれも小鷹利城跡の山の地形を表している図である。なお、『古川町史 史料編二』（古川町 1984、453頁）、『斐太後風土記』（蘆田伊人 1968、下巻50頁）には本絵図に関連する史料が掲載される。

③飛騨市所蔵絵図

飛騨市が保管する村絵図・山絵図のうち、特に本調査と関連性が高いと判断されるものを抽出して

掲載する。いずれも地方文書として伝來したものと考えられる。

○【絵図 10-1、10-2】文化 9 年太江村絵図（図版 61）

文化 9 年に高山役所に提出された絵図の写しと考えられる。【絵図 10-2】は小島城跡周辺の拡大図である。城跡は「姉小路古城跡」と表記される。また、北麓に「すわ宮」とあり近世に諏訪神社が存在していたことが分かる（明治初期に高田神社に合祀）。さらも小島城跡の北麓にも「すわ」「上すわ」といった関連する字名が確認できる。

○【絵図 11-1、11-2】天保 9 年高野村絵図（図版 62・64）

天保 9 年、諸国巡見使・國々御料所巡見使の国廻りに備えて作成された高野村の絵図。鳥瞰的に描かれ、記載内容や色彩等は他の村絵図と比較して細密である。【絵図 11-2】は古川城跡周辺の拡大図である。城山は曲輪群と考えられる段地形が確認できる。古川城跡南麓は一帯が耕地であるが、建物が一軒確認できる。高野村から五社宮方面に抜ける峠道が記載されているが、位置から城山西側に位置する両堅堀を通行したものと想定される。また、城山手前の宮川の流路が二股に分かれていることが確認できる。高野集落から城山東側を通る桟橋も描かれている。

○【絵図 12-1、12-2】天保 15 年黒内村絵図（図版 63・64）

岐阜県歴史資料館所蔵の絵図（絵図 5～8）と同じく、天保 14 年～15 年に幕府による天保度山林調査の際に作成され、その後に高山役所に提出された絵図の写しと考えられる。複数の小鷹利郷内の村々の絵図が確認できた。本報告では、岐阜県歴史資料館所蔵絵図では確認できなかった黒内村の絵図 1 枚（【絵図 12-1】）を掲載する。

【絵図 12-2】は小鷹利城跡付近の拡大図である。「信包村境」「当村境」とある黒線の部分が小鷹利城跡の主郭を示している。山裾は入会地ではなく黒内村限の山林となっている。また、孫字として「七曲り平」と見え、明治段階で確認できる字名がこの段階まで遡ることが確認できる。城山の麓付近まで信包村との赤道が確認できる。なお、明治初期の社寺関係資料で確認される、山裾の神明神社の記載は確認できない。

2 地籍図調査と各拠点周辺の景観復原

飛騨国は武家拠点の実態を示した同時代の史料は確認できない。また、分布調査等による遺跡の分布によっても中世期の様相は明らかでない。そのため、本調査にあたっては、明治前期に作成された地籍図を主な資料として活用した。明治前期に作成された地籍図は全国の城館や都市の景観復原にしばしば利用され、さらに発掘調査や地形分析等、他資料との照合を厳密に行うことにより精緻な検証が可能とされる（山村亜希 2006）。一方、地籍図の作成過程は明治政府の政策段階に大きく関わるもの、作成段階や地域によって図の体裁や記載内容は大きく異なる（佐藤甚次郎 1986）。飛騨地域の地籍図の作成段階や残存状況について詳細に検討した事例は無かったため、第一に飛騨市が行政資料として保管する地籍図を調査し、全容把握に努めた。収集した地籍図のうち、城跡周辺地域の図をトレース・合成し、集合図を作成した。この図を基礎として、各種測量図や歴史資料から想定できる諸要素（自然地形・土地利用・集落・街道・寺社・発掘調査成果等）を図示し、各拠点の景観復原図を

第82表 姉小路氏城館跡関連地籍図保管状況（大下永2021bより転載）

旧村	大字	絵図				範囲内対象 武家拠点	
		b. 地押調査更正地図					
		①全図	②割込図	③字絵図	④旧土地台帳 附属地図		
古川町	上町	●	—	○	○	古川	
	是重	—	—	○	○	古川・増島	
	向町	●	—	○	○	古川・増島	
	殿町		—	○	○	増島	
	壱之町		—	○	○	増島	
	弐之町	●	—	○	○	増島	
	三之町・ 川原町	(古川町)	—	○	○	増島	
	上気多	●	—	○	○	増島	
	中気多	●	—	○	○	増島	
	下気多	(下気多)	—	○	○	小島	
細江村	沼町	●	—	○	○	小島	
	杉崎	●	—	○	○	小島・岡前	
	太江	●	—	○	○	小島	
	袈裟丸	●	—	○	○	岡前・野口	
	野口	●	—	○	○	野口	
	末真	●	—	○	○	野口	
小鷹利村	高野	—	—	○	○	古川	
	中野	●	—	○	○	岡前	
	下野	●	—	○	○	岡前	
	信包	●	—	○	○	向小島・ 小鷹利	
	笠ヶ洞	●	—	○	○	向小島	
	黒内	●	—	○	○	小鷹利	
河合村	稻越	△	—	—	○	小鷹利	

「○」=税務関係行政資料、「●」=千代の松原公民館蔵、「△」=河合村誌関係資料、「—」=未確認
※古川町内の全図はひとまとめに巻いて保管している状況であったため、実見せず内訳不明。

作成した。図を作成しつつ、山村亜希氏と調査担当者による現地確認を実施し、分析に反映させた。さらに各拠点地域における城館跡と諸要素との関連を想定し、各山城跡の機能や時代による変遷を推測した。なお、桜洞城跡・萩原諒訪城跡周辺の地籍図に関しては下呂市教育委員会の協力を得て、明治21年頃作成の当該地区（旧川西村・旧三郷村）の地籍図を収集した。下呂市における調査は令和3年10月18日、同年11月5日の2日間実施した。

飛騨市所蔵の地籍図の保管状況の確認結果は、第82表の通りである。これらの歴史資料としての分析や、それをもとに景観復原実施の手法について、既に別稿で整理を行っているが（大下永2021b）、

改めて概要を示す。明治前期、飛騨地方において統一的に作成された地籍図は明治9～10年にかけて作成された地租改正地引絵図（改租図）の系統と、明治21～22年にかけて作成された地押調査更正地図の系統の2類が確認できる。このうち、改租図は江戸時代の検地と同様の「十字法」によって丈量が行われ、図はあくまで見取り図として作成されたものであった。そのため測量精度は低く、道路・水路等の情報が記載されていない場合もある。一方、地押調査更正地図（写真7・8）は岐阜県の統一基準や厳密な進捗管理のもと作成された。道路・水路といった土地の筋骨部分は「三角測量」（当時の資料では「筋骨測量」と呼ばれる）によって、毎地丈量は「三斜法」によって行われた。三角測量・三斜法は十字法よりも精度が高く、現在でもしばしば使用される測量技法であり、特に筋骨測量は図の精度向上に直接的に作用している。よって、比較的精度が高く、古い段階の土地の状況を詳細に把握できる理由から、地押調査更正地図を中心とした資料として使用した。

各拠点地域の景観復原図にあたっては、第一に地籍図の情報を統合した地籍集合図を作成した。地籍集合図は対象地域の地籍図をトレイスし、地形図・赤色立体地図と重ね合わせた図として作成した。地籍図はその作成過程から、測量精度が高い街路・水路を優先的に割付けた。また、宅地・耕地はノビ・ズレを補正しながら現在の地形図に重ねて作成した。地籍図の精度が低い山林部分や、字同士の不整合は判別して現在の地形図に合うように適宜線を引き直した。さらに地籍図からは地目を抽出した。地目は記号化して標記し、記号パターンは岐阜県中世城館跡総合調査の凡例に従った（岐阜県教育委員会2005）。その他、大字・小字の字名を抽出した。字名は地籍図記載の字名を基本としつつ、近世から明治初期にかけての史料をもとに、武家や寺社を想起する字名を適宜抽出して記載した。地籍図記載の字名は近世史料で確認できるものとそうでない（新しい地名の可能性がある）ものがあるが、より広い対象から要素の濃淡を把握するため、敢えて岐別せず記載している。作成した地籍集合図を基本図として、景観復原のために把握すべき以下の諸要素の情報を付加した上で、各地域の分析を行った。

自然地形 集落の変遷の経過をより現地に則した地理的視点から検討するため、山地・河川・微高地・河岸段丘・後背湿地といった地形条件を地籍図と併せて確認した。地形の図化にあたっては微高地や山林部の平坦地を重ね合わせて確認するため、測量調査で作成した赤色立体地図をベース図として使用している。赤色立体地図が未作成の周辺地域の拠点については、岐阜県が作成した「岐阜県C S立体図」を使用した（当該図は「G 空間情報センター」WEBサイト (https://www.geospatial.jp/gp_front/) で取得）。

城郭遺構 城跡の遺構の分布状況によって城域と推定される城山の範囲を図示した。堀切・虎口等の遮断遺構は城域や敵対勢力・拠点集落の方位を判断する要素である。さらに局所的に確認できる石垣の

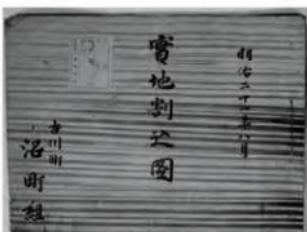


写真9 明治21年実地割込図(古川町沼町組)



写真10 割込図一部拡大(字二番町、記載事例注記)

分布状況から、拠点地域との対応が推定できる。これらの要素については、現段階で確認できる調査状況をもとに図示した。平地の城館跡については、既往の発掘調査等で推定された拠点の範囲や遺構の位置を示した。

寺社 城跡の周辺に所在、または過去に存在した寺社は、当該地域の武家勢力との関連が想定され、ひいては武家拠点や集落の変遷に重要な役割を果たした可能性が想定される。周辺の寺社については、地籍図作成当時の状況のみならず、近世まで遡ってその要素の存在・位置を図示した。近世段階においては寺社関連史料である『宝曆除地帳』(岡村利平 1914) の他、『飛州志』・『斐太後風土記』 等の地誌を参照した。さらに、明治期の各地域における寺社の様相については、飛騨市行政資料の寺社関連の資料を参照した。明治期に合祀した小規模な神社についても、改正地引帳・地籍帳・旧土地台帳を参照して地番や所有者名から位置を推定できる場合は、絵図・字名の記載や旧土地台帳で村抱えや共有地であることなどの情報から総合的に判断し、推定位置を図示した。

街区・集落 地籍図作成段階における集落の分布や城跡・街道との位置関係を基本とした。基本的に宅地が2筆以上群集している地区を集落と判断して図示した。また、間口が狭く奥行きが長い地割が連続する「短冊型地割」や、間口と奥行きの長さの差が少ない「ブロック型地割」といった要素は、いずれかの段階で計画的に施行された地割と判断できる。さらに道路に囲まれた長方形型の街区は「長方形街区」と呼ばれる。特に短冊型地割と長方形街区のセット関係は、近世城下町に多く見られ、計画的な街区設定が想定される要素とされる(前川要 1991)。そのため、これらが確認できる街区は通常の集落と区別して図示している。

埋蔵文化財包蔵地 今回対象とした中世から近世初頭の年代はもとより、その以外の時代も含めた地理的変遷を広く把握するため、埋蔵文化財包蔵地の情報を図示した。主に飛騨市が近年実施した分布調査成果である遺跡地図の範囲を図示し(飛騨市教育委員会 2018d)、詳細分布調査報告によって推定される遺跡の時代を記号化して図示した(飛騨市教育委員会 2019a)。

街道・古道・山城の推定登城路 道路は地籍図段階の様相を基準とした。さらに改租図や近世から明治初期にかけて作成された村絵図によって、古い段階の街道を推定できる場合は点線で図示した。山城の登城路については、地籍図に道の記載が無い場合でも、主要拠点地域からの取り付き方向や城郭遺構の配置構造、さらに赤色立体地図で判読できる尾根道等を総合的に判断し、道筋を推定できる場合は点線で図示した。

第2節 古川城跡 …第157図

自然地形 古川城跡は古川盆地の西端、宮川の左岸に位置する。可住地域と宮川の川底とは相当の高低差がある。宮川左岸側の谷川は城山の南北に流れ、宮川に注ぐ。右岸に立地する沖積平野は宮川下流に向かってなだらかに高度が下がる。平野部は宮川の流路に沿ってなだらかに傾斜しながら多少の凹凸面をもって変化している。この地区には、向町・上町・是重といった集落地が存在し、集落は主

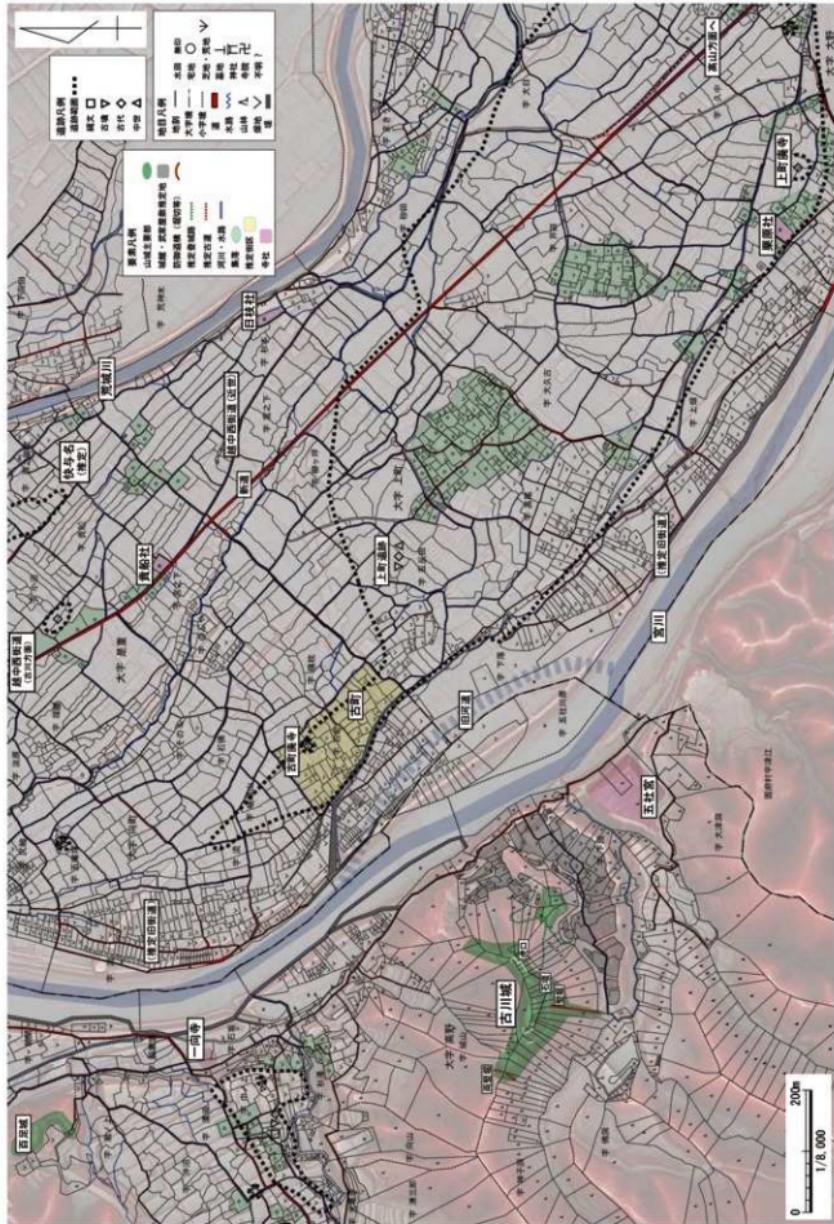
に宮川と荒城川に挟まれた平野部中央に立地する。さらに、氾濫によって生じたと推定される低位段丘に沿って水路が廻っている。上町とは重の大字境は水路によって区画される。一方、宮川左岸の高野地区や城山南側の平坦地群は、西側山地から宮川に注ぐ谷川が基軸となって形成されている。山城の北側の谷川沿いの段丘には高野の集落が存在する。

城郭遺構（第19図参照） 古川城跡は、平野方向の西側・東側に山麓まで曲輪群が連続して分布していることから、山麓部との連續性が想定できる。山上部は主郭を中心として急峻な切岸と帯曲輪が取り巻いている。主郭と想定される曲輪1・2周間に堅堀を認め、西側尾根続きを両堅堀で遮断している。集落を望む主要部の東側曲輪4・5は方形プランの区画で、内枠形の虎口7が南側に存在する。さらにその東側には帶曲輪6が取り巻いている。また、石垣と想定される石材の並びがこれらの主要部に認められる。曲輪4・5・虎口7周辺に石垣を認める他、曲輪2直下に位置する帶曲輪3周辺においても、石材の並びが確認できる。虎口7付近の石垣は対岸の古町方面から遠望できたと想定され、曲輪2直下の石垣は増島城方面より遠望できたと想定される。発掘調査によって、曲輪2を中心として礎石建物跡を検出した（飛騨市教育委員会2018a）。さらに、古川城跡主要部の南側から東側山腹・山麓に大小の平坦地群が存在する。地割パターンを確認すると、武家屋敷地との伝承がある南側の地区は赤道が通り、方形を意識した地割が読み取れる。一方、古川城北側の高野集落側にはこのような地形は確認できない。したがって、平坦地群が存在する東・南麓が古川城との親和性が高い地区と考えられる。

埋蔵文化財包蔵地 古川城から宮川を挟んだ対岸平野部に古代～中世にかけての大規模な集落遺跡である上町遺跡が存在する。また、古川城北側に位置する高野地区にも段丘上に集落遺跡が存在する。さらに古代寺院として字古町に古町廃寺跡が伝わり、栗原社付近には上町廃寺跡が存在したとされる。

字名 古川城周辺に「城山」・「下段」・「五社川原」といった字名が伝わる。「城山」は古川城が所在する山地である。「下段」は古川城の南側から東側にかけての山腹・山麓部で、大小の平坦地群が存在する地区である。特に南側の地区は『飛州志』等で武家屋敷地と伝わる。関連して高野山不動院過去帳に記載のある天正3年（1575）没「妙珍禪尼」の施主に「下ダン」と見える（大下永2020a）。「五社川原」は宮川の中州であり、地名や近世以前の五社神社の位置関係から、五社神社との関連が想定される。古川城対岸の向町地内には「古町」「嵯峨山」「石仏」「横枕」といった町場や京都を想起する字名が確認できる。「古町」付近は、金森氏によって増島城下に移される前の町場と伝わる。『飛州志』・『斐太後風土記』所載の絵図には古町から古川城へ渡る橋が描かれる。是地区内には「貴船」「西之御堂」「杉本」といった字名があり、いずれも寺社に関連した地名と想定される。

街道 宮川右岸の平野部の各所に、低位段丘や水路に沿った道が認められる。近世以降の越中西街道について、貴船社より東側の直線道は近代以降の整備によるもので、それより以前は道幅が細く湾曲を繰り返す道が高山方面に続いていた。一方、貴船社より北西側は、近世段階より直進しつつ増島城下の本光寺対岸に掠り付く道であった。このため、貴船神社を起点として街道筋に接続するよう増島城下の街路・街区を整備したものと推定される。なお、宮川沿いの自然堤防上にも道筋が存在する。古町等の集落を伴うことから中世以前の主要街道はこちらの道であった可能性が想定される。



第157圖 古川城跡周辺景観復原図

街区・集落 上町周辺について、河川沿いの自然堤防上は畠地として利用され、平野中央部の後背湿地は田地として主に利用される。平野部の低位段丘上に中規模の集落が点在する。是重地区では、凡そ一町四方の方形を組み合わせた条里状の街区が確認できる。この方格街区から、文献で確認できる莊園・「快与名」の存在が推定される。さらにそこから「古町」周辺まで街路が伸張する構造から、戰国期には古川城に対応する町場整備に影響を受けた可能性が想定される（大下永 2021b・d・f）。平野部中央の低段丘上に中規模の集落が約 200m 間隔で認められる。一方、古川城対向に位置する「古町」付近は集落が認められず不自然な様相である。是重から向町にかけての越中街道沿いの集落は近世の街道整備以降に展開したものと考えられ、貴船社の北東側の集落は元々の方格街区に沿った古い形態と推察される。その他、上町の「久中」の栗原社周辺にも道に沿った小規模な集落が展開し、古い街道の関係を示している可能性がある。

寺社 金森氏ゆかりと伝わる五社宮が古川城南方に存在した。高野の「石原」付近には近世末まで一向寺が存在した。是重には貴船社が存在し、近世期には「杉本」に日枝社が存在した。

所見 古川城は曲輪群が平野方向の山麓部まで連続して分布している状況から、一体的に使用された可能性が想定できる。また、山上部には石垣や櫛形虎口といった要素が確認できる。石垣は、規則性が無く広範囲に配置される。そのため、盆地内の広い地域から遠望できるように効果的に石垣を配置した可能性が想定される。古川城の東側・南側の地区は、城郭・神社・武家屋敷地等の要素が想定され、山城を中心として山麓部まで拠点地域としてのまとまりが推定できる。山城の発掘調査によって姉小路氏段階から金森氏段階まで長期間の使用が想定されるため、各段階の空間構造とその変遷を明確にすることは困難である。しかし、山城を中心とするまとまった拠点のあり方は、盆地内の他の武家拠点と比較すると明確な発展性が見える。また、対岸に存在する古くからの集落遺跡や莊園の推定地区とは隔絶した位置にありつつも、街路の状況等から一定の関連性が想定される。

周辺地域について、平野部の低位段丘上位面では弥生時代から中近世の遺跡が分布し、古代寺院も伝わる。また、これらの低位段丘上に中規模の集落が一定間隔で認められる。このうち古川城対岸の自然堤防上に位置する「古町」周辺は、断続的に中世まで人が居住していた上町遺跡の一部であるにも関わらず、近世以降は空閑地という不自然な様相が見える。古い街道が宮川の自然堤防沿いを通行していたと想定すると、中世には河川に面した街道沿いに町場の存在が想定され、増島城建設に伴い町場も移転したという伝承通りの様相が想定される（大下永 2021b・d・f）。

第3節 小島城跡 …第158・159図

自然地形 小島城跡は宮川右岸・安峰山の西端の尾根上に立地する。小島郷と高原郷を結ぶ神原峠の峠道が駕を通る交通の要衝に位置する。城の主要部からは、南側の古川盆地と、尾根を挟んで北側の神原峠の両方を同時に眺めることができる。この地域は、宮川と支流・太江川の合流点を基軸に集落が展開する。城山のほぼ全城を含む南側が沼田地区であり、太江川東側から南側にかけて沼田を取り囲む形で杉崎地区が接する。南側の平野部は大半が宮川の氾濫原である。さらに宮川・太江川によって

重複的に形成された後背湿地の地区は水捌けが悪い。現状は住宅が増えているが、近世から近代まで主に水田として利用されてきた。城山北側は太江地区であり、北側山塊と太江川によって形成された段丘地形である。集落北側の山地からの太江川へ流れる山水を利用した耕地が確認できる。また、淨慶寺の上流付近で太江川を分岐させ、西側の杉崎地区の田園地帯への用水を確保している。

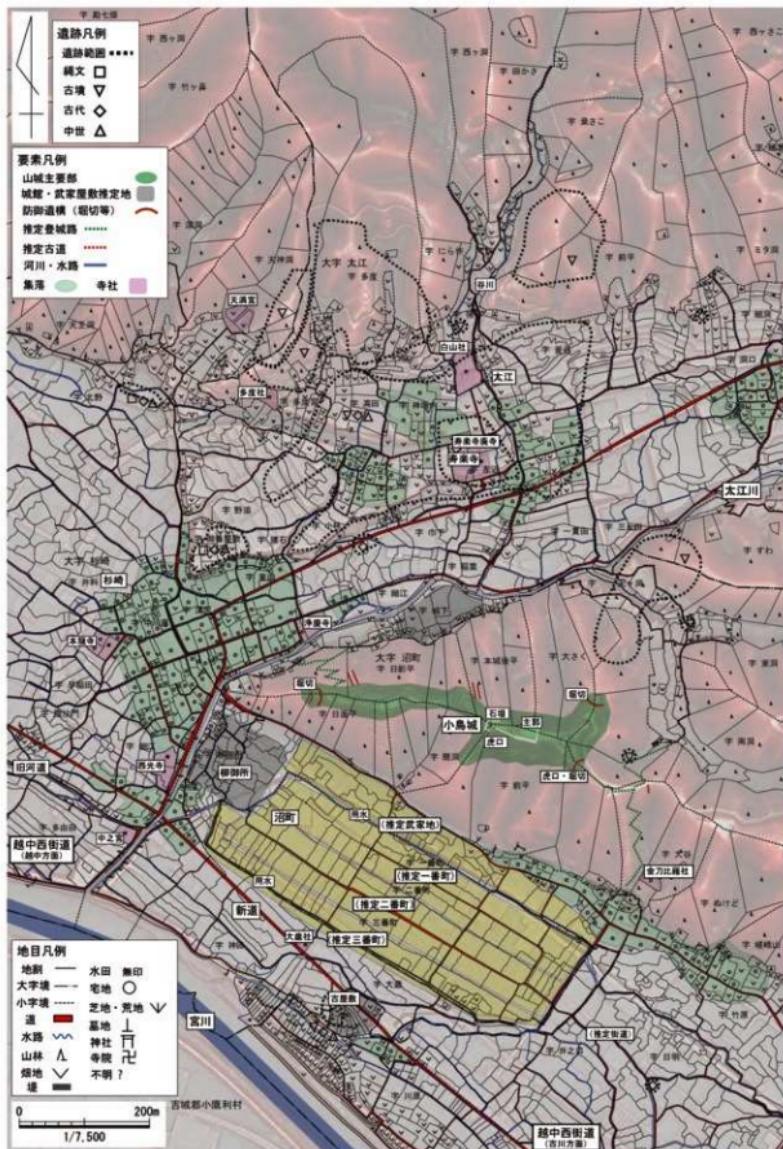
かつて太江川は西光寺の南側で西方向へ流れる川道であったが、宝曆年間に南方向へ流路が変更された（古川町 1982, 704 頁）。関連して沼町は東側の下気多方向からの用水が流れる。一方、太江川左岸であっても杉崎地区内は東側からの用水ではなく、太江川の用水を利用している。そのため、地区的境界と用水の利用形態が関わっていた可能性が想定される。

城郭遺構（第 41 図参照） 小島城跡は城山全体に堀切・堅堀などの城郭遺構が分布する。主要部には、石垣を使用した内桥形の虎口 15 が存在し、背面に石垣が構築されている。また、測量調査や発掘調査によって、主郭と想定される曲輪 1 周辺で石垣を確認した（飛騨市教育委員会 2018b）。これらの石垣の分布は主要部の西側・東側・南側に限定され、北側斜面には確認できない。

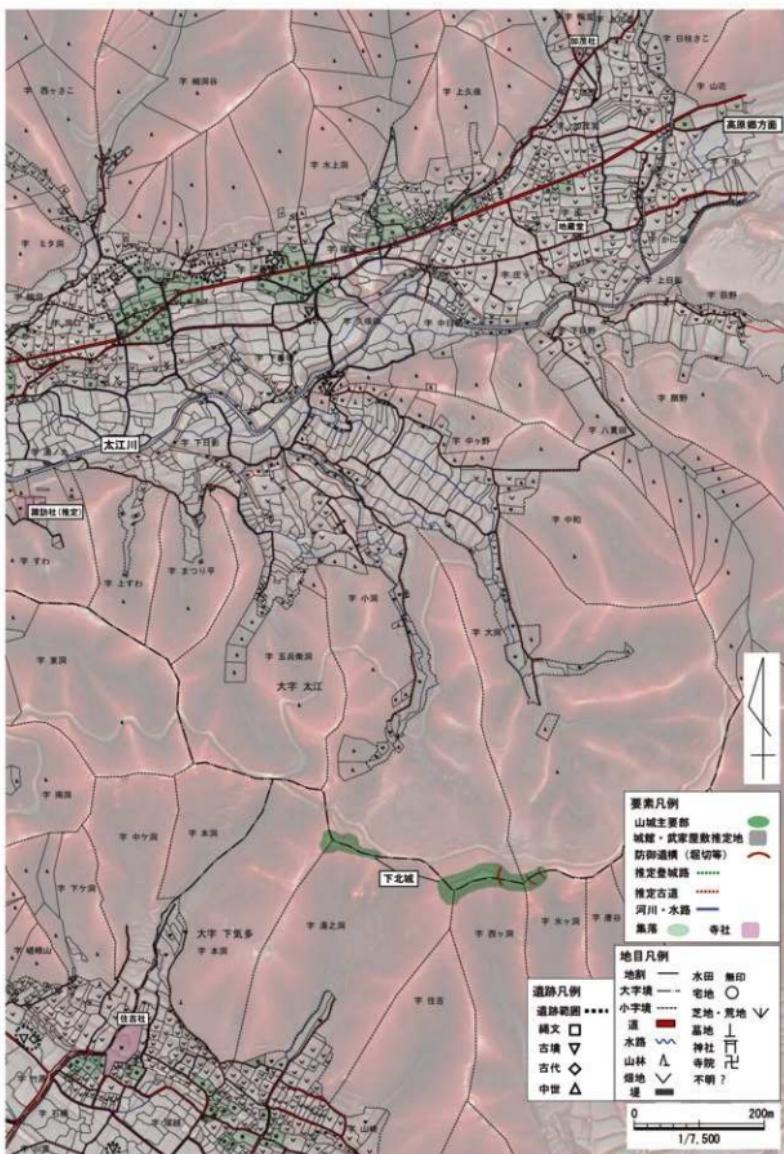
なお、小島城跡の東側の尾根伝い約 800m の地点には下北城跡が存在する。小島城跡とは反対方向の東側に堀切を設けることから、小島城との連続性が想定される（岐阜県教育委員会 2005）。

埋蔵文化財包藏地 小島城北側の太江地区に多くの遺跡が分布する。とりわけ、太江川右岸の段丘上には縄文から中世までの集落遺跡が広く分布する。さらに古代寺院の寿楽寺廃寺跡が所在するほか、周辺の山地には古墳群が分布する。そのため、北麓の太江地区周辺に武家勢力以前から断続的に人が利用し続けた変遷が想定できる。一方、小島城西側から南側にかけての地区は、遺跡の分布が極めて少ない。太江地区と違い、古墳群も盆地側には分布していない。この一帯は宮川・太江川の氾濫原であったことから、基本的に居住を避けた様相が推定できる。

字名 太江地区的字名として「城下」「上番場」「下番場」「御番屋敷」「左近」「細江」「多度宮」「すわ」「加茂宮」「高田」「神垣内」がある。「城下」は小島城直下の太江川左岸沿いに位置する。この場所は遺跡登録をしていないが、詳細分布調査において土器器皿片を採集しているため、武家勢力や小島城との関係が想定される。「上番場」「下番場」「御番屋敷」「左近」「細江」は武家との関連が想起される地名である。特に「左近」は当主が左近将監に任じられた小島氏との関連が想起される。「細江」は、「城下」の対岸に位置し、姉小路基綱が詠んだとされる「飛騨八所和歌」にある「細江」を想起させる。「多度宮」「すわ」「加茂宮」「高田」「神垣内」は神社に関連する名称と想定される。「神垣内」に所在する白山社（現在の高田神社）付近は小島氏の居館「十楽館」が存在したと伝わる。沼町地区には「一番町」「二番町」「三番町」という字名が見える。この町名を冠する 3 字は城側から番号順に位置し、字の土地形状が長方形に近いことから、計画的な街区の存在が想定できる。また、「一番町」は用水路を挟んで小島城側の「池田」と区画される。これらの字について、地籍図では道・水路に挟まれた範囲が「一番町」等の字限りとなっているが、増島や高山の城下町においては道を挟む両側の土地が街区単位となっていることから、街区は未完成であった可能性が想定される。このため、景観復原図では街路を挟む両側の街区に背割りを推定して「推定壱番町」等とした。杉崎地区には「柳御所」「細江」「多由田」「罫沙門」「大歳」「北野」「天神洞」「天王洞」といった字名が見える。「柳御所」



第158図 小島城跡周辺景観復原図(東側)



第159図 小島城跡周辺景観復原図（西侧）

は小島城の南西突端付近に位置し、沼町の3街区が集束する位置にある。「細江」は上記のとおり太江地区にも存在するが、杉崎地区の位置は「柳御所」の対岸に位置し、西光寺が含まれる。「多由田」「毘沙門」「大歳」「北野」「天神洞」「天王洞」はいずれも神社に関連する名称と想定される。

街道 小島城は越中方面から古川・高山方面に続く越中西街道と、高原郷方面から続く神原峠の合流点に位置する。宮川沿いを通行する越中西街道は、現在の国道の位置を基軸としつつ、大歳社東側は近世期には川沿いの道を通るルートであった。沼町の3街区の道は城の南側の山際と、二番町を通って柳御所に通じているものがある。神原峠に通じる現在の道路は、街区を区切る様相から新しいものである。古い段階の街道は、太江川沿いの道と多度社の南側から寿楽寺の北側を通る道があり、三反田・湯ノ丸・細洞の3字の境目付近で合流して峠方向に続いているものと想定される。

街区・集落 太江地区的集落は、谷川に沿って南北方向の道と水路を中心に宅地が点在し、その周辺に耕地が取り巻く構造である。谷川ごとに中規模の集落が点在し、中でも寿楽寺付近の集落が最も規模が大きい。杉崎地区にもまとまった長方形街区の集落が存在する。この街区は神原峠方向を意識した2筋の街路を基軸とし、太江川付近で沼町の街区に掠りつくように屈曲する。沼町地区は、城の南東側の山際の街道沿いに集落が存在する。城山と水平方向に数箇を冠する3街区が存在するが、これらは宮川・太江川の氾濫原であり、地籍図作成時点ではほぼ全域が水田である。さらに山塊の突端の杉崎地区との境（柳御所）付近で不定形であるが正方形状の区画があり、水路や道が集束する。3街区内の地割は、街路側へ間口を設ける短冊型地割を志向するが、東側は読み取れなくなる。『飛州志』の絵図ではこの付近を「小島町」として町場を想定している。さらに、一番町は街区と平行に山側に水路が通り、城郭側と区画される。このような区画のあり方や、ヨコ町型の3街区の構造的特徴は、高山や増島の城下町と同様と言える。さらに、大歳社の南東側の杉崎と接する沼町の正方形区画は「古屋敷」と伝わる。

寺社 寺院について、太江地区には寿楽寺が存在し、杉崎地区には集落の端を押さるように本龍寺・西光寺・淨慶寺が所在する。このうち淨慶寺は近世以降の創建であるが、本龍寺・西光寺は16世紀初頭の創建と伝わる。この2寺の伽藍方向は周辺に存在する長方形街区と軸線が合っていない。神社について、太江地区には加茂社・白山社・多度社が存在し、さらに字名や近世の絵図から集落の南側に諏訪社の存在が確認できる。杉崎地区には天満社・中之宮が存在し、沼町には大歳社と金刀比羅社が確認できる。寺院は主となる集落の中心を押さえるように、神社は広域の集落全体を押さえるよう点在している。

所見 小島城周辺は非常に諸要素が濃密な地域といえるが、北側の地域と西・南側の地域では空間構造のあり方に差異が見える。北側の太江地区は谷川を基軸に中規模の集落が点在し、これらの集落地は縄文～中世の遺跡の分布と重なる位置にある。さらに、城内全体を囲うように多数の寺社が存在している。特に寿楽寺や白山社の周辺が集落の規模が大きく、「城下」付近を含めた小島城との関連から、小島氏段階における武家勢力の利用が想定できる。小島城西・南側については前段階の遺跡は確認できない一方、計画的な街区の存在が確認できる。杉崎の集落は長方形街区によって構成され、端を押さえるように寺院が配置されている。この長方形街区と中世創建の2ヶ寺は軸線が合っていないため、

寺院と街区の設定は時期差が想定される。沼町は一番町、二番町、三番町という直線通路を基軸とした街区が存在する。これらの街区と小島城との位置関係はヨコ町型の構造である。さらに一番町の街区は、用水路を挟んで山側の地区と区画される。これらの空間構造は、金森氏が建設した高山城下や増島城下の構造と類似する。しかし、地割の設定が緩く、土地利用としてもこの一帯は近世以降水田であった。そのため、町場の区画を設けた段階で建設を取りやめた可能性が想定される。関連して小島城跡の主要部では、西側から南側を中心に限られた範囲で石垣が確認できる。この分布状況から、西・南側に建造を予定していた町場に向けて石垣を構築した様相が想定できる。

関連して、小島城周辺の空間構造を推測し、各要素の変遷を整理している（大下永 2021a）。小島城北側地域が小島氏段階の主な拠点集落であり、西側にも中世段階から集落が存在したと想定している。このうち、西側地域に存在する寺院関連の史料から、西側地域付近に「小島町」が存在した可能性が想定できる。遺跡の様相から北側の太江地区は古代以前から活発な人の営みがあったと想定される。このような前段階の地域における中心的な場所に、中世には寺社を含む集落が展開し、武家勢力（小島氏）の拠点としての利用も開始された想定される。その後、西・南側に新たな城下町建設が計画され、対応して山城の一部改修が行われたものと推定される。このうち、南側は未完成な様相が確認でき、近世以降町場としては存続しないことから、本格的に城下町として運用される以前に破棄されたと想定される。これらの西・南部における街区構造のうち、「城郭一（武家地）—（町人地）—河川」という配置関係や数詞を冠する3街区、水路によって街区を区画する等の特徴は、飛騨国における金森氏の拠点である高山・増島と共通している。このような共通項から、小島城の西・南側地区は金森氏段階の城下町としての一時使用の可能性が想定できる。

第4節 野口城跡 …第160図

自然地形 古川盆地北西部の盆地が閉塞する宮川右岸の山上に野口城跡が立地し、周辺の河岸段丘上に集落が存在する。宮川と小鷹利郷を流れる支流・殿川との合流点が城山の対岸に存在する。

城郭遺構（第79図参照） 野口城跡は3ヶ所の尾根の頂上にそれぞれ曲輪を設けている。最も広い平坦地を持つ南西部の曲輪1が主郭と考えられ、野口・袈裟丸の両区からの登城路が想定できる。曲輪1における発掘調査では、掘立柱建物の跡や土壘状の高まりを掘り込む柵状施設の跡を検出している（飛騨市教育委員会 2019d）。その北側に位置する2ヶ所の曲輪5・15は、北側に多重の堀切や敵空状塁群を設けている。これらの遮断線を形成する遺構は宮川方面の尾根には存在しない。このような野口城の構造から、高原郷方面や越中方面の街道・峠道を監視しつつも、東側の峠道をより厳重に警戒していた様相が想定され、盆地内部を守るような意識が読み取れる。

埋蔵文化財包蔵地 野口城周辺は他の拠点と比較して遺跡の分布は少ない。野口城西側の野口地区には、縄文時代・古代の散布地が存在するが、東側の袈裟丸地区の山麓部や集落付近に遺跡は確認できない。

字名 野口地区には城山の周囲に「宮ノ腰」「宮ノ前」「神ノ木」といった字名が見える。近世以降、野口地区に寺社の存在は伝わっていないが、関連する地名の可能性がある。袈裟丸地区には城山を中

心に「城山」「小路口」という字名が見える。「城山」はそのまま山城を指し、「小路口」は峠道の入口付近にある。北部の末真地区にも「かうじ」「かうじ洞」といった地名が残るため、主要な峠道としての歴史的位置づけが想定される。袈裟丸地区的集落付近には「宮ノ下」「寺ノ下」「本道洞」「懇けん名」「祖父あん」「そふ」「奥御堂」「岡前」といった字名が見える。「宮ノ下」「寺ノ下」「本道洞」は袈裟丸の山際の集落付近に位置する。「宮ノ下」「寺ノ下」は寺社関連の地名と想定される。「本道洞」は寺院の「本堂」という意味の他に、峠道を含むことから字の通り「本道」としての由来も想定できる。「懇けん名」「祖父あん」「そふ」「奥御堂」「岡前」は袈裟丸地区東部の杉崎地区との境に所在する岡前館の関連地名と想定される。「岡前」は「御構」が変化したものと想定され、「奥御堂」は寺院を想起させる。「祖父あん」は、『飛州志』で「時々庵」と伝わる寺院跡が想定される。「そふ」は「祖父あん」の当て字の読みが変化したものであろうか。「懇けん名」も詳細は不明だが、寺院の荘園を想起させる。

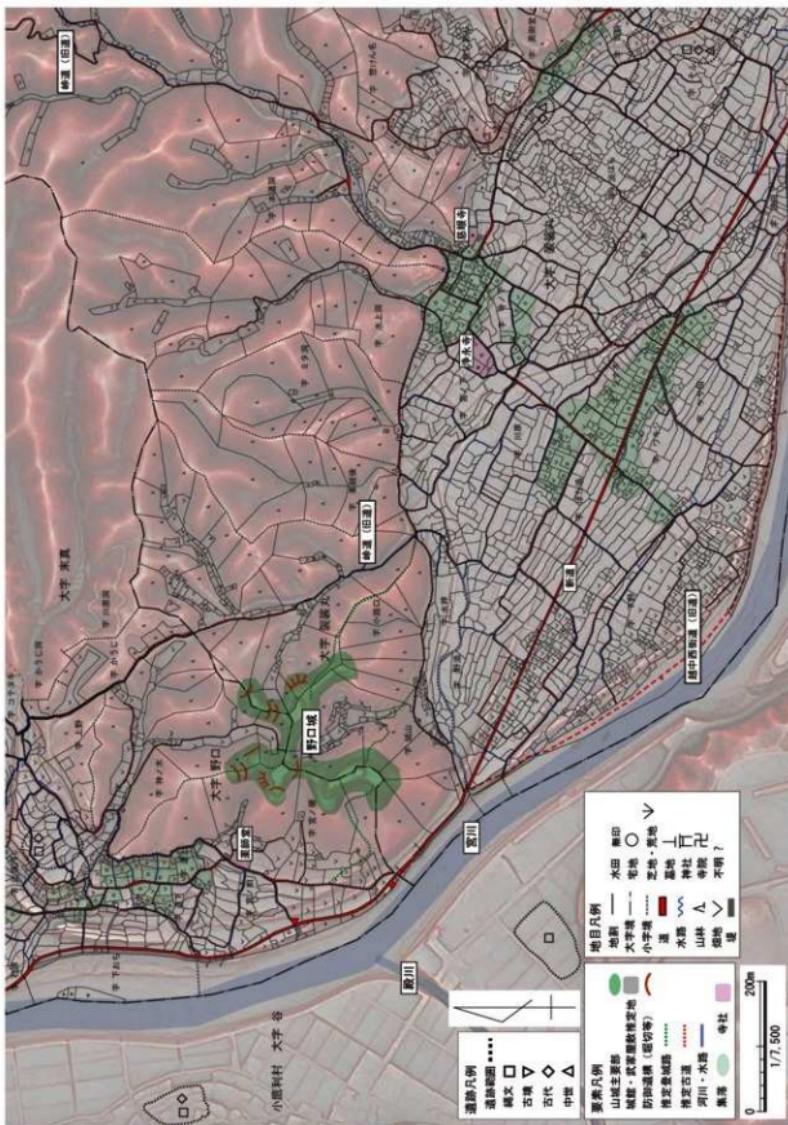
街道 平野内を東西に直進する現在の国道は近代以降の建設であり、近世の村絵図等によると、古くは宮川の右岸堤防上に主要街道の越中西街道が通行していたと推定できる。一方、山際の河岸段丘上にも道が通行する。この道は野口城東側の峠を通り、寺院が存在する袈裟丸の集落を経て岡前館方面に続いている。古い段階の集落や峠道を伴う道であることから、宮川沿いの越中西街道よりさらに古い段階の街道と想定される。関連して野口城の城郭遺構の配置は、近世段階の街道や現在の国道が存在する川沿いよりも、野口城西側を通る峠の通行の監視を重視している様相が想定される。

街区・集落 袈裟丸地区は北西方向を基軸とする低位段丘に沿った道や区割りが基礎となっている。山際の集落は低位段丘上に展開し、端に寺院（慈眼寺・常永寺）が存在する。また、常永寺から伸張する南方向の直進通路と平野部の新道の交点を基準として集落が存在する。この新道沿いの集落は近世絵図でも確認できるため、新道に先行する集落である。しかし、古い街道や寺院の取り付きから山際の集落より新しい段階に展開したと想定される。また、この集落の東西には方格街区が見える。街区構造から中世莊園としての利用が想定できるかもしれない。野口地区は、段丘に沿って山際と平野の越中街道沿いにそれぞれ集落が展開する。袈裟丸集落と比較すると野口城に近い位置にあるが、明確な街区構造は確認できない。

寺社 袈裟丸地区と杉崎地区の境に所在する岡前館を中心に姉小路氏や中世の密教寺院である宮谷寺関連の伝承が残り、字名の検討の通りこれらの存在を想起させる字名が残る。山際の袈裟丸集落の北東と南西端を押さえる位置にそれぞれ慈眼寺と淨永寺の2寺が存在する。とともに16世紀以降の創建であるが、集落に対応する配置から、古い段階には前身寺院の存在が想定できる。野口地区には寺社が存在しないが、集落から野口城に至る途中に薬師堂が存在する。

所見 畫状空堀群や多重の堀切等の城郭遺構から想定される野口城の構造は、古川盆地の出入りを監視するもので、特に城山東側を通る峠道の通行を意識している。そのため、城が存続した時期には宮川沿いを通行する近世以降の越中西街道よりも、山際を通行する道を警戒していたものと推測される。

山城の構造と符合するように、野口地区と比較して袈裟丸地区に姉小路氏関連の伝承や寺院が多い。一方、位置としては野口城に近い集落は野口地区であり、袈裟丸地区的集落は山城から約500m離れた



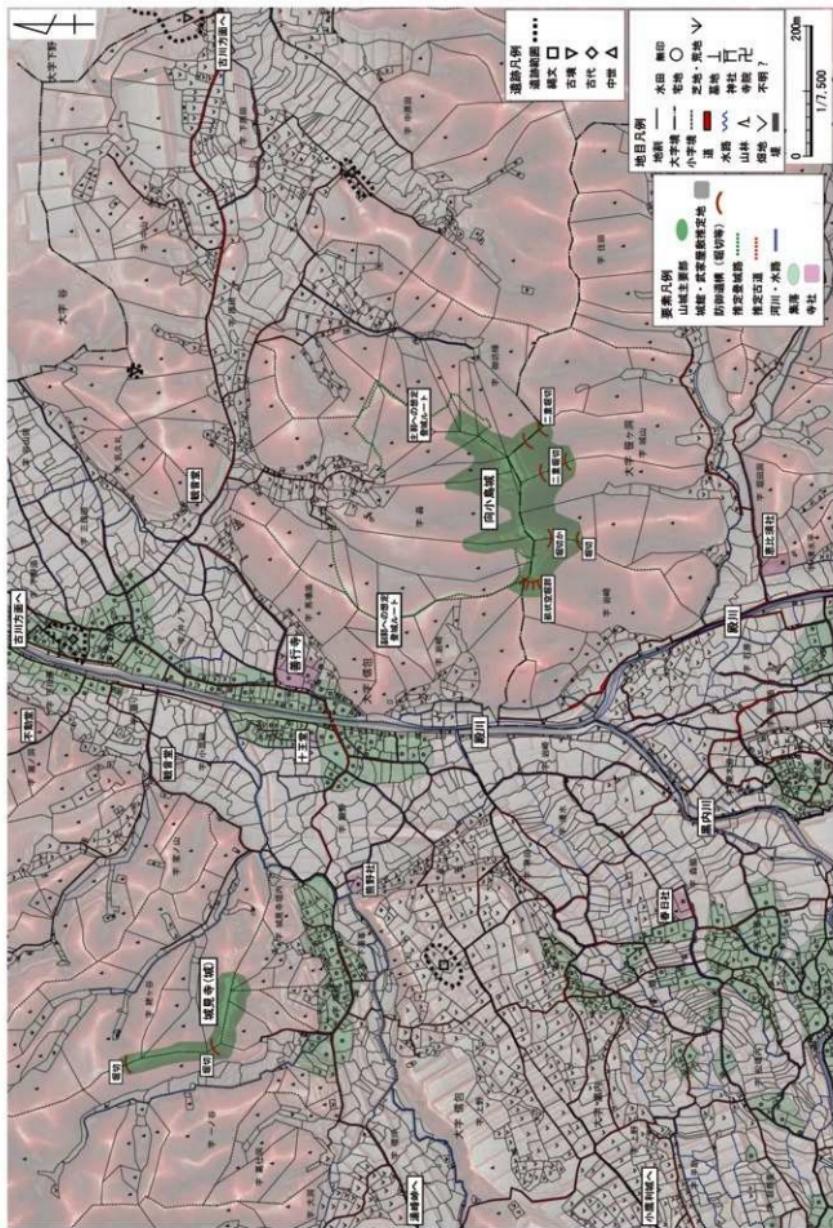
位置に存在する。そのため、袈裟丸・野口地区のそれぞれの集落に違う役割りが付与されていた可能性が想定される。しかし、両地区においては明確な武家屋敷と想定される地名や地割は確認できない。袈裟丸地区内に、莊園の可能性が想定される街区は見えるが、その他に町場構造が明らかな街区は確認できない。このことは古い段階の集落が継続的に利用されたことを示唆する。そのため、武家勢力がこの地区に一定の計画性をもって拠点地域を形成した可能性は低いものと想定される。一方、野口城跡における発掘調査によって、主郭からは複数の柱穴を検出するとともに大量の土師器皿が出土し、軍事的な様相が強い網張り研究の成果とは違った側面を持つことが明らかになった。野口城を含む宮川右岸の地域（小島郷）は基本的に姉小路氏が3家に分家したうちの一角である小島氏の領域である。そのため、この城は戦国期には小島氏の本拠地を区切る境目の城としての役割があったと考えられ、さらに発掘調査の成果から軍事以外の機能を有していた時期があった可能性が想定できる。16世紀後半には、小島氏は三木氏の傘下に入ることから、古川盆地の出入りを監視する機能が強化され、前述の遮断線を形成する遺構群を中心に改修された可能性が想定できる。

第5節 向小島城跡・小鷹利城跡 …第161・162図

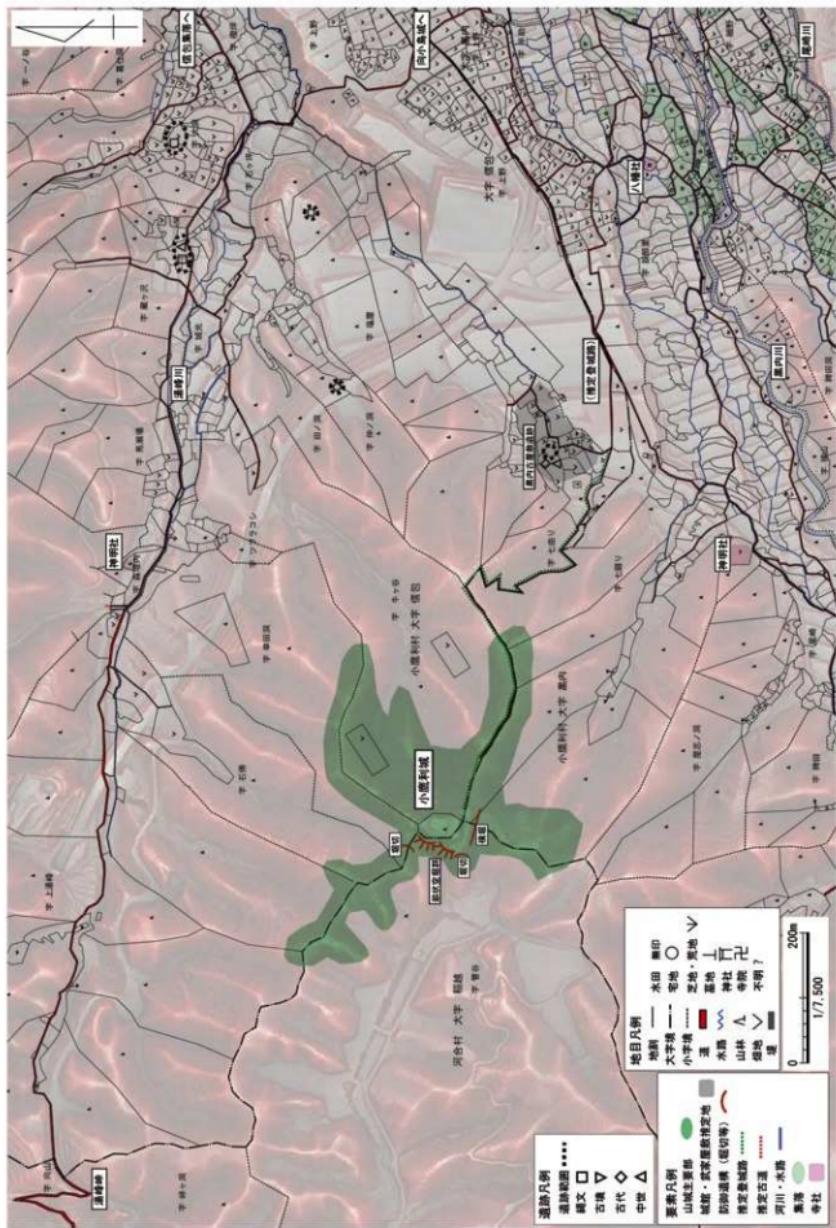
この2城については、同一地域に存在するため、本節で一括して整理する。

自然地形 向小島城跡・小鷹利城跡の周辺地域は古川盆地北西側の山間部に位置する。殿川やその支流の黒内川・尾崎川・向山川によって楕状に低地が形成され、各河川沿いに信包・笹ヶ洞・寺地・黒内といった集落が展開する。このうち小鷹利城跡に近い黒内集落は楕状低地の中央に位置し、信包・笹ヶ洞集落より高地に位置する。向小島城跡は殿川の東側に広がる丘陵地帯の西端に位置する。この地区的水利として、基軸となる殿川は南側の山間部を抜けて寺地・笹ヶ洞地区を流れ、流路を東側に変えて信包地区内の細長い沖積地を経て古川盆地北端で主流の宮川に合流する。黒内集落の西側山間部を源とする黒内川は笹ヶ洞と信包の中間で殿川に合流し、さらにその西側では、南側の山間部から流れる向山川と尾崎川の2河川が合流する。信包集落付近では、湯峰峠方向からの谷川も合流している。このように信包集落付近で多くの河川が集束し、これらに沿って耕地が展開している。河川沿いや低部は主に水田として利用されるが、向小島城跡と小鷹利城跡の間に存在する丘陵部は水捌けが良い為か、多くは畠地として利用される。

城郭遺構（第82・85図参照） 向小島城跡は向（小鷹利）氏の拠点集落と想定される信包地区の南東に位置し、尾根を境に南側の笹ヶ洞地区と接する。白川郷方面の湯峰峠から信包集落へ続く街道を望み、古川盆地の出入りを監視している。2ヶ所ある尾根の頂上部のうち明瞭な平坦地を持つ東側の曲輪1が主郭と想定される。西端の尾根には畝状空堀群23と横堀24が存在し、南側の複数の尾根には堀切（14・15・17・27・28）を設けている。向小島城跡は平坦地の造成状況の甘さや畝状空堀群の存在から軍事的要素が強く、臨時に築かれた可能性が示唆されてきた（岐阜県教育委員会2005）。しかし、主郭の発掘調査によって、掘立柱建物跡を検出し、土師器皿片・瀬戸美濃丸皿・瀬戸美濃天目茶碗といった遺物が出土した（飛驒市教育委員会2019b）。そのため、一定期間の武家勢力の居住や使用が想定される。また、曲輪1の発掘調査で判明した南側切岸の大規模な造成の状況や北側の造成の甘さ、



第161圖 向小島城跡周辺量観測図



第 162 図 小鹿利城跡周辺景観復原図

微地形表現図で読み取れる北側尾根道の取り付きから、向小島城跡は北西部に位置する信包集落と親和性が高かったと想定される。すなわち、北側を拠点地域、西から南側を敵正面と捉えていたものと推定される。なお、向小島城跡と信包集落を挟んだ位置に城見寺城跡が存在する。城見寺城跡は、西方向の尾根沿いに2ヶ所に堀切が存在する。主郭は段差のない細長いプランで西側には池跡の可能性がある窪地を認める等、城郭以外の使用も想定できる。「城見寺」と伝わる中世期の山寺の存在が想定できる。

小鷹利城跡は古川盆地の西端に立地し、円周状に廻る山塊のうち最も盆地側に張り出した最高所に位置する。主郭と想定される曲輪1付近で古川町信包・黒内、河合町稻越の3区が接している。北側に位置する湯峰峠を監視する立地であり、主郭西側の厳重に構築された歎状空堀群13・横堀等の存在から、西方面から古川盆地内に入る敵に備えた構造となっている。このような城郭遺構の様相から金森氏侵攻に備えた三木氏勢力による改修が推定されている(岐阜県教育委員会2005)。一方、発掘調査によって曲輪1では礎石建物跡を検出し、珠洲焼・青磁碗の他、白磁の端反皿等が出土した。これらの遺物の年代から、向氏段階の利用も想定されている(飛騨市教育委員会2019c)したがって、小鷹利城跡主郭で検出した礎石建物と、上記の歎状空堀群13等の城郭遺構の一部には時期差が想定される。

埋蔵文化財包蔵地 現在の集落と完全には重ならないが、段丘地形の所々に縄文から古代にかけての遺跡が分布する。小鷹利城の東側・黒内地区には黒内細野遺跡が存在し、縄文時代の集落跡ながら発掘調査では古代から中世にかけての遺物が出土した。近世以降も集落が継続するため、時代を通して人が居住した場所と言える。また、小鷹利城の東麓には黒内古屋敷遺跡が存在する。グラウンド整備によって現在は滅失しているが、過去には中世期の土師器皿片を探取している(飛騨市教育委員会2019a)。向小島周辺について、北西部の殿川下流に古代の散布地が存在する。また滅失等によって詳細な位置は不確かではあるが、向小島城西側の峠沿いには縄文から古代にかけての遺跡が分布する。

字名 信包地区には「殿野」「馬場添」「城見寺垣内」「七曲り」という字名が伝わる。このうち、「殿野」「馬場添」は街道の収束する殿川沿いの地区であり、武家や向氏との関連を想起させる。「城見寺垣内」は城見寺城の一部及び南麓地区である。「七曲り」は、小鷹利城東麓部に位置し、山城に至る大字境の赤道が所在することから、登城路の存在を想起させる。さらに、前述の黒内古屋敷遺跡も当該地に所在する。赤道を挟んで黒内地区側にも「七廻り」という字名が残り、神明神社が存在していた。この「七曲り」「七廻り」付近については、「明治三年信包村後風土記書上」(古川町1984、636頁)に伝承の記載がある。「小鷹利ノ城」の項で「寅方へ向。同山ノ麓巳ノ方ニ下屋敷有。桜之御所ト云。今ニ此處二百間四面ノ土手有」とある。さらに、城の付近に「物見之御所」といったものがあることを紹介している。なお、同じ文献で「向小島ノ城」については別名「柳之御所」と言い、近辺の「丸山」というところに「向小島ノ別殿」が存在したと伝えている。景観復原図の範囲外ではあるが、向小島城の南西約1km地点(大字黒内字丸山)に「丸山」と呼ばれる独立丘陵の小山が存在するため、その地点を指していると想定される。

街道 この地域の街道は、基本的に河川に沿って展開している。信包集落から古川方面へは向小島城の北側の丘陵上を通るルートと、殿川沿いに北上するルートがある。西方向の白川郷方面へは城見寺城南側を通って湯峰峠に至る。また、信包・黒内の大字境の道は信包の中心集落から両大字の「上野」を経由し、小鷹利城の東側尾根沿いを通り、主郭(曲輪1)まで続いている。そのため、武家の拠点集

落と小鷹利城を結ぶ往時の大手道の可能性が想定できる。また、殿川上流を巡る道は川上郷（現：高山市清見町）方面の峠道に通じている。

街区・集落 向小島城周辺の集落として、信包の中心集落は殿川の流路に沿って展開し、向小島城の対向にある城見寺城南麓にもまとまった集落が存在する。さらに向小島城南側には笹ヶ洞集落が展開する。さらに、向小島城と小鷹利城の間に立地する丘陵部の広い範囲の小段丘面には黒内集落が展開する。

寺社 小鷹利城東麓の「七廻り」に神明社が存在した。さらに黒内集落東端に位置する「奴部里」には春日社が存在し、同字の西端には八幡社が存在した。このうち八幡社と神明社は明治初期に春日社に合祀している。信包地区には集落の中心に善行寺（現在の向善寺）が存在する。善行寺は、本尊裏書から「小鷹利郷野々侯」において開基とされ、永祿年間に現在の場所に移転した伝承がある。集落中心部に十王堂があり、集落の境界付近に觀音堂が2ヶ所と不動堂が1ヶ所存在した。向小島城と城見寺城の中間には熊野社が存在し、湯峰峠沿いの「森垣内」にも神明社が存在した。その他、景観復原図の範囲外であるが、東側の丘陵から古川盆地へ降りる丹生坂付近の前方後円墳上には、かつては八幡神社が立地していた。また、向小島城南側の笹ヶ洞地区内の「清水平」には恵比須社が存在する。城見寺城に存在したと伝わる山寺は「明治三年信包村後風土記書上」によると真言宗で上北村の清峰寺末寺で、文明年間に廃絶した姉小路氏の菩提寺とされている（ただし清峰寺は天台宗）。以上の宗教施設のうち、十王堂や城見寺等は小鷹利氏のゆかりと伝わる。

所見 向小島城・小鷹利城については、向（小鷹利）氏の在城が伝承として伝わる一方で、縄張り研究によって、16世紀後半の利用が想定されてきた（岐阜県教育委員会 2005）。特に峠方向に構築した畠状空堀群と横堀のセットや多重の堀切は野口城と合わせて金森氏侵攻直前の在地勢力による改修が想定されている。しかし、小鷹利城跡における発掘調査によって、向氏段階に山上において一定の定住的な利用を行っていた可能性が想定される。いずれにせよ、山上部で居住可能な平坦地は限られるため、山麓部の拠点集落を考慮する必要がある。向氏拠点の詳細な位置や規模は不明であるが、集落として発達した形が見えるのは向小島城の北西に展開する信包集落付近と言える。特に各方面からの街道・水路が集束する「殿野」周辺は街道・水利が集中する場となっている。また、この地区的殿川右岸に位置する善行寺（現：向善寺）は、北西角で水路が分岐し、北側の広大な農地への水の供給を一元的に管理する立地である。善行寺は天文年間に「小鷹利郷野々侯」（黒内村内と伝わる）で道場を開基後、永祿年間に現在の場所に移ったと伝えられる。付近に方形プランの敷地が他には見えないことがあり、寺院の前段階として武家勢力による利用も想定できる。さらに向小島城と集落を挟んだ対向に位置する城見寺城についても、山城と前後して中世寺院の存在が想定される他、南麓にもまとまりのある集落が認められる。以上から、殿川流域の善行寺・殿野周辺から城見寺城南麓にかけての範囲に武家の拠点集落が存在した可能性が想定される。

一方、小鷹利城付近については、対応する拠点集落の存在は確認できない。しかし、東麓の古屋敷跡伝承地（黒内古屋敷遺跡）は山麓部の拠点の存在が想定できる。一方、地割パターンの検討からは、大手道から派生する小路や小規模な畠地の集合が確認できるが、明確な方形区画は見えない。ただし、推定される登城路に面していることから、山城を管理する上で重要な役割を果たした場所である可能性は想定できる。

向小島城・小鷹利城周辺の要素は城郭や集落を中心として広く分布している。このように密に要素がまとまっていない方が、この地域の空間構造の特徴と言える。しかし、山上部の建物跡の存在や大規模な造成を行った城郭遺構の様相から、中世の各段階において山城が重要な役割を果たした可能性が想定できる。

第6節 周辺地域の武家拠点の様相

武家拠点形成の傾向をより広域に検討するため、これまで検討した古川盆地の5ヶ所の拠点周辺に加え、飛騨国内におけるその他の武家拠点についても構造・変遷を整理し、比較検討を行いたい。

岡前館跡（飛騨市古川町杉崎）…第163図

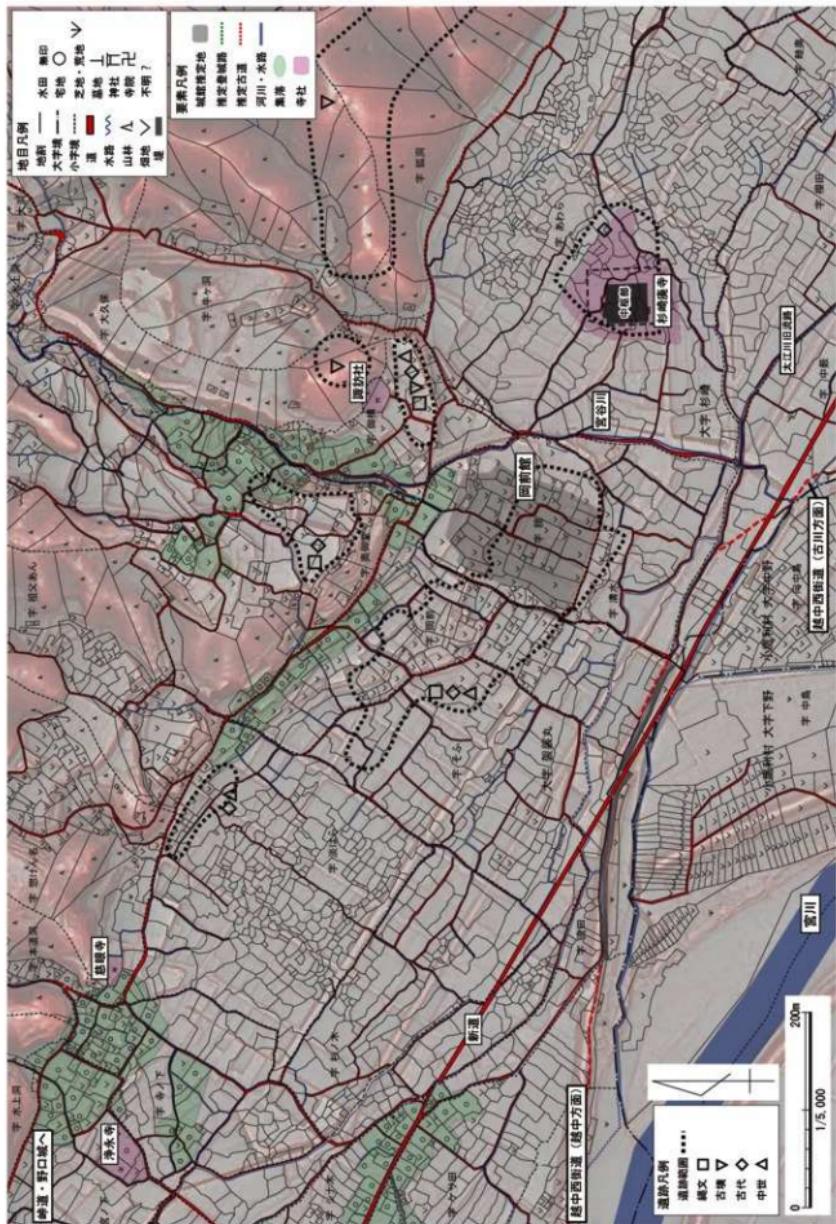
姉小路氏の館と伝わり、古川盆地中部の平野に張り出す舌状の段丘上に立地する。周辺の段丘上に縄文から中世にかけての遺跡が分布し、段丘下には古代寺院の杉崎廃寺跡が所在する。「館」周辺が姉小路氏の館跡と推定され、南北約200m・東西約160m範囲の方形プランである。周辺において発掘調査は実施していないが、詳細分布調査において多くの土師器皿を発見している（飛騨市教育委員会2019a）。これらは土師器皿の編年検討により、15世紀代における姉小路氏の利用が想定されている（三好清超2019a）。

岡前館周辺は、氾濫原を避けた段丘上に集落や寺社が点在した空間構造が想定できる。館北側の谷川沿いに集落が形成され、西側の袈裟丸方面の街道沿いにも同様に集落が形成される。さらに周辺の字名として「御構」「岡前」「奥御堂」「祖父あん」「懃けん名」といった武家屋敷・寺院を想起する地名が残る。一方、集落の配置構造は館と一体ではなく、地割パターンの検討によつても、館の成立によって集落が整理された形跡は想定し難い。そのため姉小路氏は、古代以前から断続的に土地利用が行われた好立地の場を再利用する形で拠点を形成したものと想定される。

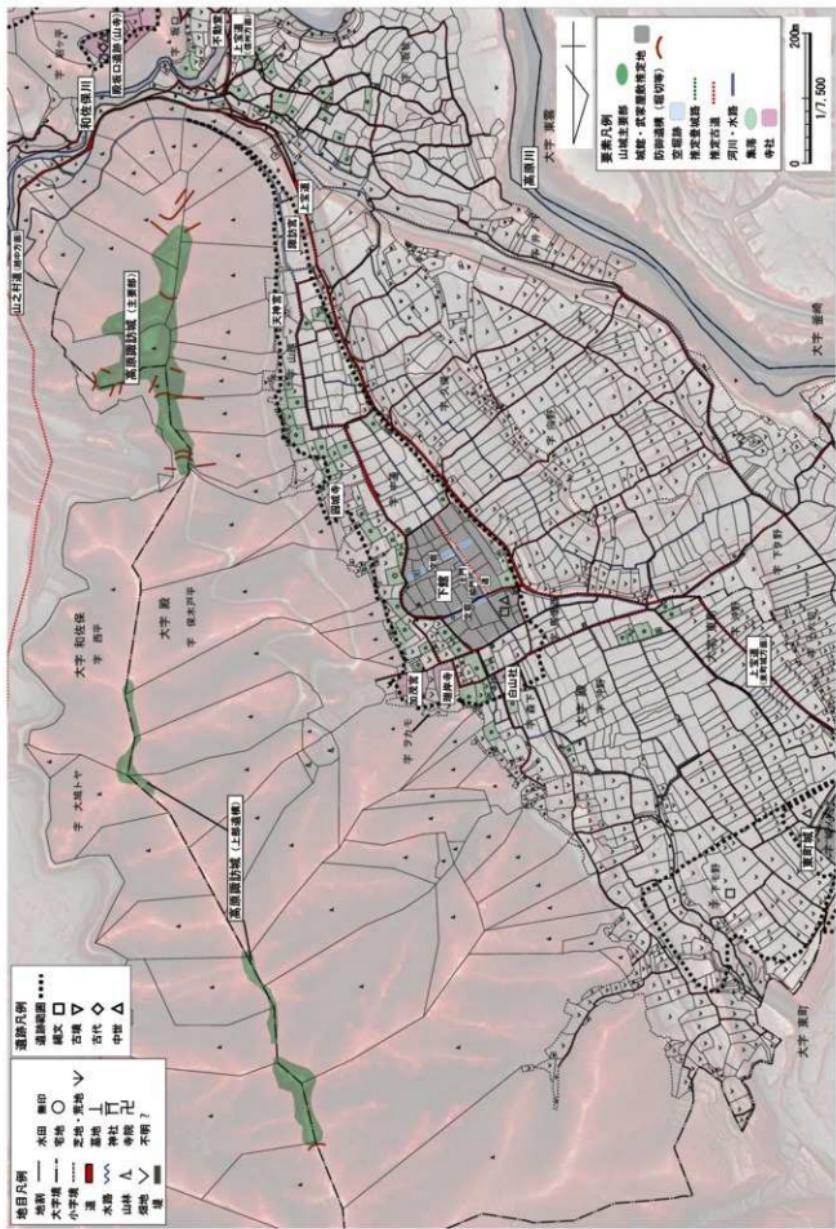
江馬氏下館跡・高原諏訪城跡（飛騨市神岡町殿）…第164図

高原郷の領主・江馬氏拠点である。高原川右岸河岸段丘上に下館が位置し、背後には本城とされる山城の高原諏訪城が存在する。これまでの発掘調査によって拠点周辺は13世紀後半には土地利用が始まったと想定され、館は14世紀末から16世紀初頭までの存続年代が想定される。また、館は15世紀末から16世紀初め（下館II B期）に建て替えを行つて最盛期を迎へ、16世紀中頃に廃絶して他所に移転したと想定している（飛騨市教育委員会2010b）。さらに周辺部の試掘確認調査の結果によつて、館の成立とともに人々が集住し、同時期に館周辺の集落が形成されたと想定している（飛騨市教育委員会2020）。拠点地域の空間構造については、小島道裕や大平愛子による検討がある（小島道裕1995、大平愛子1997）。

下館と周辺集落の配置関係を見ると、段丘上面に展開する集落の一段低い段丘面に館が位置している。さらに街道（上宝道）が館の直下に位置する段丘崖を通っている。この街道は集落を伴っていない。また、街道から分岐した脇道が館門前の道まで接続している。このように館と街道は密接に関連しているが、一定の距離感が認められる。さらに寺社が下館周辺の村落の四至に存在している。この寺社に囲まれた範囲内に武家拠点や宅地が集中して点在している。このような集落の基本形が下館の成立



第163図 岡前館跡周辺景観復原図



にともなって形成されたと想定される。この様相は拠点形成にともなう既存集落の形態変化が認め難い岡前館と相違する。

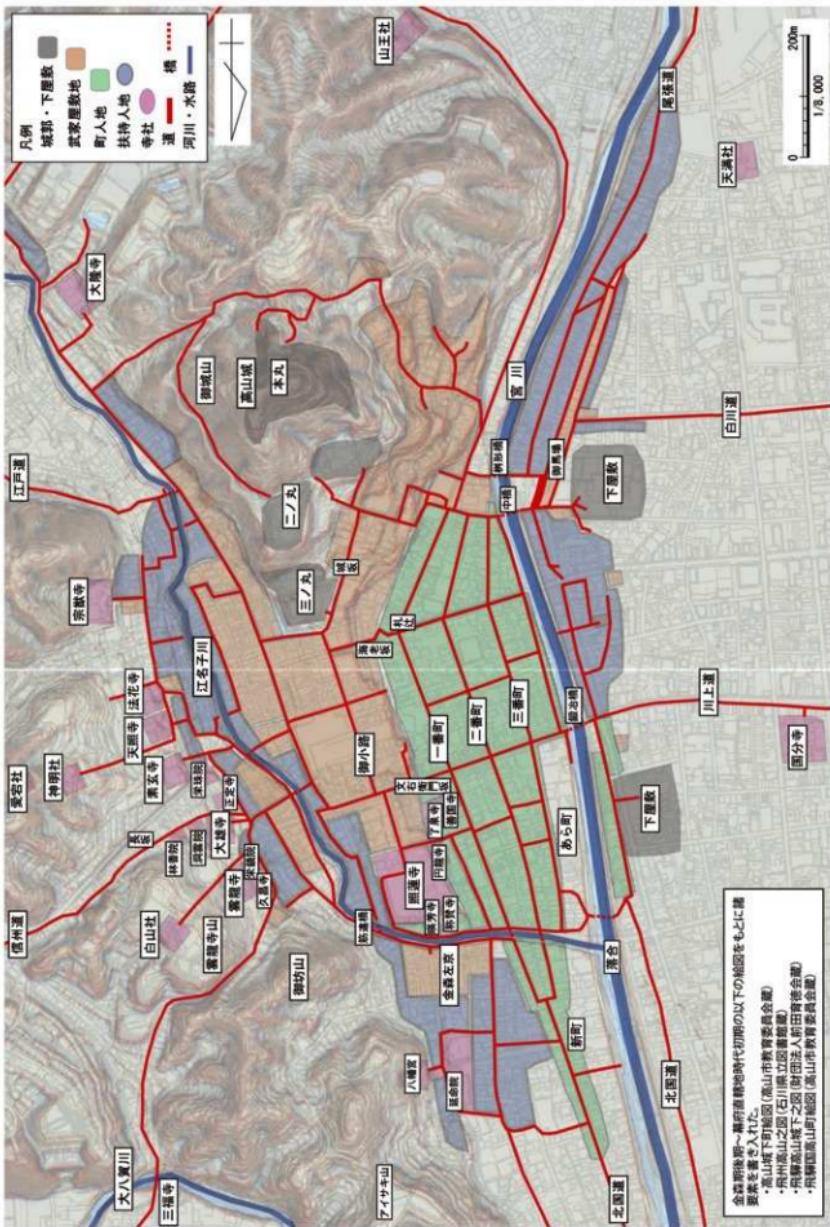
下館が16世紀中頃に廃絶したと想定される一方で、高原諫訪城は天正10年（1582）まで存続していたことが文献で確認できる（第3章第3節4-（5））。この下館との時期差について中井均は、東町城に拠点が移ったという見解の中で、高原諫訪城については、①維持管理継続説・②廃城説（文献に登場する諫訪城は別の城という理解）・③一時廃絶後再利用説を挙げ、このうち維持管理継続説を推して、東町城への一元化の過程の中で捉えている（中井均2020）。高原諫訪城の主要部の位置は、下館や集落からやや離れた位置であり、直上にやや単純な構造の砦跡が存在する。同じ山城の要素であっても、時代による変遷が想定される。

高山城跡（高山市）…第165図

飛騨国内における金森氏の本拠であり、飛騨高山藩主の居城となる。築城は金森氏の飛騨入国から数年後の天正15年ごろとされる。高山城周辺の地籍図を収集できなかつたため、『高山市史』（高山市教育委員会2012）所載の複数の城下町絵図をもとに金森氏時代の景観復原図を作成した。高山城は、高山盆地を貫流する宮川と支流・江名子川の合流点付近に立地する。高山を起点に江戸・尾張・越中・信州の各方面への主要街道が分岐するため、飛騨における交通路の中枢的な場と言える。

高山の城郭・城下町の要素配置は、飛騨国における金森氏の拠点形成という観点から、ある程度定型的に捉えることができる。城郭は山上に位置し、武家地は宮川と江名子川の浸食によって形成された城山北麓に伸びる河岸段丘上に展開する。町人地は、武家地西側の宮川・江名子川によって囲まれた空間に存在し、武家地と町人地は深い段丘崖で区画される。扶持人・下級武士の屋敷地はこれらを取り巻く外周に位置する。江名子川以北の街道沿いは「新町」とあるとおり、街道に沿って二次的に展開したものと想定される。寺社の配置について、飛騨における真宗の最大勢力であった照蓮寺は武家地の角で城郭の対向に位置している。さらに近世に入ると、江名子川を挟んだ位置に金森家分家の左京家屋敷が置かれる。これらは金森氏の真宗勢力に対する警戒的な姿勢が入国直後から継続していた表れと捉えることができる。真宗以外の宗派の寺院は東山に集約して寺町を形成し、宮川対岸には真言宗の国分寺が存在する。さらに神社が各方面的境界付近に位置している。高山城は、中世期に天神山城として在地勢力が利用したと伝わるが、その実態は不明である。また、周辺における中世以前の遺跡の分布はまばらである。少なくとも城下町の範囲内については、中世以前には町場としての利用は確認できないため、金森氏段階になって新たに城下町を建造したものと考えられる。

高山城下の構造は「城郭一武家地一町人地一河川」という階層に従つた明確な区分けが認められる。さらに町人地には、武家地側から順に一番町・二番町・三番町（一之町・二之町・三之町）という街路に沿つたヨコ町型の街区設定が確認できる。このうち、一・二番町筋に尾張へ越中方面の主要街道を取り込んでいる。また、「高山城下町絵図」（高山市教育委員会2012、22-23頁）を確認すると、三番町の下流側は「あら町」とあり、町屋が未形成な様相が確認できる。三番町は当初から基本となる街路を設定していた可能性は想定されるが、一・二番町と比較すると町屋の形成は遅れたものと考えられる。以上に示したような、地区や寺社の配置関係、町人地内部の3街区の形成といった要素は、飛騨における金森氏城下町の基本的特徴として捉えることができる。



第165圖 高山族下町黑髮織紋原因

増島城跡（飛騨市古川町）…第166図

姉小路氏城館跡と同じ古川盆地に位置し、この地域における金森氏の拠点城郭として建設されたと想定される。古川城の1.5km北東に位置し、小島城の2.5km南東に位置する。高山からは北東約15kmの位置にあり、越中と高山を結ぶ越中西街道とその脇街道の結節点に位置している。城郭・城下町は宮川と支流・荒城川の合流点付近の河岸段丘上に展開し、地区内の高低差は緩やかである。増島城は発掘調査と近世絵図の比較検討によって、曲輪や堀の範囲が明らかになっている（飛騨市教育委員会2010a）。増島城の廃城後は、社地となる本丸橹台を除いて主に耕地として利用され、曲輪跡が畑地、堀跡は水田を基本として利用されていた。城は本丸の東西に曲輪が配置され、西側の曲輪（三之丸）は武家地に接する。町人地から直接城郭に至る道筋は無く、高山と同様に身分階層に基づいた配置構造となっている。

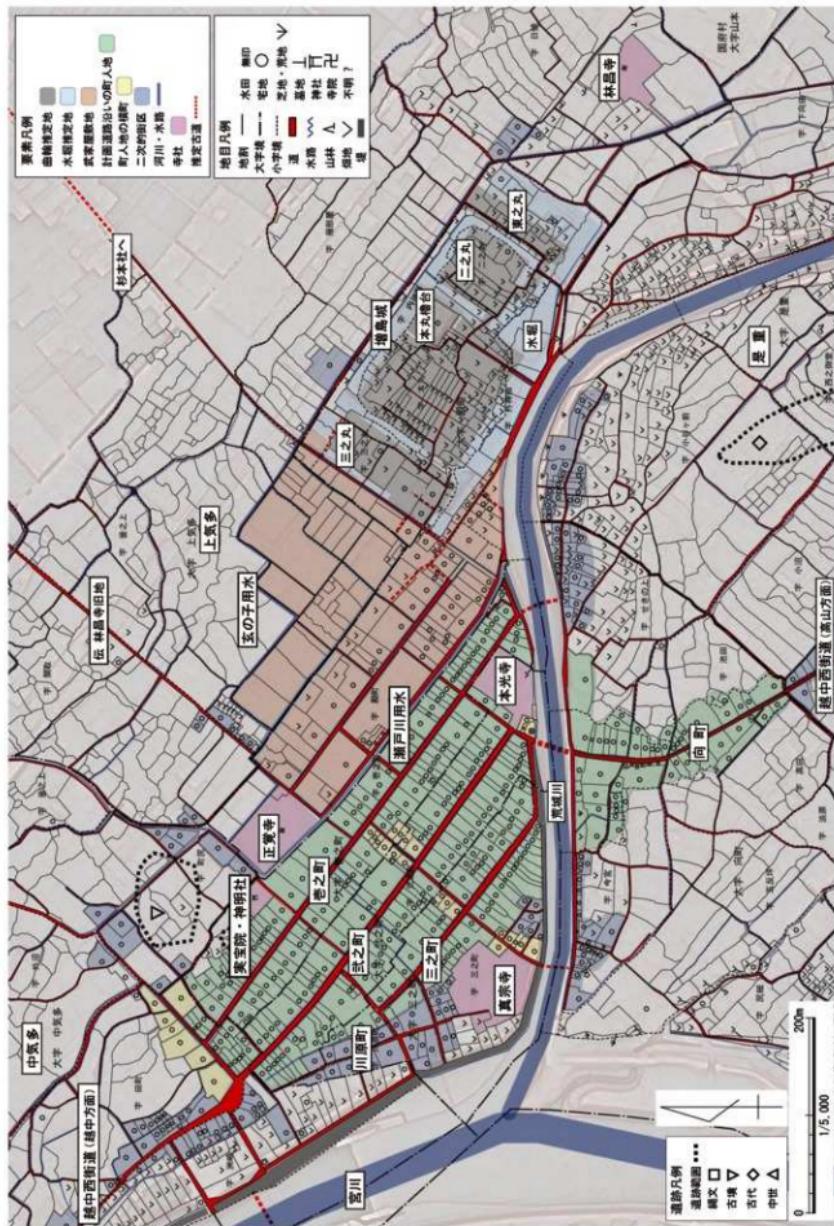
周辺は中世以前の遺跡の分布が希薄であり、高山と同じく新規建造の城下町と想定される。城下町内部の各要素の配置関係は城郭・武家地が並列に位置し、武家地と用水（瀬戸川用水）に挟まれた宮川沿いの空間に町人地が位置する。町人地は武家地側から壱之町・弐之町・三之町という街路に沿ったヨコ町型の街区が確認できる。これらの街区は短冊形地割と長方形街区のセットが確認できる。さらに町人地の弐之町筋には越中西街道が取り込まれている。計画的な街区設定と同時に、主要街道の付け替えを実施している。

以上のように、増島城下は、「城郭一武家地一町人地一河川」という配置関係、町人地の数詞を冠する3街区、町人地（弐之町）内部に主要街道を取り込むといった複数の要素について、金森氏本拠の高山との共通性を見出すことができる。

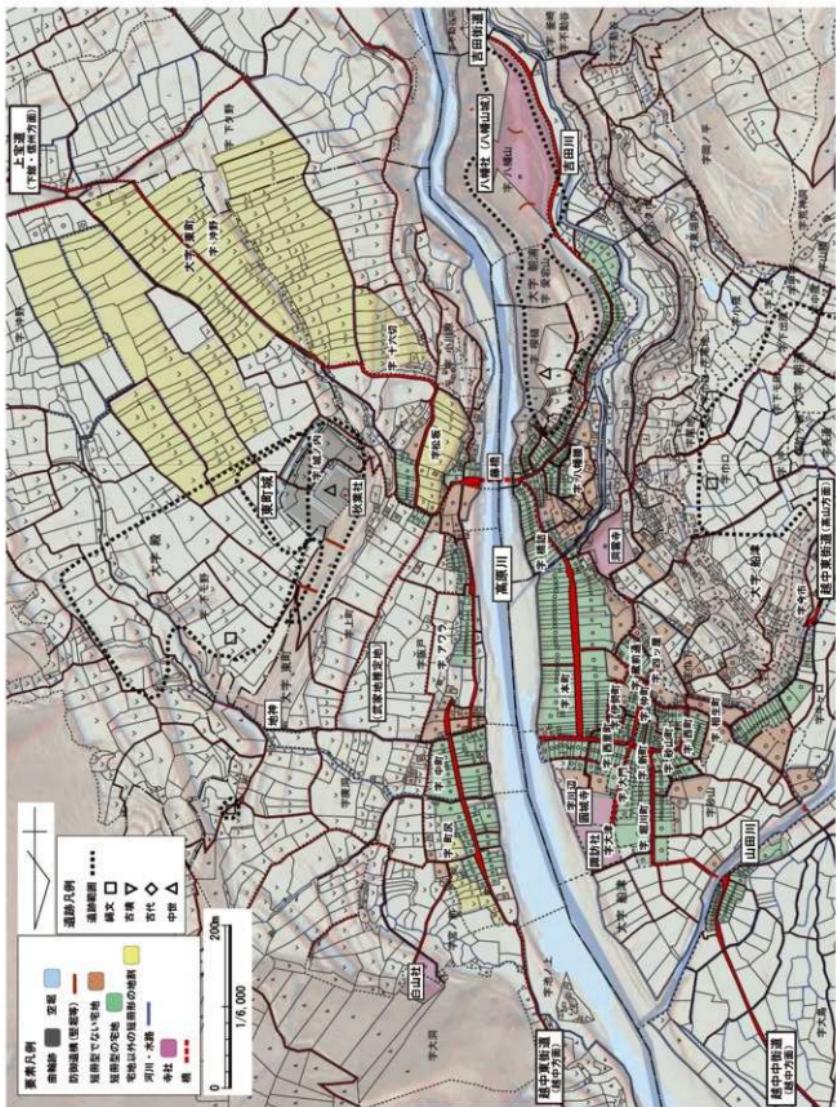
増島城下の寺院の配置について、武家地・町人地の街区を押さえる位置に真宗の3ヶ寺が存在している。このうち正覚寺（現在の円光寺）は武家地の端かつ城郭の対向という高山の照蓮寺と似た配置関係にある。また、街道の結節点に位置する町人地の最上流側には本光寺が位置する。さらに正覚寺と町人地を挟んだ対向の位置にある河川の合流点付近には真宗寺が存在する。正覚寺と真宗寺の間に軸線が描わぬが横町筋が通っている。一方、城下町の周縁部には真宗以外の寺院が位置する。金森可重の実父・実母の菩提寺と伝わる林昌寺は禪宗であり、城郭の東側・城下町外側に位置する。真言宗寺院の実宝院（後の福全寺。明治初期に廃寺）は、正覚寺と瀬戸川用水を挟んだ対向の位置に存在した。以上の寺院の多くは古川盆地内から移転した伝承を持つ。寺院配置は高山と異なる点もあるが、真宗寺院を城下町の内部に取り込み、それ以外の宗派の寺院を外郭に配置する点は同様であり、城下町建設にあたって領域内の宗教勢力の再編が行われたと推測される。

東町城跡（飛騨市神岡町東町・船津）…第167図

東町城は16世紀中頃に江馬氏によって築城された伝わり、後に金森氏によって高原郷の押さえとして改修・再利用されたと伝わる。近世以降の主要な町場の方向に面した段丘崖の縁に、石垣が存在する。石垣は公園整備前の昭和40年代に撮影された写真から、隅部に算木積みを志向した織豊系の石垣であったと推定される（佐伯哲也2006）。また、『飛州志』所載の城絵図を確認すると、現在の地形を基本とする二重の空堀に囲まれたプランが確認でき、段丘崖際の現在模擬天守が建つ位置には橹台が描かれている。そのため、東町城には天守に相当する象徴的な施設が存在した可能性がある。一方、曲輪内に位置する住宅地の立会調査では、掘立柱建物跡や、地籍図と合わない構状の遺構を検出



第166圖 增島域下町量根複層園



第167図 東町城跡周辺景観復原図

している（飛騨市教育委員会 2018c）。そのため、2 時期の使用が想定でき、伝承どおり江馬氏が当初築いたという可能性が想定できる。

東町城と城下町は高原川と支流の山田川・吉田川の合流点付近に位置している。また、越中と高山を結ぶ越中街道や、信州方面へ続く上宝道、吉田から高山方面へ続く吉田街道等、複数の街道の結節点に立地する。これらの街道は東町城直下に位置する藤橋で集束する。藤橋は恒常に架かっていた橋としては近世段階でも付近では唯一であった。高原川右岸を通行する越中東街道は越中方面から東町の川沿いの町場を貫通して藤橋を渡河し、船津の町場を通って高山方面へ抜けている。さらに越中方面から高原川左岸を通行する越中街道は、船津の町場内で越中東街道に吸収される。東町城下の町人地はこれらの街道を基軸に展開する。各街区は街道側に間口があり、内部が短冊型地割で構成された単一の街路を基本とする。さらに街道に面していない周辺部には細分化された街路・街区が形成されている。全体的に狭小な地形に制約を受け、単一の街路を基本とするためか、長方形街区の設定を志向しながらも明確ではない。なお、東町には高山・増島・小島に見えるような数詞を冠する3街区の設定は確認できない。

城郭が存在する高原川右岸側には、城郭と町人地の間の低位段丘上（「上町」「阪戸」付近）に耕地が広がっている。この付近は古くは「そら町」と呼ばれたと伝わる（ふるさと神岡を語る会 2000）。高山の武家地も近世に直轄地となった後は「空町」と呼ばれる耕地に変化している。城郭と町人地との間という位置関係からも他の金森氏城下町と同様、元々は武家地であった可能性が想定できる。そのように仮定すると、「城郭－武家地－町人地－河川」という金森氏城下町の定型的要素配置が読み取れる。ただし、町人地は高原川两岸の街道に沿って展開するという特徴があり、これは河川を町人地の外郭とする高山・増島とは相違する構造である。

東町城下の寺社の配置について、特徴的なのが左岸の船津である。「本町」の南北端にそれぞれ洞雲寺・圓城寺という禅宗寺院が位置し、圓城寺に隣接して諏訪社が存在していた。寺院にはいずれも江馬氏関連の伝承がある。禅宗寺院を基本とする点は、真宗勢力が町場に取り込まれる高山・古川盆地の拠点と相違する要素である。高原川流域は江馬氏下館周辺をはじめとして、全般的に禅宗寺院が多く分布する。そのため宗教勢力の構成や配置については、金森氏段階に至っても江馬氏段階の様相に規制されたものと推測される。同じく町人地の街区構造についても、高山・増島等と相違することから、江馬氏段階の町場の利用状況に影響を受けた可能性が想定される。

なお、高山藩三代・重頼の代に高原郷約 3000 石は、弟の重勝に内部分地され、以後は左京家領となる（堀祥岳 2016）。東町城は一国一城令によって廢城になったと想定され、以後は増島や萩原のような旅館としての使用的記録も確認できない。関連して高原川左岸の釜崎地内に左京家屋敷伝承地（金森左京邸跡）が伝わるが、詳細は明らかではない（岐阜県教育委員会 2005）。主要な町場として存続する東町城の付近に継続的に拠点を置く方が合理的と考えられるため、左京家領時代も東町城を利用した可能性は想定できる。

桜洞城跡・萩原諏訪城跡（下呂市萩原町）…第 168 図

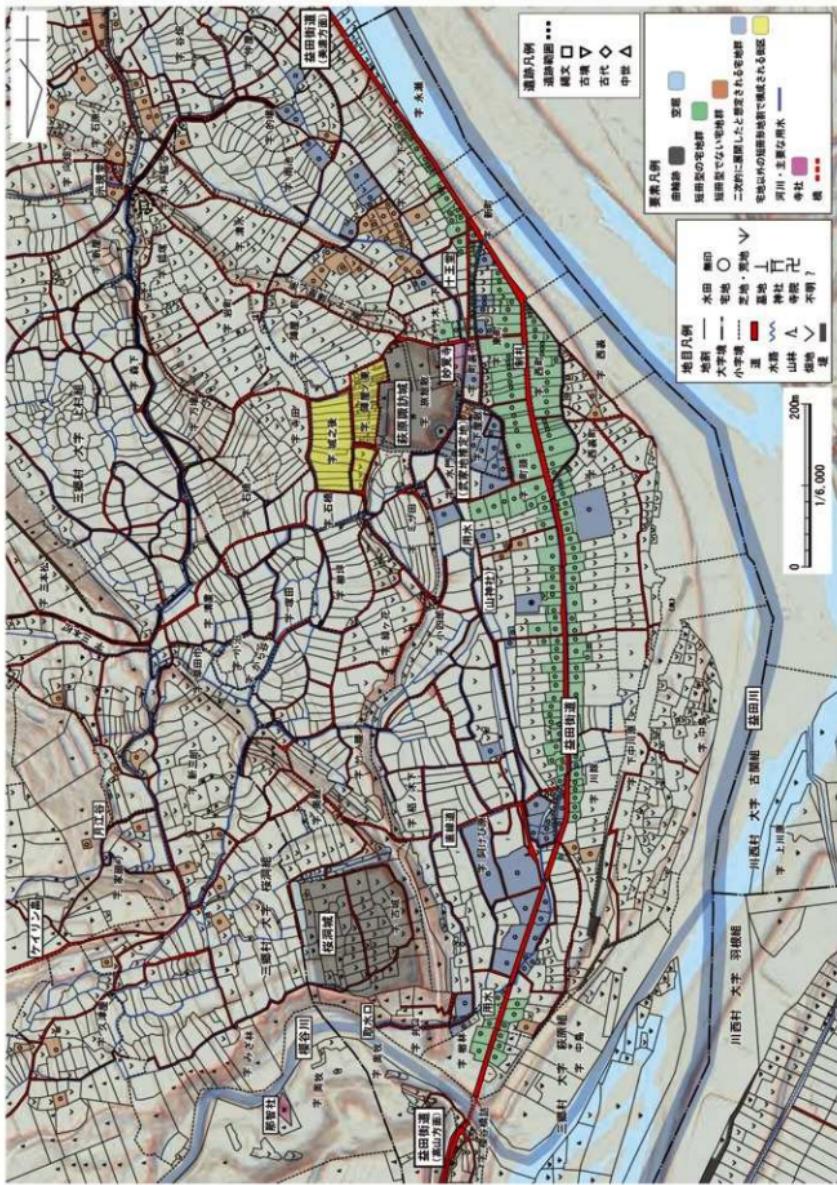
桜洞城は、三木氏の本拠・益田郡における拠点である。萩原諏訪城は天正 13 年に飛騨に入国した金森氏が益田郡の押さえとして築いた拠点である。両城は益田川左岸河岸段丘上の同一地域内に立地する。桜洞城は桜谷川沿いの段丘上に位置し、約 600m 南部の段丘面の縁に萩原諏訪城が位置する。

「古城」周辺が桜洞城の跡と伝わり、空堀に囲まれた一辺100mを超える方形居館である。段丘上位面に位置し、益田川沿いの段丘下位面は望めないため、川沿いの地域と隔絶している。過去の発掘調査成果によると、出土した大窯製品の大半が大窯第1段階・第2段階にはほぼ限られることから、『飛州志』等の近世地誌に伝わる永正年中に近い時期を築城時期と推定し、廃城時期は言及を避けながらも16世紀中頃あるいは永禄年間ごろと想定している（下呂市教育委員会2014a、馬場伸一郎2014）。周辺には、三木直頼の母・景劉院が住した寺院が存在したと想定される。また、「古城」の南側には「奥殿」という字名が残る。さらに付近には、景劉院を想起させる「ケイリン畠」という地名や三木良頼の妻で江馬氏娘との関連が想定される「月江谷」という伝承地名が伝わっている（馬場伸一郎2014）。萩原諒訪城は、近世以降の神社としての利用によって改変を受けているが、石垣や樹形虎口の存在が想定されている（岐阜県教育委員会2005）。

本調査における地割パターンの検証の結果、桜洞城周辺では既往の調査で指摘されている同一段丘上の拠点の広がりとともに、近世以降の町場が展開する段丘崖下にも街区のまとまりが確認できた。これらは桜洞城の段丘崖と軸線が一致するため、近世以降の益田（尾張）街道に先行して存在したと想定される。街区はやや不整形な方形プランで構成され、これらの街区から城へと通じる直線道も確認できる。以上から、これらの段丘崖下の街区は桜洞城との繋がりを意識して設定された可能性が想定できる。

萩原諒訪城と一体の町場は、高山方面と美濃・尾張方面を結ぶ益田（尾張）街道上かつ、益田川と支流・桜谷川の合流点のやや下流付近に展開する。中心になるのは街道沿いの街区であり、街路両側に短冊型地割の宅地が連続している。これらは近世以降も宅地として継続的に使用されてきた様子が確認できる。さらに町人地東側の用水路を区切りとし、城郭との間には空閑地が広がる。この地区は「下屋敷」「小四郎」といった武家屋敷を想起させる字名が残る。さらに城郭と同一段丘上の西側にも「陣屋ノ東」「城之後」といった、やや不定形ながら短冊型地割で構成された長方形街区が存在する。これらの区画は城郭に武家地が取り付く他の金森氏拠点のあり方から、武家地であった可能性が想定できる。寺社については城郭の西側段丘下、町人地と用水を隔てた場所に真宗の妙覺寺が位置し、さらに西隣の街路が屈曲する位置に十王堂が立地している。いずれも街道から城に至る途上を押さえるように立地している。萩原の町場は、城郭周辺の区画が武家地であったと仮定すると、「城郭—（武家地）—町人地—河川」という飛騨国の金森氏城下町の定型配置が想定できる。また、城郭に街道から直入できない街路の交錯関係は、飛騨国の他の金森氏拠点との類似性が想定できる。一方、町人地には高山・増島のような3街区は見えず、一本街村状の町場である点は高原郷の東町と類似する要素である。

以上から、桜洞城は16世紀初頭から中頃までの期間に使用され、段丘崖下を含めた周辺に拠点地域のまとまりが想定できる。16世紀後半になると、金森氏によって益田郡の拠点地域として萩原諒訪城を中心とした街道沿いの城下町が整備された様相が想定できる。一方、三木氏が高山盆地に進出する16世紀中頃以降に桜洞城が廃城となつても、この地域における拠点や町場の機能が完全に無くなつたとは想定し難い。金森期以降における町場展開を考慮すると、段丘下の益田川沿いに拠点や町場を移転させた可能性は想定できる。桜洞城に対応する崖下の街区の利用についても、その際の土地利用の可能性も含めて継続的に検証が必要と考える。



第168圖 櫻洞城跡・萩原頤訪城跡周邊景觀複原圖

第7節 姉小路氏城館跡を中心とする宗教施設の分布と変遷

姉小路氏城館跡の構造・変遷をより詳細に分析するため、武家勢力や集落との強い関連が想定される宗教勢力について、古川盆地内の分布・変遷状況を整理する。武家拠点と同じく中世期のこの地域の宗教勢力に関する史料は非常に少ない。そのため、近世以降の地誌や明治前期における社寺関連の行政資料をもとに宗教施設や伝承記載を抽出しつつ、関連する調査成果等も参考としながら一覧表を作成した（第83表・第84表）。抽出の対象範囲は本歴史地理調査で景観復原図を作成した範囲内を基準としつつ、周辺において武家関連の伝承がある寺社についても適宜対象を拡大した。表は姉小路氏3家の名字との関連が想定される近世の郷（古川郷・小鷹利郷・小島郷）で区分し、寺院、神社、堂・祠の3種で分類した。分類の結果、特に寺院については近世初期までの移転伝承が多数認められたことから、移転する前の旧地の伝承位置も含めた寺社の変遷図を作成した（第169図）。移転の伝承については矢印を用いて示し、転宗の伝承については記号を用いて図上に記載した。この変遷図をもとに、中世から近世初頭までの宗教勢力の広域的な変遷を整理した。

古川郷 複数の寺院の伝承について、古川城の拠点集落が想定される上町や下町（現在の向町）周辺から増島城下への移転の傾向が認められる。特に増島城下の重要な位置に存在する真宗の3ヶ寺（正覚寺・真宗寺・本光寺）は同様の傾向である。このうち、真宗寺のみ白川郷からの移転伝承があるが、いずれの寺院も16世紀初頭ごろの古川城周辺の前身寺院を基礎とし、増島城下の整備後に城下に移転したという内容は共通している。一方、密教系の寺院である宝室院は文献史料から小島郷よりの移転が想定される。さらに金森可重ゆかりの寺院である禪宗の林昌寺は3ヶ所の移転伝承がある等、真宗以外の宗派の様相は一様ではない。増島城下における寺院の配置を見ると、町場内に真宗寺院を取り込み、周縁部にそれ以外の宗派の寺院を配置している。このことについては、金森氏入部段階で古川郷に密教寺院が存在しなかったことから、隣郷から移転させたという可能性は想定できないだろうか。なお、神社については杉本社のみ、古川城の拠点地域からの移転が伝わる。いずれにせよ、古川郷においては主に古川城周辺に存在した宗教施設が、近世初頭に増島城下へ移転した変遷が想定できる。

小島郷 姉小路氏初期の拠点と想定される岡前館の周辺には古代寺院の杉崎庵寺跡が所在し、中世には天台宗の寺院であった宮谷寺の伝承が多く残る。宮谷寺は飛驒国内に荘園を有していた山科家との繋がりが見える（『尊卑分脈』、堀洋岳 2015a）。また、天正10年に高原郷に攻め入った小島時光が、奪い取った大般若経を宮谷寺に納めていることから、16世紀後半まで宮谷寺は存続していたことになる。現在、当該大般若経を所蔵する寿楽寺は禪宗であるが、元々は宮谷寺の末寺であったと伝わる。そうであれば宮谷寺は小島城周辺まで影響力を及ぼしていた可能性がある。さらに岡前館と野口城の中間に存在する慈眼寺・淨永寺は、それぞれ禪宗と浄土真宗であるが、いずれも天台宗からの転宗伝承がある。以上のように、岡前館・小島城といった武家拠点と、宮谷寺を中心とする密教勢力の位置はかなり近在であり、宮谷寺がこの地域に影響力を及ぼしつつ、姉小路氏（小島氏）とも結びついていた時期が存在したと想定できる。その後、真宗寺院の開基記録が多く見える16世紀初頭ごろには宮谷寺の勢力が衰微し、この地域に真宗勢力が浸透したものと想定される。とりわけ小島城下には真宗寺院が

第 83 表 姉小路氏城館跡園庭宗教施設一覽（古川綱・小原利郷）

名稱	分類	開祖する武家領地	近世の都	大字（字）	開基や所在・移転の伝承・寺院の宗派や注記事項（～は移転や改宗、〔 〕は発見場所や定義	近世以降 御前司	景観復原図 記録内
正覚寺 (現：光明寺)	寺	瑞應城	古川郡	駿町（駿町）	本尊薬師如・永正11年12月5日「古川郡南具江領」。跡地：永正11年開闢。荒廃：永正11年開闢。本尊薬師如・永正11年12月5日「古川郡南具江領」に遷座を據て、天正17年に現在地に移る。後風：天正17年現在地に移る。寺領：天正17年現在地に移る。現存：天正17年現在地に移転。「駿町」(駿町名守寺)。跡地：永正11年12月5日「古川郡南具江領」。跡地：天正17年現在地に移転。「駿町」(駿町名守寺-瑞應寺)。現存：天正17年現在地に移転。	○	
真宗寺	寺	瑞應城	古川郡	蓼町	跡地：天正2年開闢。荒廃：草創年時に古川郡南具江町に開基。天正11年12月5日「駿町」等～移転。天正17年現在地に移転。「真宗寺」(駿町名守寺-瑞應寺)。現存：	○	
本光寺	寺	瑞應城	古川郡	式之町	跡地：永禄3年開闢。荒廃：天文10年開闢。行政：天正11年12月5日「古川郡南具江町に開基し天正16年に現地に移転」。跡地：天正11年12月5日「古川郡南具江町に開基し天正16年に現地に移転」。荒廃：天正11年12月5日「古川郡南具江町に開基し天正16年に現地に移転」。現存：	○	
東聖院 (現：全念寺)	寺	瑞應城	古川郡	老之町	行政：天正16年開闢。高野山道所領。(近世開基主として「東聖院」)。現存：天正16年開基。高野山道所領。(近世開基主として「東聖院」)。現存：天正16年開基。高野山道所領。(近世開基主として「東聖院」)。現存：	○	
神明宮	社	瑞應城	古川郡	老之町	荒廃：天正16年中古川郡出雲道に開基。行政：天正16年不詳。廟宇開・天字直道遺。跡地：天正16年中古川郡出雲道に開基。行政：天正16年不詳。廟宇開・天字直道に。現存：	○	
天神宮	社	瑞應城	古川郡	駿町（二之丸）	行政：天正16年開基。高野山道所領。(近世開基主として「天神宮」)。現存：天正16年開基。高野山道所領。(近世開基主として「天神宮」)。現存：	○	
林昌寺	寺	瑞應城	古川郡	上久多（日隈）	跡地：天正16年不詳。天正16年より雲出雲森に代々領地により「跡地」。荒廃：高野山の跡地・小幡寺持が天正16年中古川郡に移転。後風：元は「跡地・小幡寺氏代の菩提寺」として小幡寺跡に町字古野村に開基ありその後津井町方面に移転「古野(古野町)」。上野北村字古野に開基。行政：天正16年12月5日「古野(古野町)」。現存：天正16年中古川郡に開基。天正16年中古川郡に開基。近世開基：林昌寺(古野町)。現存：	○	
地藏堂	堂	瑞應城	古川郡	中気多（久次）	行政：天正16年不詳。林昌寺受持	○	
今音社	社	瑞應城	古川郡	向町（今宮）	行政：天正16年不詳。荒廃：因面あり「吉城郡村々社庵内給鏡」	○	
村木社 (現：氣多若宮社)	社	瑞應城	古川郡	上久多（神原）	跡地：記載あり。荒廃：来由未詳。古史：元々は足利重村社本にあったが増田景盛景盛時に坂戸町に移されて現在地に移された。(上北戻後藤主記述)／近代：氣多若宮社・神原社に合併	—	
一尚寺	寺	吉川城	古川郡	高野（石原）	跡地：天正19年開基。荒廃：天正19年開基。元禄2年に一尚寺と号す。文政3年古川町にて移転。行政：高野寺(吉川)（貞宗院）が崩廃後：吉川（吉野寺）天正19年間に古川町に移転。近代：信俗の善行寺(合併)(吉川善行寺)	○	
五社宮	社	吉川城	古川郡	高野（下段）	跡地：太極権・復興：天正19年1月10日・康永3年禪。天正19年1月10日・同年諸神像あり・古川城の御守護・後風：正徳年中開闢／古代：高野山吉野山に移転	○	
阿加多堂	堂	吉川城	古川郡	高野（飼口）	荒廢：天正末年飼口が作詩作詞の寺と称す。「縣」か、「縣」：阿加多堂 宇摩郡山田山とあり（吉城郡村々社庵除却地記述）／行政：本尊芭翁如來。林昌寺受持・現状不明	—	
阿部記堂	堂	吉川城	古川郡	高野（飼口）	跡地：記載あり。荒廃：阿加多堂と同一・カ	—	
觀音堂	堂	吉川城	古川郡	高野（山門）	跡地：記載あり。葛麻山・國面あり（吉城郡村々社庵除却地記述）／近代：阿加多堂に合併	○	
白山社	社	吉川城	古川郡	高野	荒廢：記載あり。葛麻山・國面あり（吉城郡村々社庵除却地記述）／近代：白山社・合祀	○	
日枝社	社	吉川城	古川郡	是遺（杉本）	後風：地蔵の「山王権現様」か。同字内に杉本社（現：氣多若宮社神社）の旧跡が存在したと伝承。荒廢：葛麻山・葛麻山が存在しない敷地の無い面あり（吉城郡村々社庵除却地記述）／近代：貴松神社に合祀	○	
龜魯神社	社	吉川城	古川郡	是遺（龜魯）	荒廢：記載あり。行政：東山末詳。現存	○	
地藏堂	堂	吉川城	古川郡	是遺（塚原）	行政：天正19年立。毒蛇寺受持	○	
櫛原堂	堂	吉川城	古川郡	上町（久中）	行政：東山末詳／近代：無格社から村社に。現存	○	
地藏堂	堂	吉川城	古川郡	上町（下落）	行政：創立年不詳。林昌寺受持	○	位置不明
悲忍社	社	向小島城	小鹿利郷	筆ヶ岡（清水谷）	小鹿利郷主誠請。時期は不明／現存	○	
源女宮	堂	向小島城	小鹿利郷	筆ヶ岡（山門）	行政：小鹿利郷。向井田近大矢の御守神との伝承／近代：悲忍社に合祀	—	
游行寺 (現：兩河寺)	寺	向小島城	小鹿利郷	僧昌（萬葉集）	本尊薬師如・天文10年1月7日「小鹿利郷御懃願」。跡地：開基年不明（説得：天文15年開基）。行政：天文15年開基。内村野村に開基。永禄中に現在地へ。行政：萬葉集の「萬葉」たるは本居宣長の「萬葉」。跡地：萬葉寺。近代：吉川郡・兩河寺に合併。向井寺に	○	
八幡社	社	向小島城	小鹿利郷	信包（八幡）	行政：向小島城主代りの御守神と伝承／近代：熊野社に合祀	—	
熊野社	社	向小島城	小鹿利郷	信包（熊野）	行政：東山末詳／現存	○	
十王堂	堂	向小島城	小鹿利郷	信包（萬葉）	跡地：記載あり。行政：東山末詳。古史：小鹿利郷の御建立地と申伝（信包信後風土記述）／現状不明	○	
不動堂	堂	向小島城	小鹿利郷	信包（萬葉）	跡地：記載あり。行政：東山末詳。林昌寺受持／古跡：現存	○	
觀音堂	堂	向小島城	小鹿利郷	信包（久次丸）	行政：東山末詳／古代：國面ノ御不動堂に合併	○	
觀音堂	堂	向小島城	小鹿利郷	信包（小畠田）	行政：東山末詳／現存／國面ノ御不動堂に合併	○	
地藏堂	堂	向小島城	小鹿利郷	信包（中山）	行政：東山末詳／古代：國面ノ御不動堂に合併	○	
地藏堂	堂	向小島城	小鹿利郷	信包（昭和）	行政：東山末詳／古代：國面ノ御不動堂に合併	○	
神明社	社	向小島城	小鹿利郷	信包（昭和）	行政：祐運不詳。小鹿利郷方に在り、城主・小鹿利郷伊賀守謫謫／近代：熊野社に合祀	○	
見足寺	寺	向小島城	小鹿利郷	信包（城見宿禰社）	古史：古寺跡。文明年中創建。跡小鹿利郷所。五輪石有（信包村後風土記述上）／古史：貞宗院。上北戻後藤寺主（信包村後風土記述上）	○	
岩井戸觀音堂	堂	—	小鹿利郷	信包（山門）	後風：本尊一圓觀音。度絶した古菩薩所の境内に建つと伝承／現存	—	
春日社	社	向小島城	小鹿利郷	黒内（森脇）	行政：東山末詳／現存	○	
地藏堂	堂	向小島城	小鹿利郷	黒内（森脇）	行政：建立年月不詳。林昌寺受持／近代：清水地藏庵に合祀	○	
地藏堂	堂	向小島城	小鹿利郷	黒内（清水）	行政：創立年月不詳	○	
八幡社	社	向小島城	小鹿利郷	黒内（奴屋）	行政：東山末詳。信包曰跡小鹿利郷家代々忠昌の御通所。跡地：萬葉之森／近代：春日社に合祀	○	
神明社	社	向小島城	小鹿利郷	黒内（御内）	行政：祐運不詳。千葉忠房の御通所。跡地：萬葉之森／近代：春日社に合祀	○	
淨德寺	寺	—	小鹿利郷	天村（宇佐郡）	本尊薬師如・天文10年10月18日「小鹿利郷山淨心院」。跡地：後風：天文8年開基。後風：天正16年開基。後風：萬葉之森（宇佐郡村合村身形尊所）。後風：開基・淨心院の跡地：萬葉之森（宇佐郡村合村身形尊所）。跡地：萬葉之森（宇佐郡村合村身形尊所）。現存	—	
信行寺	寺	—	小鹿利郷	谷（及須）	跡地：萬葉・後風・行政：天文8年開基。後風：萬葉淨德寺で信行寺の名を受ける／近世：吉川（吉宗寺）	—	

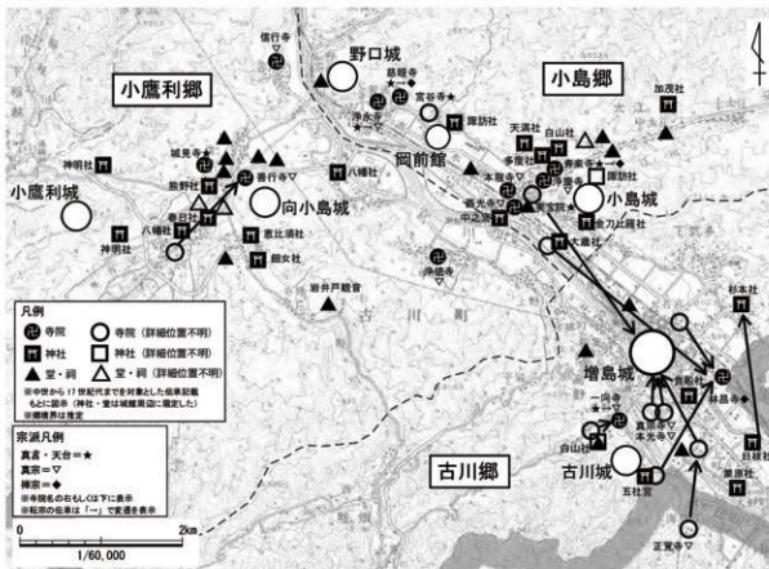
第84表 姉小路氏城館跡周辺宗教施設一覧（小島郷）

名称	分類	隣接する 武家拠点	近世の郷	大字（字）	開基や存在・移転の伝承／寺院の宗派や注記事項（～は移転や改宗。〔 〕は発掘調査や推定）	近世以降 創建	最復興國 内国外
白山社 (現：高田社)	社	小島郷	小島郷	太江（神恵田）	後風：東面未詳、同字内に「十束鏡図」あり／近世末：高田神社に改称、現存	○	
多度社	社	小島郷	小島郷	太江（多度宮）	後風：東面未詳／近代：高田神社に合祀	○	
加茂社	社	小島郷	小島郷	太江（稻音）	後風：東面未詳／近代：高田神社に合祀	○	
諏訪社	社	小島郷	小島郷	太江（すわ宮）	文化9年太江村絶図（飛驒市編）：「すわ宮」の記載あり。後風：「宇原波」に無跡地として記載。行政：明治10年神社敷数を高田神社本社（境内神社）として記載する／近世：高田神社に合祀	○	
豪商堂	堂	小島郷	小島郷	太江（御厨）	行政：東面未詳、豪商堂受持／現存	○	
雄藏堂	堂	小島郷	小島郷	太江（御厨）	行政：東面未詳、雄藏堂受持／現存	○	
寿楽寺	寺	小島郷	小島郷	太江（左近）	隣地：東面未詳。慶長中金森出雲守晴所により除地。幾志：大治年間開基。慶長年中推測。後風：元中興院（高木寺八景古道宜宣）。古堂：杉崎村の岡崩田家の名の山麓小字地名「寺樂寺」跡と伝わる場所あり（「杉崎村後風土記書上」）／後風：元貞吉院、近世：曾創院（高志寺記）、現存	○	
淨勝寺	寺	小島郷	小島郷	太江（鶴口）	隣地：江候櫛帳（道掛五郎左衛門）△」、兼志：慶長中中禪系／近世：興宗（高山照蓮寺記）、現存	○	
龍雲堂	堂	小島郷	小島郷	太江（源蔵）	私賀：圓面あり（吉城郡村々社寺除地見地跡地図）	—	
雄藏堂	堂	小島郷	小島郷	太江（辰）	私賀：圓面あり（吉城郡村々社寺除地見地跡地図）	○	
寿安寺妙寺	寺	小島郷	小島郷	太江（左近）	〔寿安寺境内から北側隣接地にかけて分布する古代寺院跡〕	○	
阿弥陀堂	堂	小島郷	小島郷	太江	後風：天保8年に調査したが位置不明。境内に轉々と地名ありか、古堂：細巻と筆ヶ谷に接続した跡地（ミタケ）の瀬戸の西に「阿弥陀堂」というところあり（「相川村佐藤土記書上」）	位置不明	
金刀比羅社	社	小島郷	小島郷	沼町（大谷）	隣地：記載なし、後風：東面：東面未詳、私賀：圓面あり（吉城郡村々社寺境内絶図）／近世：大歳社に合祀。小島：平成12年再執請	○	
庚申堂	堂	小島郷	小島郷	杉崎（柳原）	行政：國あり。小島：江崎字多田由の久日より宝曇年間に移転か／敷地内に御碑や石碑が多く存在	○	
守之宮	社	小島郷	小島郷	杉崎（多田山）	隣地：白山社（近代：大歳社に合祀）	○	
火薙宮	社	小島郷	小島郷	杉崎（天神社）	隣地：天神宮（記載あり。兼志：往古に高燃の北野神を勅造し応永年中に轉々と移転）／後風：故国司陣小島が創ったと伝承（近世：大歳社に合祀）	○	
諏訪社	社	小島郷	小島郷	村崎（羽耕）	隣地：記載あり／現存	○	
火薙社	社	小島郷	小島郷	羽崎（大歳）	兼志：東面未詳、後風：隣地に「白山坂復元」とあるのは当地か／現存	○	
西光寺	寺	小島郷	小島郷	羽崎（鶴口）	本尊圓鏡：大永4年3月30日開基「吉色郡小島町」、隣地：開基年不詳、元禄後地の御道御繩廻人、幾志：大永4年開基。行政：大永4開基。元禄13本願寺より寺号授与／近世：興宗（圓名寺記）、現存	○	
本願寺	寺	小島郷	小島郷	羽崎（中川原）	本尊圓鏡：天文8年5月15日「小島町」、隣地：開基年不詳、元禄後地の御道御繩廻人、幾志：大永4年開基。行政：天文5年開基、宝永1本願寺より寺号授与／近世：再宗（圓名寺記）、現存	○	
松寺堂	堂	小島郷	小島郷	羽崎（櫻田）	後風：吉城郡村々社寺除地見地跡地図／現地踏地あり	○	
杉庭庵寺	寺	岡前館	小島郷	羽崎（櫻田）	後風：中世期の谷谷寺跡と伝える。〔地圖調査により9世紀頃既絶の古代寺院であると推定〕	○	
宮谷寺	寺	岡前館	小島郷	羽崎（あわお）	〔御殿分離圖〕：山科教昭の項に「寺」〔御殿〕：「飛州宮谷別當顕照弟子」とあり、「壽樂寺天寶大般若經」天正10年江馬元祇から人教義と大篠ヶ根利品として持ち帰り宮谷寺に納めたとある。兼志：小島郷主近辺の監時光普照所、後風：杉庭庵寺付近を北定、兼善翁の開祖地名として「本願寺」「時々葬院」「御御院」「奥御室跡」があり。古文：「宮谷」は宮谷山ノ権二ノ山向つ、「美・英・牛・牛・御・二・御・牛・牛・御・水・御・此谷ニシルナリ」「宮谷」は現在の諏訪町の下段あたりと推定】	位置不明	
淨永寺	寺	野口郷	小島郷	苦茶丸（宮ノ下）	隣地：弘治3開基。後風：弘治3開基。元禄14本願寺より寺号授与／古史：元是吉谷寺の塔頭で天台宗と伝える（「杉崎町後風土記書上」）、近世：再宗（續本覺寺記）、現存	○	
照嚴寺	寺	野口郷	小島郷	苦茶丸（黙江）	隣地：古跡を慶長18再興、後風：圓基未詳、中興竹翁存。後風：開基年不明。中興吉谷寺本覺竹翁。元是天台宗か／近世：曾創院（高志寺記）、現存	○	
豪商堂	堂	野口郷	小島郷	野口（言ノ郷）	行政：東面未詳、豪商堂受持／現存	○	

真跡資料名：内容（～は時間の経過）／立堆塚／土塗／塗抹を示す。近世跡地に記載が重複する場合は、より古い方の跡地を典拠とした。典拠史料の略称と例名は、以下の通り。

本尊圓鏡：中世史料（第3章12～33頁に所載）、跡地：三郡神社仏閣跡地分別伝來名草薙創明記（宝曇年間作成、横山力書編纂・岡村利平校訂後復興堂会刊行・伊喜店、1914年所収）、兼志：桑原志（享保年間開闢、長谷川忠恭著、岡村利平著『廣州志』住伊喜店、1909年所収）、後風：麥太後風土記（明治6年作成、曾田礼彦編『大日本地誌大系・麥太後風土記』地圖、1915年所収）、行政：飛驒市行政資料科社会課編著（飛驒市所蔵）『明治2年～至明治12年・社寺古書類編録（古川町）』『明治八年七月至十六年・社寺古書類編録（横江町）』『明治七年明治九年・社寺古書類編録（飛驒市所蔵）（横江町）』『明治九年十一月・寺社類編（小鹿郷）』『寺社令復興書（小鹿郷）』、古史：『古川町史・資料編』、神社：『吉田町史・史料編』、高野山過去帳：大正2年2020年「高野山不動院所蔵『飛驒國過去帳』（～、「飛龍の中世」）」、古撰：『吉田町史・史料編』、神社の御道（「みよしとさくめい第十九集・神間の御道（R0）」）

表は各郷の景観度を基準に整理し、大字は明治21年の地圖作成済の郷を基準とした。



第169図 宗教施設変遷想定図

複数存在し、宮谷寺関連の寿楽寺の他、神社や堂も含めて宗教施設の密度が非常に濃い地域といえる。そのため、勢力が変遷した後も引き続き拠点地域として利用され続けた可能性が想定される。また、前述の通り杉崎地内の真宗寺院（西光寺・本龍寺）は16世紀初頭の開基であるが、地割パターンからは周辺の長方形街区と伽藍の軸線が合っていない状況が確認できる。そのため、当初から寺院が存在していた集落を利用しつつも、後の時代に街区を再設定したために、このようなズレが生じた可能性が想定できる。

小鷹利郷 他の2郷と比較すると拠点周辺の寺院は少ないが、拠点集落と想定される信包周辺は堂・祠が多く分布する。また、峠方向や村の境界付近に小規模な神社を多く配置している。中心集落内部に堂舎が点在し、境界を神社で区切るあり方がこの地域の特徴的景観と言える。なお、向小島城の対向に位置する城見寺（城）は、先行する中世寺院の跡地を山城に再利用した可能性が想定できる。伝承に伝わる城見寺はの清峰寺末とされる。一方、集落の中心に位置する真宗の善行寺（現在の向善寺）は、天文10年に開基し、永禄年間に小鷹利郷内から現在地に移転した伝承がある。永禄年間は向（小鷹利）氏の動静が史料上で確認されなくなる時期と重なる。以上から、向氏が密教勢力と結びついた時期があり、両勢力の衰微に前後して真宗勢力が入った変遷が想定される。

古川盆地の宗教勢力の変遷 以上の分析は、多くのが近世の地誌や明治初期の行政資料によるものであり、個別伝承の信憑性は低い。しかし、盆地全体を通した全体的な傾向から以下の変遷が想定できる。

- ・中世期、小島郷の古代寺院が存在した地域を基軸として宮谷寺を中心とする密教勢力が主流の時期があった。その後、古川盆地を所領とした姉小路氏と結びついた。
- ・16世紀初頭以降、姉小路氏の勢力が衰える時期と平行して宮谷寺の勢力も衰え、廃絶・転宗が相次ぐ。同時に真宗勢力が入り、この地域に浸透する。
- ・16世紀後半、金森氏による城下町形成によって、古川郷内の寺院勢力は増島城下に集約する。構成要素は当時この地域で多数派であった真宗を基本とするが、他宗派の寺院も城下における要素として必要であったと想定される（隣郷の小島郷内から実宝院を移転させる、禪宗の林昌寺等）。これらは中近世における古川盆地の宗教勢力の基本的な変遷として想定できる。

第8節 小結（姉小路氏城館跡周辺の空間構造の変遷）

これまでの検討から、姉小路氏城館跡を中心として、飛驒地域における武家拠点の構造・変遷を推測したい。なお、本項は先行して発表した各論考（大下永 2021a, b, d, f）の内容を含む。

1 姉小路氏・江馬氏を中心とする在地勢力段階における武家拠点の構造と変遷

江馬氏下館や岡前館は、同一地区において中世以前の人の営みが確認できることから、既存の土地利用のあり方を取り込んで再利用し、部分的に拡張したものと考えられる。このうち姉小路氏は古代以前より存在した集落や街道を取り込み、その一角に拠点の岡前館を構えたと想定される。さらに天台宗の宮谷寺の影響が色濃い地域であったため、宗教勢力と協調を保つつ拠点を形成したものと想定される。一方、高原郷の江馬氏下館は、村落や寺社の配置が館の利用開始と関連していると想定され、14世紀段階の拠点集落のあり方がその後も引き継がれた可能性がある。姉小路氏は15世紀初頭には3家に分家するが、分家後の拠点（古川・小島・向小島・小鷹利）についても、拠点形成を画期とする武家屋敷地の整備や大規模な町場の改変は想定し難い。これらの山城について、それぞれの使用開始年代は不明であるが、国内勢力の争いが表面化する15世紀後半には本格的に使用が開始されたものと考えられる。しかし、各山城は立地として山麓の拠点集落と一体ではない場合が多く、山城の使用を契機として山麓部に新たな拠点が形成されたという形跡も希薄である。

一方、古川盆地内の山城における発掘調査成果によって、姉小路氏段階から山上において一定の滯在を行いう利が想定された。そのため、一部の山城については単なる詰め城としてだけではなく、限定期ながら居住を伴う利用が想定できる。一方で、山城で確認できる畝状空堀群や堀切等の遺構の一部は、その配置から盆地外からの敵の来襲に備えたものである。これらは16世紀前半までに起こった盆地内部の抗争ではなく、その後に入った三木氏が国外からの脅威に備えて改修した可能性がある。姉小路氏段階の利用状況と、最終段階の軍事的な利用状況は区別して考える必要があろう。

なお、江馬氏下館は方形居館の形状を呈し、16世紀初頭から半ばごろまでには廃絶している（飛驒市教育委員会 2010b・飛驒市教育委員会 2019e）。また、三木氏初期の拠点である桜洞城も同様に方形居館の形状であり、16世紀中頃に廢城になったと想定されている（下呂市教育委員会 2014a、馬場伸一郎 2014）。一方、16世紀後半まで精力的に活動するこの2氏の拠点が本拠地城内から消失したとは想定し難い。そのため、後の金森期以降の町場である高原郷の東町や益田郡の萩原については、河川・街道による流通往来を重視した在地勢力段階からの利用も想定しておく必要があろう。

2 三木氏段階における武家拠点の構造と変遷

文献史料によると、16世紀前半以降に三木氏が古川盆地に干渉し始め、16世紀第三四半期には姉小路氏3家のうち古川氏の名跡を継ぐ。詳細な経過は不明だが、程なくして古川・小鷹利氏の領主としての活動は見えなくなり、小島氏は三木氏傘下の武将として存続する。変わって、越中等の他国との関係の中で塩屋筑前守や牛丸備前守といった人物が史料に見えるようになる。

三木氏が古川盆地を掌握したと考えられる永禄年間から金森氏が入国する天正13年の約20年について、古川盆地における武家拠点の様相は明らかではない。文献からは三木氏の本拠の意識は依然として益田郡を基本としつつ、高山盆地の三仏寺城や松倉城等も当主の居城として使用していたことが確認できる。一方、古川盆地においては、三木氏当主自身の活動の形跡は確認できず、僅かに確認できる当該期の寺社の金石文には、小島氏や牛丸氏の名が見える。このような状況から、三木氏当主ではなく、その家臣や傘下となった在地領主によって統治が行われた可能性が想定できる。

当該期の武家拠点について、これまでの縦張り研究によって、野口城・向小島城・小鷹利城については古川盆地外側に向けた畝状空堀群等の配置からこの時期における改修を想定している（岐阜県教育委員会2005）。また、小島氏は三木氏傘下の武将として存続し続けることや、天正10年にも史料で「小島城下」が確認できるから、小島城は継続的に使用されていたと想定される。

また、今回の発掘調査で出土した遺物の年代等によって、多くの山城に当該期の利用が想定できることが判明している。古川盆地の山城は主に軍事拠点として、ある程度の改修を行なながら使用され続けていたと想定できる。

それでは、当該期の山麓部や周辺部の拠点構造はどうであろうか。小島については、西麓部に真宗寺院を併う新たな町場が想定できる。野口・向小島・小鷹利については、遺跡地や好立地に存在する前段階からの拠点集落が継続し、山城等の武家拠点は単立の存在であった様相が想定された。最も拠点構造の変化が想定できるのが、古川である。古川城を中心として東麓・南麓（「下段」）には武家屋敷地の伝承のある平坦地群が確認できる。これらは現在のところ前段階の利用が確認できない地区であり、古川城の存在に引き寄せられる形で展開した可能性が高いと言える。また、宮川対岸の旧街道であったと想定される堤防道路に沿った「古町」という町場の存在も想定できる。この古町についても、対岸の古川城との関連が想定される。このように古川城については他の4城と違い、山城を中心として周辺に拠点としてのまとまりが確認できる。これらの空間構造や時代変遷は不明であるため、古川氏段階や金森氏段階を含めた長期の中での利用のあり方を想定する必要がある。しかし、少なくとも天正3年には「下ダン」に関連した人物が死亡していることから（大下永2020a）、この時期に利用されていた可能性は高いと言える。三木氏段階は、盆地における勢力の利用状況に応じて武家拠点のあり方も多様化していたと想定される。

3 金森氏段階における武家拠点の構造と変遷

金森氏の拠点意識（本城・支城） 寛永期における金森氏の拠点・古城の認識について、先行する論考で整理を行っている（大下永2021f）。「日本六十余州図」（【絵図1・2】、図版40～45）を確認すると、「城」としては唯一高山が見える。さらに「古城」として増島・東町・茂住・萩原・下呂・下原が見える。一国一城令の後であるため、城は本城の高山のみとなり、支城は廢され古城として描かれている。高山を本城とし、それ以外の古城が元和元年（1615）までの金森期における公式な支城群と想定される。

しかし、この絵図に記されていない城郭についても、縄張り調査・発掘調査成果によって金森氏段階の改修・再利用が想定されているものがある。国絵図に描かれていない拠点のうち、鍋山城・古川城は『飛州志』に金森期の一時利用の伝承が伝わり、小島城についても『飛州千光寺記』に同様に金森氏の一時利用が伝わっている。関連して、中世城館跡総合調査によって、松倉城・鍋山城・古川城・小島城・東町城等について、地表面観察による縄張り研究から金森氏の一時利用を想定している（岐阜県教育委員会 2005）。

以上から、飛騨国内においては、国絵図に記された高山及び支城群と、それ以外にも在地勢力の拠点であった場所を金森氏が再利用した例は複数存在したと想定される。

飛騨の金森氏拠点の構造的特徴 金森氏拠点の構造的な特徴について谷畠博之が整理している（谷畠博之 1991）。さらに、先行する論考を含めた本調査における高山・増島・東町・小島・萩原の空間構造の検討によって、飛騨の金森氏拠点に共通して見える構造的な特徴は、以下のようなものが挙げられる。

- ・主要河川と支流の合流点付近に立地する。
- ・主要街道上や複数の街道の結節点に立地し、町人地に主要街道を取り込む。
- ・河川付近の自然堤防や河岸段丘を基軸に町場が展開する。
- ・城郭は虎口構造や石垣、天守相当の櫓等、織豊系の要素が見える。
- ・「城郭一武家地一町人地一河川」という配置構造。これらの地区は段丘崖や用水路によって区画される。増島のように地域に利用できる段差が無ければ用水路を設ける。
- ・町人地の街路は城郭方向ではなく、街道方向を基軸とするヨコ町型である。地割について、町人地は短冊型を基本とし、武家地はブロック型を基本とする。各街区の形状は長方形を志向するが、場所によって地形の制約を受けた不定形の部分も多く見える。

高山・増島・小島のみ確認できる構造 金森氏拠点のうち、本拠の高山や古川盆地の増島・小島のみに確認できる要素として、以下のようなものがある。

- ・町人地の主要街区は、武家地側から順に1～3の数詞を冠する街路を基軸として展開する。
- ・1番もしくは2番の町筋に主要街道を通す（小島は推定）。

これらについて、主な特徴である3街区が存在する地区は、いずれも遺跡の分布から前段階の土地利用が確認できないため、新規建造の町場と想定される。このように金森氏が建設した拠点は、織豊・近世の城下町を彷彿とする要素を認めつつも、数詞を冠する街区等の独自の特徴がある。金森氏の飛騨入国以前の拠点である越前大野は5番までの街区が想定できることから（登谷伸宏 2016）、数詞を冠する街区は金森氏による城下町づくりの特性であり、さらに3街区は飛騨国入国当時の基本方針であった可能性が想定できる。

金森氏城下町の構造 以上のように、飛騨国における金森氏城下町は、城郭と城下町の一体化・武家地と町人地の区分け・短冊型地割と長方形街区を志向する計画的街区設定といった、近世城下町の構成要素が揃う明確な都市プランの施行が認められる。

在地勢力と金森氏の拠点形成で大きく違うものとして、立地的な環境が挙げられる。江馬氏下館や岡前館等、在地勢力段階の拠点は、自然堤防上や山際の河岸段丘上等、居住に適した立地環境を選定し、

多くは古代以前の散布地に根差した村落の形態を基本としている。一方、金森氏は河川の合流点や街道の結節点を取り込むことを重視し、敢えて水害が起りやすい地区に拠点を形成している。城下町の体裁を整えるために大規模な土木工事は施工したものと想定されるが、河川から比較的距離がある地区や段丘上などの災害時に有利な場所に武家地・城郭を配置し、不利な立地にある河川沿いに町人地を配置して明確に区分している。この構造は飛騨国内のすべての金森氏城下町に共通している。先に上げた定型的要素は、このような拠点形成における立地的環境と不可分な関係にあると考えられる。

金森氏拠点の変遷案 金森氏は天正13年の入国直後から高山城・増島城の築城が開始する天正16年ごろにかけて、在地勢力の複数の拠点を再利用したと想定される。発掘調査成果によって古川盆地では小島城・古川城を使用した可能性が想定される。また、地籍図の地割パターンの検討から、このうち小島城周辺には町場形成の痕跡が認められる。したがって、小島には城郭と一体の町場を求め、古川には象徴的な軍事拠点としての役割を求める可能性が想定される。また、小島については、南麓の町場が未完成であることから、城下町としての運用が本格的に開始される前に廃され、古川とともに拠点機能は増島城下に集約したと想定される。これは高山盆地や益田郡・高原郷など飛騨国内の各地域において同様の様相が想定される（大下永2021f）。金森氏は在地勢力段階の山城を再利用しつつ、高山の小規模版ともいえる城下町を各地に建設し、各拠点を街道で結んで国内のネットワークを構築していたものと想定できる。古川盆地においては、最終的に増島城に集約する様相がうかがえ、増島が拠点都市として定まると、同一盆地内で臨時に使用されていた古川城・小島城等の城郭は次第に役割を失い廢城になったと想定される。

元和元年以降、一国一城令によって増島城は廢城となり、17世紀後半には金森氏が出羽国に移封して飛騨国は幕府直轄地となる。その結果、増島城下からは武家という存在が抜け落ちることになる。増島城周辺における近世絵図や明治前期の地籍図を確認すると、高山と同じく城郭・武家地は耕地としての利用が主であり、町人地の拡大は街道に沿って展開していることが分かる。また、城下の町人地はほぼ全域が宅地であり、そのままの形で町場が残ったものと考えられる。これは高原郷の東町・船津周辺や益田郡の萩原周辺でも同様の状況が確認できる。このように各地の旧城下町の町場機能は高山に集束することなく残り、近世の在郷町としてそれぞれ確立したものと推測される（大下永2021f）。

4 飛騨国における武家拠点の変遷と姉小路氏城館跡の位置づけ

(1) 各勢力による変遷過程

以上、飛騨国の武家拠点について、古川盆地の姉小路氏城館跡を中心として、段階ごとに各拠点の空間構造・変遷を検討した。歴史的な背景として、飛騨国は16世紀に至っても周辺国のように有力な守護大名や戦国大名が登場せず、姉小路氏・江馬氏・三木氏等の国人クラスの領主が林立していた状況がある。古い段階の在地勢力の拠点は基本的に氾濫原を避け、居住に有利な自然堤防上や河岸段丘上を基軸とし、もともと存在した集落を利用する形で形成された。この段階では、武家屋敷・町場を一体として整備するような発展的な拠点形成の傾向は希薄である。例えば江馬氏下館・岡前館は周辺に位置する集落・街道と一定の距離を保っていた。同様に姉小路氏の分家以後の拠点と考えられる小島城（北麓地区）・向小島城・小鷹利城についても、拠点集落の空間的な広がりは限定的であった。この段階の山城は堀切・堅堀等の土造りの城郭遺構を基本としていた。この時期のものと考えられる

石垣状の遺構も少数ながら認められ、例えば古川城北部に位置する百足城跡（飛騨市古川町高野）では、試掘確認調査の際に石垣状の遺構を確認している（飛騨市教育委員会 2017b・2019a）。百足城跡の石垣は扁平な石を基底とする。垂直に近い勾配で裏込め石を伴わず、斜面保護の土留めとしての意識が強いものと想定される。他方で、小鷹利城跡の発掘調査によって向氏段階と推定される礎石建物跡を検出し、野口城跡の発掘調査では、主郭において多数の土師器皿片が出土している（飛騨市教育委員会 2019c・d、三好清超 2021）。これらの成果からは、山城を単なる詰め城としてではなく、一定の居住性をもって利用していた状況が想定できる。その一方で、地割パターンの検討では山城と拠点の一体的な配置関係は確認できない。小鷹利城や小島城において小規模な山麓拠点の存在が想定できるものの、山城の築城を画期としてその直下の山麓部の拠点を整備した形跡は全体的な傾向として希薄である。したがって、16世紀初頭までの在地勢力段階の拠点は、武家勢力による集権的な整備は想定し難い。

16世紀前半以降に勢力を伸張する三木氏について、元々の拠点であった桜洞城の構造は、基本的に江馬氏下館や岡前館に類似する方形居館であった。しかし、高山盆地に進出後の拠点である三仏寺・松倉等については、拠点・集落・寺社といった要素を一体的に配置していた可能性が想定される（大下永 2021f）。関連して古川盆地においては、古川城を中心として周辺に拠点としての要素が集約した様相が想定できる。古川の拠点空間がどのように変遷したか、三木氏の勢力がどの程度影響を与えたか、現時点で詳細は不明である。しかし、同一地域の他の拠点と比較した発展性から、三木氏の勢力が古川城を拠点として整備した可能性は想定できる。なお、益田郡の萩原周辺や高原郷の東町周辺についても、この段階には街道・河川に近い地域を流通往来の起点として利用していた可能性が想定される。16世紀後半まで勢力を保つ三木氏・江馬氏といった勢力は、政情の変化に対応して、一定の発展性を持つ拠点形成を行った可能性が想定できる。

姉小路氏3家のうち、小島氏については唯一16世紀後半まで存続する。そのため、小島城については小島氏による継続的な使用が想定できる。天正10年段階で「小島町」という城下空間が存在することや中世創建の真宗寺院の配置から、16世紀中頃以降に小島城を中心とする町場の展開が想定できる。一方、この時期には岡前館の使用を停止し、野口城・向小島城・小鷹利城の3城については、盆地の外部に向けた対外的な要衝として改修使用されたと想定される。16世紀後半に活発化する飛騨国内の武将の对外進出や、国外の勢力の来襲に対応するため、古川盆地の各拠点の役割も分化していたと想定される。

このような武家拠点形成のあり方に強権的に統一政権のあり方をもたらしたのが、織豊武将の金森氏である。高山や増島をはじめとする飛騨国内の金森氏城下町の特徴は、以下の3点に集約される。

- ①主要河川と支流の合流点や街道の結節点を押さえる立地。
- ②城郭は石垣や天守相当の櫓台、石垣を伴う虎口等によって、麓からの遠望を意識した整備を行っている。これらの拠点の一部は在地勢力の居城を再利用する。
- ③高山・増島を指標とする「城郭—武家地—町人地—河川」という配置構造。町人地は街道に沿ったヨコ町型であり、内部には主要街道を取り込む。

このうち、①については氾濫が起きやすい河川の合流地点や低湿地を好んで選定し、地形の克服を図っている。これは氾濫原を避けた自然堤防上や河岸段丘上に拠点を求めた在地勢力と明確な差異と言える。②について、これらの遺構が存在することが金森氏の改修を決定づけるものではないが、実際に高山・増島・東町といった町場を伴う城郭は、全域にこれらの要素を多く確認できる。さらに今回の

総合調査によって、古川盆地では小島城・古川城でこのようなあり方が想定できる。③について、このような階層的な配置関係が、近世以降の主要な町場となるいずれの拠点でも確認できる。これらの地区同士は段丘崖や用水路によって区分される。また、町人地に主要街道を取り込む様相や町人地が街道を重視したヨコ町型構造である等、複数の共通事項が確認できる。さらに高山・増島といった拠点については、町人地の主要街区が1～3の数詞を冠する3街区で構成されるという特徴がある。また、近世以降は町場として存続しなかった小島についても、同様の構造が読み取れる。その後の土地利用のあり方から計画段階で中止したと推測されるが、小島についても前段階の拠点を利用した町場形成の動きが推測できる。当地域における小島・古川の事例からは、古川盆地における金森氏の段階的な拠点形成のあり方が推定できる。金森氏は織豊権力の拠点形成のあり方を飛驒に導入するにあたって、高山・増島を指標とする定型的要素（階層による配置関係、町人地の3街区、町人地内の主要街道等）を基本としつつ、宗教勢力や前段階の城郭・町場の構造といった各地域独自の要素を加味して既存の要素を再利用する等の調整を加えたものと推定される。

（2）姉小路氏城館跡から見る飛驒国の武家拠点の変遷過程

姉小路氏城館跡（古川城・小島城・野口城・向小島城・小鷹利城）が所在する古川盆地は、姉小路氏入国直後に使用されたと想定される岡前館の段階から、姉小路氏3家の分家や戦国期の三木氏による影響を経て、16世紀末に金森氏の増島城下に集約するという、歴史的変遷が確認できる。姉小路氏当初の拠点と想定される岡前館は氾濫原を避けた段丘上に存在し、古くから人が居住し続けた地域に根差したものであった。街道や宗教勢力を伴いつつも、家臣団屋敷や町場に代表されるような大規模な拠点形成を行うものではなかったと想定される。これは江馬氏下館・桜洞等、飛驒の他の国人領主でも同様の傾向があり、一定の普遍性が認められる。戦国期に飛驒国も戦乱が頻発すると、各勢力は山上の拠点を求めるようになったと想定される。各山城周辺における検討では、古川城を除いて山麓部の拠点形成の痕跡は希薄である。このうち、小鷹利城・小島城には山麓部の小規模な拠点が想定できるが、方形区画をもつ武家屋敷群や、一体的な町場整備は読み取れない。そのため、山城を使用しながら既存の拠点地域を引き続き利用した様相が推定される。今回、調査によって小鷹利城や野口城の山上で一定の居住性が認められた事は、拠点地域の居住が困難である場合であっても山麓部の拠点を設けることもできない、特殊な状況が存在した可能性を示唆する。

16世紀に入ると三木氏が台頭し、16世紀中頃以降は古川盆地も三木氏の勢力によって押さえられたと想定される。三木氏の古川盆地の統治がどの様であったかを想定することは困難であるが、古川では山城を中心とする武家屋敷や町場といった要素のまとまりが想定できる。また、小島において既存集落とは別に小島町という町場の存在が想定できる。峠に面した野口城・向小島城・小鷹利城周辺の拠点集落の様相に変化は認められないが、城郭構造の配置から三木氏勢力によって盆地全体を防衛する装置の一部として、山城が利用された様相が想定される。このように、戦国後期に古川盆地を拠点とした勢力は姉小路氏段階の拠点を利用しつつも、より広域の統治に対応するため、状況に応じて拠点の役割を変化させていた様相が垣間見える。

その後、織豊武将である金森氏の入国によって、飛驒における武家拠点形成のあり方は大きく変化する。城下町・武家地・町場をゾーニングして一体的に配置し、街道を町場に取り込む構造が見える。短冊型地割・長方形街区のセットや宗教勢力の町場への集中も確認できる。このような計画的な町場

整備を施行する近世城下町のあり方は飛騨国にとって初めてのものであり、金森氏が以後も領主であり続けたことによって近世以降の町場展開のあり方を決定づけるものとなったと想定される。その中ににおいて、増島城下は町人地の3街区等の構造から、特に本拠の高山との類似点が多い。古川については、一時に城郭を利用しつつ、段階的に古川城周辺に存在した町場機能を増島に集約させた様相が想定できる。小島については、城を中心として西・南麓の地区に新たな城下町形成を計画しつつ、途中段階で建設を中止した様相が想定できる。これらの構造は、急速かつ強権的に豊臣政権のあり方を導入しつつ、もともと地域に存在した要素を利用しながら都度修正を加えた結果と想定される。さらには、小島に高山・増島と同様の数詞を冠する3街区が存在することは、古川盆地という場所の歴史的・地理的な重要性を、金森氏が入国当初から着目していた可能性が想定できる。このような小島・古川の様相は近世以降に構造が変遷した城下町にはない、織豊期における限定された時期の拠点形成を検討する上で貴重な事例と言える。

本章では、古川盆地が岡前館や姉小路氏城館跡を中心として、長期間断続的に武家拠点が展開しつつ、最終的に増島城下を経て近世在郷の飛騨古川へ至った過程を推測した。その結果から、この地域は中世から近世に至るまでの武家拠点の変遷過程を途切れなく検討できる数少ない地域と言える。さらに、このいずれの段階においても、飛騨一国の武家勢力のあり方の一端を物語る指標的な事例が確認できる。よって、古川盆地は中世から近世に至る武家勢力や政治的背景の変遷によって、拠点構造が推移した様相を飛騨一国レベルに置き換えて推定可能な地域として評価できよう。

以上の検討は歴史地理的な方法と視点を主としており、仮説や推定を多く含んでいる。そのため、古川盆地内外における各種の調査成果を反映しながら、継続的に内容の検証・修正を図る必要がある。

【第6章 引用参考文献】

- 蘆田伊人編 1968『大日本地誌大系 萩太後風土記』雄山閣（富田礼彦 1873『斐太後風土記』）
- 大下永 2020a 「<史料紹介>高野山不動院所蔵「飛騨国過去帳（一）」」『飛騨の中世』第11号、飛騨中世史の会
- 大下永 2021a 「飛騨における武家拠点の変遷と小島・東町城下町の構造」『中井均先生退職記念論集 城郭研究と考古学』サンライズ出版
- 大下永 2021b 「明治前期の地籍図からみる武家拠点周辺の空間構造～飛騨市の事例を中心に～」『飛騨市歴史文化調査室報』第3集、飛騨市教育委員会
- 大下永 2021d 「飛騨北部における武家拠点周辺地域の構造と変遷－姉小路・江馬から金森へ－」『戦国・織豊期の地域社会と城下町－東国編－』戎光洋出版
- 大下永 2021f 「飛騨における武家拠点」『武家拠点科研』福井研究集会資料集』『武家拠点科研』事務局
- 大平愛子 1997 「江馬氏下館跡周辺の近世村落の復原」『江馬氏城館跡III－下館跡南辺の調査－』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 岡村利平編 1909『飛州志』住伊書店（長谷川忠嵩『飛州志』（享保年間））
- 岡村利平校訂 1914『飛騨叢書第三卷 飛騨遣乗合府』住伊書店（桐山力所編『飛騨遣乗合府』（江戸末期）、1986年復刻版、かずみ文庫を参照）
- 神岡町 1980『神岡町史 資料編別巻』

- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995『江馬氏城館跡』
- 川村博忠編 2002『寛永十年巡見使国絵図日本六十余州図』柏書房
- 岐阜県教育委員会 2005『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第4集（飛騨地区・補遺）』
- 下呂市教育委員会 2014a『桜洞城跡発掘調査報告書』
- 小島道裕 1995「地籍図及び絵図による検討」『江馬氏城館跡－下館跡発掘調査報告書I』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 佐伯哲也 2006「公園整備前の東町城跡写真について」『濃飛史紳』89、岐阜県歴史史料保存協会
- 佐藤甚次郎 1986『明治期作成の地籍図』古今書院
- 多賀秋五郎 1941『飛騨史の研究』
- 多賀秋五郎 1989『濃飛史研究序説』
- 高田徹 2005「城館絵図について」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第4集（飛騨地区・補遺）』
- 高山市教育委員会 2012『高山城下町絵図：江戸～昭和時代』
- 高山市教育委員会 2015『高山市史 街道編（上）』
- 谷畠博之 1991「金森氏の城と城下町」『飛騨古川金森史』飛騨古川金森史編さん委員会
- 登谷伸宏 2016「中近世移行期における大野城下町の形成について－織豊系城下町の成立に関する覚書－」『建築史学』66号
- 中井均・内堀信雄編 2019『東海の名城を歩く 岐阜編』吉川弘文館
- 中井均 2020「高原諒訪城を考える一縄張りから見た江馬氏館との関係－」令和2年度江馬氏城館跡歴史講座記録・資料（飛騨市の文化財HP掲載）
- 馬場伸一郎 2014「桜洞城跡・萩原諒訪城跡再考」『城から探る飛騨南部の戦国時代資料集』下呂市教育委員会
- 飛騨市 2010『古川町歴史探訪』
- 飛騨市 2015『飛騨古川 歴史をみつめて』
- 飛騨市教育委員会 2010a『増島城跡』
- 飛騨市教育委員会 2010b『江馬氏城館跡VI』
- 飛騨市教育委員会 2017b「百足城跡現地説明会資料」
- 飛騨市教育委員会 2018a「古川城跡現地説明会資料」
- 飛騨市教育委員会 2018b「小島城跡現地説明会資料」
- 飛騨市教育委員会 2018c「東町城跡現地説明会資料」
- 飛騨市教育委員会 2018d『飛騨市遺跡地図』
- 飛騨市教育委員会 2019a『飛騨市内遺跡詳細分布調査報告』
- 飛騨市教育委員会 2019b「向小島城跡現地説明会資料」
- 飛騨市教育委員会 2019c「小鷹利城跡現地説明会資料」
- 飛騨市教育委員会 2019d「野口城跡現地説明会資料」
- 飛騨市教育委員会 2019e『史跡江馬氏城館跡・名勝江馬氏館跡庭園 保存活用計画書』
- 飛騨市教育委員会 2020b『史跡江馬氏城館跡7・江馬氏殿遺跡』
- 福井重治 2003「高山藩の郡奉行・代官」『郷土研究岐阜30周年記念論集』岐阜県郷土資料研究協議会
- 古川町 1982『古川町史 史料編一』

古川町 1984『古川町史 史料編二』

ふるさと神岡を語る会 2000『神岡の地名（壱）』

ふるさと神岡を語る会 2012『ふるさと調べ第十八集 神岡の街道（四）』

堀祥岳 2015a「第2部第4章 古川地域の中世的景観」『飛騨古川歴史をみつめて』飛騨市

堀祥岳 2016「高原郷における金森左京家領三千石の領域」『斐太紀』15

前川要 1991「近世城下町の成立」『都市考古学の研究』柏書房

三好清超 2019a「岡前館跡に関わる研究史と既出資料の再検討」『飛騨の中世』第10号

三好清超 2021「姉小路氏関連遺跡で出土する中世土師器皿の編年試案」『中井均先生退職記念論集

城郭研究と考古学』サンライズ出版

山村亜希 2006「中世都市の景観復原と地籍図」『愛知県立大学文学部論集（日本文化学科編）』54号

第7章 総括

第1節 各種調査の検討から推定される姉小路氏城館跡の変遷

1 発掘調査成果から推定される暦年代

これまで、文献史料調査、測量調査、歴史地理調査、発掘調査の成果を報告してきた。本節では、それらの調査成果をまとめ、姉小路氏城館跡と当遺跡が所在する古川盆地全体の変遷を考えたい。まず、発掘調査で出土した遺物から姉小路氏城館I～V期の暦年代を検討する。

姉小路氏城館I～V期は、各山城の遺構面と遺構面を構築する造成土の出土遺物を根拠に、変遷を統合して導いたものである。第5章第8節で示した通り、出土遺物では土師器皿の出土点数が最も多く、土師器皿の各分類が各層位で割合が変化していくことが明らかになっている。また、古瀬戸後IV期（新）～大窯第4段階までの瀬戸美濃焼が各層位で変遷することが明らかとなった。このため、姉小路氏城館跡を含む姉小路氏関連遺跡においては、土師器皿の各類の変遷が瀬戸美濃焼の変遷と一致することに着目し、編年を検討してきた（三好清超2021）。しかし現状として、飛騨地域では、歴史的事象と遺物の変遷とを総合した暦年代は明らかになっていない。したがって、瀬戸美濃焼の年代から暦年代を推定する。

全国の城館跡では、藤澤良祐による瀬戸美濃焼の生産地の編年を基準に考える場合が多い（藤澤良祐2008など）。一方、美濃地域では土器・陶磁器の消費地として暦年代の検討が進んでいる。井川祥子は、守護所や戦国城下町などより出土する各分類の土師器皿の比率の変化を示し、文献史料から導かれる各遺跡の存続期間を前提に、変遷と暦年代を提示した（井川祥子2006）。また、内堀信雄は、井川による土師器皿の編年と藤澤による瀬戸美濃焼の編年に基づき、土師器皿・瀬戸美濃焼の各分類の変遷を示し、守護所や戦国城下町等の動向にふれつつ暦年代を整理した（内堀信雄2021b）。この美濃地域の在り方は、姉小路氏城館跡で土師器皿の分類ごとの割合が土層ごとに変遷していく傾向と近似する。このため、姉小路氏城館跡では美濃地域を参考に、遺跡の暦年代を考える。

前述の井川・内堀らの検討で示された美濃地域の変遷によると、1期は古瀬戸後III期から後IV期（古）段階の時期であり、15世紀前葉から中葉に位置付けている。2期は古瀬戸後IV期（古）から後IV期（新）であり、15世紀後葉から16世紀初頭に位置付けている。3期は古瀬戸後IV期（新）から大窯第1段階であり、15世紀末から16世紀前葉に位置付けている。4期は大窯第1～3段階であり、16世紀中葉に位置付けている。5期は大窯第2～4段階であり、16世紀後葉から17世紀初頭に位置付けている。

この美濃地域の知見を姉小路氏城館跡に援用する。姉小路氏城館I期は始期の時期は不明であるが終期は15世紀後葉まで、姉小路氏城館II期は古瀬戸後IV期（新）～大窯第1段階であり15世紀末～16世紀前葉、姉小路氏城館III期は大窯第1～2段階であり16世紀前葉～中葉、姉小路氏城館IV期は大窯第2～3段階であり16世紀中葉～後葉、姉小路氏城館V期は大窯第3～4段階であり16世紀末～17世紀初頭と位置付けられる。

2 各種調査から推定される姉小路氏城館跡の変遷

前項で述べた曆年代を基に、文献史料調査・測量調査・歴史地理調査の成果を総合して姉小路氏城館跡の変遷を示したい（第85・86表）。なお、郷名は近世の郷名を用いて記述する。

姉小路氏城館Ⅰ期 15世紀後葉までの時期である。

14世紀代に飛驒国司として姉小路氏が入国し、岡前館を居館としていた可能性がある。15世紀に入り、姉小路氏が、古川郷を拠点とする古川氏、小島郷を拠点とする小島氏、小鷹利郷を拠点とする向氏と、3家に分かれる。15世紀後葉には、各家での争いが記録に残る。このように3家に分家してから、盆地内部での争いが表面化するまでの時期である。

古川郷では古川城、小鷹利郷では小鷹利城の利用が始まる。この時期の古川城の全体像は不明である。対岸の宮川右岸では、上町一帯の弥生時代からの遺跡地に中世集落が存続し、是重では中世荘園の存在が確認できる。小鷹利城でも遺構確認は断片的であり、全体像は不明である。小島郷では岡前館が既存集落の一角に形成された。

各郷では、中世集落が古代からの集落遺跡と重なって分布し、その周辺では天台宗の寺院勢力が想定される段階である。各山城の山麓には、寺院勢力をも取り込む集落に拠点となるような区画があるものの、岡前館跡以外に居館というべき遺跡を認めることができない。

姉小路氏城館Ⅱ期 15世紀末から16世紀前葉の時期である。

古川氏は、1499年に在国を開始する。1521年頃までに三木氏が高山盆地に進出した。1531年に古川城は落城したとの記録がある。小島氏と向氏は、前時期から引き続き在国していたと考えられる。徐々に古川盆地に三木氏の勢力が伸張し始め、各家の争いが増える時期である。

古川郷の古川城では、最高所の平坦地がこの時期に造成されているため、曲輪や切岸など地表面で観察できる多くの城郭遺構が構築されたと考えられる。対岸の宮川右岸では、平地部の中世荘園と宮川沿いの街道周辺に集落が想定される。

小島郷では、小島城が築城された。最高所の櫓台、最も広い曲輪の主郭など、現在地表面で観察できる城郭遺構はこの時期に造られたと考えられる。周辺では、北麓に谷川を基軸として武家拠点・寺・集落が集まる拠点地域が展開し、その周間に神社が配置される。また、岡前館周辺から小島城にかけて、宮谷寺を中心とする密教系の勢力が展開したとみられる。岡前館は、この頃に使用を終えた。

小鷹利郷では、小鷹利城で主郭にL字状の礎石建物が構築された。主郭やそこを取り囲む切岸など、現在地表面で観察できる大きな城郭遺構は、この時期に構築されたと考えられる。周辺では、東麓に小規模な武家拠点が想定される。また、少し離れた後の向小島城の北西麓にあたる信包の殿野周辺を起点に集落が展開し、その北側の山頂に城見寺と伝わる密教系の山寺の存在が想定される。

姉小路氏城館Ⅲ期 16世紀前葉から中葉の時期である。

1554年には姉小路氏3家が叙任を受けており、健在であったと考えられる。一方、1556年には姉小路氏3家の拠点が落城しそうだと伝えられ、向氏はこれ以降史料にあらわれない。また、1560年には三木良頼が古川氏の名跡を継ぎ、1563年には古川氏と小島氏は健在であった記録が残るもの、それを最後に古川氏も史料にあらわれなくなる。このように、三木氏の勢力が盆地に及び、古川氏と向氏が衰退していく様子が看取される時期から、三木氏が古川盆地を完全に掌握するまでの時期である。

古川郷において、古川城ではⅡ期の様相が継続していたものと推測される。

小島郷では、小島城は、Ⅱ期の様相が継続していたと考えられる。野口城が新たに築城される。最

も広い主郭、一段高い櫓台、長大な切岸など現在観察できる大きな城郭遺構は、この時期に設けられたと考えられる。周辺環境として、野口城では北・南麓に既存集落が存在する。小島城では、北麓の集落が「小島町」として西側に広がりを見せた様相が想定できる。また、野口城の南側、小島城の西・北側では宮谷寺を中心とした密教勢力が衰えていき、真宗勢力への伸張が顕著となる。

小鷹利郷では、小鷹利城で遺物が見られなくなる。集落は、前時期から位置が変わることなく存続していた様相と考えられる。

姉小路氏城館Ⅳ期 16世紀中葉から後葉の時期である。

古川氏と小鷹利（向）氏の記録が見えなくなり、三木氏の勢力が古川盆地へ浸透したと考えられる。小島氏は存続していた。三木氏の勢力が完全に古川盆地を掌握してから、金森氏の侵攻により滅ぼるまでの時期である。

古川郷では、古川城で土留め石垣による虎口と、主郭櫓台の礎石建物を構築した時期である。この時期に、現在地表面で観察できる形状に改修されたと考えられる。文献史料に「下ダン」に居住していた人物名が見えることから、山麓部に武家屋敷・寺社等の使用が想定される。対岸に宮川右岸の集落が引き続き継続している。

小島郷・小鷹利郷の、小島城・野口城・小鷹利城・向小島城において、盆地外へ向けた遺構配置が顕著となる。小島城では神原峠方面に堀切・堅堀、野口城では数河峠方面に大規模な堀切と畝状堅堀群、小鷹利城では白川郷方面に畝状堅堀群や堀切を配置する改修が行われた。また、向小島城が新たに築城され、ここでも白川郷方面に畝状堅堀群を設けている。それぞれの山城周辺は、Ⅲ期の様相が継続しているものと推測される。

このように、三木氏の勢力が、古川城で山上の礎石建物、山麓の武家屋敷・寺社等を整備し、盆地北側の小島城・野口城・小鷹利城・向小島城で、群として軍事的な機能を果たすよう強化した状況が想定される。

なお、1585年の金森氏侵攻以後、野口城・小鷹利城・向小島城の3城は、使用されなくなった。

姉小路氏城館Ⅴ期 16世紀末から17世紀初頭の時期である。

1585年に金森氏が飛驒に侵攻し、三木氏が滅亡した。金森氏が統治してすぐ、1585～86年にかけて一揆が勃発している。1589年に金森可重が増島城下の商町に禁制を出しており、この時までに増島城の築造が始まっていたと考えられる。このように、金森氏が侵攻してから、拠点となる増島城を整備するまでの時期である。

古川城では、大きな石材を用いた虎口、主郭と櫓台の礎石建物により改修された。町場は増島城下に移っており、宮川右岸の集落は村落として存続したものと考えられる。

小島城では、主郭に礎石建物が建てられたと考えられる。主郭南側斜面には2m高さの石垣3段を構築した。また、虎口でも算木積みを志向する大きな石材を用いた石垣が認められる。周辺要素では、西・南麓に計画的に町場を設定した状況が看取される。増島城と小島城の町場では、4点が共通する。それは、河川・街道の結節点に位置すること、城郭ー武家地ー町人地ー河川という配置関係、町場に寺社を取り込む在り方、街道を取り込んで三街区を設定する町場の在り方である。

なお、当該時期で、古川城と小島城は使用されなくなった。

第85表 姉小路氏城跡変遷表(1)

年代	時期	歴史的事象 (文献史料調査)	古川郷		小島郷	
			古川城跡		小島城跡	
			試掘確認	遺構配置	試掘確認	遺構配置
14世紀	I ~15後	<ul style="list-style-type: none"> 1371年、飛騨国司の軍勢、越中に出兵 1378年、「飛騨国司」藤原家綱が叙任 <p>【姉小路三家鼎立】</p> <ul style="list-style-type: none"> ~1405年、姉小路氏三家に分家 1411年、応永飛騨の乱。古川尹綱が討伐される <p>【盆地内部の争い】</p> <ul style="list-style-type: none"> 1488年、向氏と小島氏で相論あり 1471年、古川氏と守護の軍勢が争い、三木某が討死 1479~80年、古川氏と小島氏が争う 	古川1期 土坑 遺物を伴わな い	不明		
15世紀	II 15末~16前 後IV新・大1 土師器皿3・4	<p>【守護勢力や古川家の衰退と三木氏の勢力伸長】</p> <ul style="list-style-type: none"> 1499年、在京していた古川家当主が在国を開始 ~1521年、三木氏が高山盆地に進出 	古川2期 造成土から削 り込む柱穴	高い檜台 曲輪や切岸な どを造成	小島1期 地山上層から 削り込む土坑	高い檜台など 形状に大きな 変化はない。
16世紀	III 16前~中 大室1-2 土師器皿4・5	<ul style="list-style-type: none"> 1531年、古川城が落城し、古川家当主が広瀬郷へ 逃去 1554年、姉小路氏三家叙任 1556年、姉小路三家の拠点が落城しそうだと旗聞 あり 1560年、三木貞頼が古川家の名跡を継ぐ 1563年、古川氏・小島氏の人物健在 	古川3期 虎口・土留め 石垣 主郭檜台・礎 石建物	大きな遺構配 置は変わって いない		
16世紀	IV 16中~後 大室2-3 土師器皿6・7	<ul style="list-style-type: none"> 1575年、古川城山麓部使用（「下ダン」） 1582年、八日町の戦い。小島時光が三木方で参 戦。 	古川4期 虎口には巨石 を用いた石垣 主郭には巨石 建物があった ものと想定	大きな遺構配 置は変わって いない	小島2期 残りが悪いが 石垣が複数す る	主郭南側石垣
17世紀	V 16末~17初 大室3-4	<p>【金森氏の侵攻と統治】</p> <ul style="list-style-type: none"> 1585年、金森氏が侵攻し、三木氏滅亡。 1586~89年、飛騨国内で一揆が勃発。古川盆地で も戦いがあり、金森氏妻子が「当城」に籠る。 <p>【増島城下の建設】</p> <ul style="list-style-type: none"> ~1589年、金森可重、増島城下の衙町に禁制を下 す（この時点までに増島城の建設を開始）。 1600年、金森氏、開ヶ原の合戦に際して東軍に参 戦。 <p>【増島城の廢城】</p> <ul style="list-style-type: none"> 1615年、一國一城令。程なくして国内の支城群が 廢城。増島城は旅館となる。 	古川4期 虎口には巨石 を用いた石垣 主郭には巨石 建物があった ものと想定	大きな遺構配 置は変わって いない	主郭・虎口な ど主要部のみ 改修した可能 性	主郭南側石垣

第86表 姉小路氏城館跡変遷表(2)

小島郡		小鷹利郡			空間構造の変遷 (歴史地理調査)	
野口城跡		小鷹利城跡		向小島城跡		
試掘確認	遺構配置	試掘確認	遺構配置	試掘確認	遺構配置	
	小鷹利 期 柱穴 遺物を作わな い				【古代以来の地域構造が継承される】 ・古代以前の道路地に立地する中世集落 ・古代寺院跡（古川郡・小島郷） ・中世莊園・是董の存在	
	小鷹利 2期 L字形状の礎 石建物	一段高い主 郭、曲輪や切 岸などを造成			【開拓】 ・山際の段丘上に形成された街道と集落 ・既存集落の一角に形成 ・周辺部に想定される天台宗勢力	
野口 1期 主郭に雁立柱 建物 土塁 土師器皿が大 量に出土	高い櫓台など 形状は大きくな く変わらない				【姉小路三家の拠点】 ①小島郡（小島氏） ・小島城、次いで野口城の利用開始 ・小島城北側の谷川を基軸とする拠点地域 （武家拠点・寺社・集落） ・16世紀前半期創建の真宗寺院と「小島町」 ・野口城周辺に存在した既存集落 ②小鷹利郡（向氏） ・小鷹利城利用開始。礎石建物有 ・「殿野」周辺を起点とする集落の展開 ・山寺（吉見寺）の存在 ・小鷹利城を董の小規模な武家拠点の存在を想定 ③古川郡（古川氏） ・平野部の中世莊園・是董と宮川沿いの 街道を基軸とする集落のあり方 ・吉川城の利用開始か →三家どのヴァリエーション	【宗教勢力】 ・宮谷寺を中心とする密教勢力の展開（～15c） ・真宗勢力の伸長（16c前半～）
野口 2期 主郭に雁立柱 建物 土塁 土師 堅垣群	盆地外に向け た遺構配置 堅垣群、 巨大な堅切な ど	盆地外に向け た遺構配置 堅垣群等 を造成か	向小島 1期 主郭に雁立柱 建物 土塗め石垣	盆地外に向け た遺構配置 堅垣群等 を造成か	【山城の軍事的機能強化（小島・野口・向小島・小瀬河）】 ・盆地外部に意識した防衛構造の配置 ・既存集落のあり方を引き継いだ拠点地域 ・小島氏は最終（「小島町」形成か） 【古川城周辺の発展的環相】 ・山上部の利用、礎石建物有 ・山麓部周辺の整備の可能性 （武家屋敷・寺社等の可能性） ・対岸街道沿いの「吉町」 →高山盆地、益田郡を縦横的に本拠とする 三木氏勢力のあり方	【企森氏による都市整備】 高砂城と城下町を指標とする 計画的町場の設定（小島→増島） ・河川、街道の結節点に位置 ・城郭→武家地→町人地→河川という配置関係 ・真宗寺院を中心とする町場 ・町場のあり方（街道の取り込み、3街区） ・主要部を改修して使用したと想定される 前勢力の山城（小島・古川） ⇒再利用されなかつたと想定される山城 (野口・向小島・小鷹利) →増島城下に至る初期の過渡的環相
					【増島城城域に伴う地域構造の変化】 (増島)城郭、武家地の耕地化。在郷町として確立。 (5城の地域)村落としてのあり方が引き継がれる。	

第2節 総合調査から見た姉小路氏城館跡の価値

これまで、姉小路氏城館跡を構成する古川城跡・小島城跡・野口城跡・小鷹利城跡・向小島城跡における各種調査の成果と歴史変遷について述べてきた。すなわち、地表面観察による測量調査では、主郭・堀切・畝状堅堀群・石垣等の遺構がよく残ると確認することができた。また、発掘調査では、山上の礎石建物や掘立柱建物、虎口の石垣などを検出し、遺構も良好に残存することを確認し、遺物の年代から中世から近世にかけての遺跡と確認することができた。文献史料と歴史地理調査の検討からは、姉小路氏・三木氏・金森氏といった、各時期の勢力によって異なる領域支配の在り方に伴い、姿を変えながら中世から近世にかけて使われ続けた山城と言うことができた。曆年代を山城の成立と展開に当てはめて、以下に概述する。

15世紀後葉までに、古川城・小鷹利城・岡前館は成立しているものの、城館跡の状況は明らかでない。この時期の文献史料では、向氏と小島氏・古川氏と小島氏などの争いが見られる。15世紀末から16世紀前葉には古川城・小鷹利城が改修され、小島城が築城される。遺物では、各山城から土師器皿が出土する。文献史料では、古川家当主が在国を開始した時期である。16世紀中ごろには野口城が築城され、岡前館は廃絶する。岡前館廃絶後、各山城の山麓に居館が認められない。近隣の集落の中に、屋敷のような形のものを構えて拠点にした可能性が想定される。この16世紀中ごろまでの時期に、三木氏の高山盆地への侵攻や姉小路氏3家の争いの記録を反映するように、それぞれの勢力により各山城が築城された。それぞれの山城が個別で機能していた段階である。主郭の一段高い高まりや堀切や曲輪などの大規模な造成を伴う山城の遺構は、築城当時のものと考えられた。

16世紀中葉から後葉には、古川城で山上に礎石建物、山麓に武家屋敷や寺社等が整備される。小島城・野口城・小鷹利城・向小島城では、古川盆地外へ向けて畝状堅堀群や堀切などの城郭遺構を配置する改修・築城が行われた。領域内を守るために、群として5城が機能していた段階である。三木氏の勢力による改修・築城と考えられた。野口城・小鷹利城・向小島城は、当該時期の終期に役目を終えている。

16世紀末から17世紀初めは、古川城・小島城が山上の礎石建物と虎口の石垣で改修される段階である。増島城の整備が開始される。小島城では南麓に増島城下と共に通する町場も整備される。金森氏による改修と考えられる。この時期の終期で、両城とも役目を終える。

このように、古川盆地内を治めた権力が築城した山城は、近世への転換期に他国からの影響を受けた際にそれぞれの権力により改修されている。このことから、当初は山間地の閉鎖的な飛騨地域の領域支配であったものが、他国への意識が広がっていく支配の在り方に変わっていく様子が看取される。つまり、山城の造りに飛騨地域の支配の在り方の変遷がよく表れている遺跡であると言える。加えて、その山城の構造変遷と権力・周辺の宗教勢力・集落・街道との地理的な関係から、飛騨地域の歴史的変遷を読み解くことができる遺跡でもあると言える。

一方、一連の調査では明らかにできなかった課題も残った。一つは、小島城南麓の町場の実態である。現状は宅地や耕作地などである。踏査を行ったものの遺物の散布を確認できなかった。歴史地理調査で計画的な街区設定を確認したもの、どのような整備が行われたのかを明らかにしえなかつた。もう一つは、小鷹利城跡の主郭において16世紀前葉の礎石建物を確認したことである。指導委員会において、全国的に早い事例と指摘はあったものの、他事例との比較を示すことができなかつた。なお、

1間の間隔は1.90～1.95mであった。16世紀中葉から後葉と推定された古川城跡の主郭の礎石確認の1間間隔は1.86mである。この1間の間隔の違いは時期差による可能性も想定される。

以上のような課題については、今後も検討を進めていきたい。

第3節 姉小路氏城館跡の保存・活用の現状と展望

今回の一連の調査により、前項で示した姉小路氏城館跡の歴史的な価値を述べた。当調査事業は、2017年度に文化振興課が新設されて以降、飛騨市の文化財保護行政の中心に位置付けた。これは、現在の飛騨市古川町の中心市街地や山城の麓に位置する集落の祖型が、中世から近世にかけて山城と共に営まれたものであったことが理由の一つである。姉小路氏城館跡は市民にとって馴染み深く、身近な存在である。このため、山城を守り伝えるための保存事業、調査成果を伝えるための活用事業も並行して実施してきた。

保存事業の振興として、飛騨市教育委員会では2017年度に飛騨市城跡保存活用推進協議会を設立した。市内に所在する史跡江馬氏城館跡と合わせて市域の山城全体の保全を考える会議である。市役所内から林業振興課・建設課・観光課などと、地元の保存会関係者等が出席し、それぞれの立場で山城の保全の情報を共有するものである。すでに小島城跡においては、林業整備の一環で樹木の伐採を実施し、台風被害があった際に道路復旧工事を実施した。

また、姉小路氏城館跡の調査事業で特徴的なものとして、姉小路氏城館跡の調査成果を報告文や論文という形でも発表を行ってきたことが挙げられる。これは、発掘調査・文献史料調査・歴史地理調査・測量調査の調査成果を段階的に発表し、そこで受けた意見を本報告に反映させたい意識であった（大下永2020a・2021a～f、三好清超2020a・b・2021）。その経過の中で、調査研究の継続・発信と外部との意見交換が、本事業を推進するうえで非常に大きな力になった。一方で、前節で示した課題も残っている。継続した調査研究は、姉小路氏城館跡の価値を高めるために、ますます必要になると考えられる。

活用事業としては、大きく3つに大別される事業を実施してきた。最も大きい企画は、午前中に山城跡を登り、午後からは有識者による講演というスタイルの「飛騨の山城へ行こう！」である（大下永2020b）。午後の講演は、山城が所在する地区の公民館で実施する。これまで守り伝えてきた地元に敬意を表し、地元への価値発信を重要視しているためである。また、その場に市内外から多くの山城ファンが訪問するようになると、地元の方にとっても保存活動を継続する力になるという効果もあった。例として、小島城跡の保存団体である小島城址公園整備委員会と野口城跡を保全してきた末高区に加え、黒内区が小鷹利城跡への登山道整備を実施した。価値の発信により、地元の方々が山城を大切なものと認識することにつながり、保存していく力になったと考えられた。

2つ目は、職員派遣である。第1章の普及活動で述べた通りである。依頼者と講座の目的を明確にして、学芸員が講師を務めて、小学校へ出前授業等を行った。

3つ目は情報発信である。2018年より文化財情報の掲載に特化した「飛騨市の文化財」ホームページを開設し、指定文化財の情報、発掘調査現地説明会資料などを公開している。次に、フェイスブックやインスタグラム、ツイッターといったSNS、ユーチューブといった動画配信サイトにて、日々の活動も配信した。市内に対しては、ケーブルテレビや児童生徒向けDVDにて映像配信も行っている。また、

市広報誌「広報ひだ」など従来の紙媒体での発信も継続している。さらに、市民に対して信頼度を高めるために、第3者からの発信も重要と考え、報道機関への情報提供も積極的に行い、2021年からはSNSでコメントが付いた際には返信を行った。このように、あらゆる手段による調査成果の公表と発信は市外にも情報を届けるためであり、文化財も飛騨市の認知度向上に資するために実施している。これは、発信が仲間づくりになるという、飛騨市の関係人口政策の考え方による（飛騨市2020）。

飛騨市の関係人口の考え方とは、観光以上定住未満とされる関係人口に対して、ここでは姉小路氏城館跡をきっかけに飛騨市のファンになってもらおうとするものである。文化財に関わる人を細別すると、存在を知っている人、昔から守り伝えてきた人、研究対象としている人など、多様なかかわり方が認められた。このため、その多様さを前提に、なるべく多く方が関わることが可能な在り方を模索する必要がある（三好清超2022）。姉小路氏城館跡においても、発信を受け取るツールが多種多様なことを想定し、情報が伝わるよう工夫していく必要がある。

なお、史跡江馬氏城館跡においては、飛騨神岡街づくり実行委員会へ活用部分の委託を2020年度より開始している。史跡名勝の庭園を眺めながらの食事会など多様な楽しみ方ができる企画を実施し、そこで市の学芸員が解説をしている。このような共働は、本質的価値を幅広く伝えるために有効な取組みと実感している。

以上、これまでの保存・活用事業では、継続した調査研究とそれを基にした多様な成果の発信を行ってきた。それにより、前節で明らかになった姉小路氏城館跡の本質的価値が市内外に浸透しつつあると認識している。すなわち、姉小路氏城館跡という文化財が、市民に愛着を生じさせるだけではなく、市外の方が飛騨市を応援するきっかけになっているのである。今後も、飛騨市民、岐阜県民、国民へ姉小路氏城館跡の情報をあらゆるツールで発信し、関わりを作り保ち続け、姉小路氏城館跡の次世代への継承につなげていきたい。そのために、姉小路氏城館跡の保存と活用が循環する仕組みを示す保存活用計画を策定し、このような展望を評価する仕組みづくりも示す必要があると考えている。

【第7章 主要引用参考文献】

- 井川祥子 2006 「美濃中世後期土器器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』 高志書院
内堀信雄 2021b 「戦国美濃の土器・陶磁器」『戦国美濃の城と都市』城郭研究叢書3 高志書院（初出：
2011 「戦国美濃の土器・陶磁器」『考古学と陶磁史学 佐々木達夫先生退職記念論文集』佐々木達
夫先生退職記念事業実行委員会）
藤澤良祐 2008 『中世瀬戸戸美濃窯の研究』高志書院

引用・参考文献

- 蘆田伊人編 1968『大日本地誌大系 豊太後風土記』雄山閣（富田礼彦 1873『豊太後風土記』）
- 井川祥子 1997「十五世紀後半から十六世紀前葉の土師器皿—中濃を中心として—」『美濃の考古学』第2号 美濃の考古学刊行会
- 井川祥子 2000『岐阜市域の15世紀から17世紀の土師器皿』『城之内遺跡—長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査—』（第二分冊）岐阜市教育委員会
- 井川祥子 2006「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』高志書院
- 伊野近富 1986「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 賢京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岩田修 2019「飛騨松倉城の石垣は誰が築いたか（三）」『どっこいし』118 飛騨考古学会
- 内堀信雄 1991「遺物の分類」『千疋敷II—財団法人加藤栄三・東一記念館建設に係る緊急発掘調査の記録—』岐阜市教育委員会
- 内堀信雄 1999「遺物の分類」『城之内遺跡—長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査—』（第一分冊）岐阜市教育委員会
- 内堀信雄 2021a「美濃・飛騨地方戦国期城郭石垣の様相」『史跡岐阜城跡 総合調査報告書I』岐阜市
- 内堀信雄 2021b「戦国美濃の土器・陶磁器」『戦国美濃の城と都市』城郭研究叢書3 高志書院
(初出:2011「戦国美濃の土器・陶磁器」『考古学と陶磁史学 佐々木達夫先生退職記念論文集』佐々木達夫先生退職記念事業実行委員会)
- 榎原雅治・小瀬玄士校訂 2018『史料纂集古記録編〔第196回配本〕新訂増補 兼宣公記第1』八木書店
- 大下永 2019「小島城」『東海の名城を歩く—岐阜編一』吉川弘文館
- 大下永 2020a「<史料紹介>高野山不動院所蔵「飛騨国過去帳（一）」「『飛騨の中世』第11号、飛騨中世史の会
- 大下永 2020b「飛騨市の文化財活用事例」『全史協会報2020』全国史跡整備市町村協議会
- 大下永 2021a「飛騨における武家拠点の変遷と小島・東町城下町の構造」『中井均先生退職記念論集 城郭研究と考古学』サンライズ出版
- 大下永 2021b「明治前期の地籍図からみる武家拠点周辺の空間構造～飛騨市の事例を中心に～」『飛騨市歴史文化調査室報』第3集、飛騨市教育委員会
- 大下永 2021c「城館調査における赤色立体地図の活用について～飛騨市の調査事例から～」『飛騨市歴史文化調査室報』第3集、飛騨市教育委員会
- 大下永 2021d「飛騨北部における武家拠点周辺地域の構造と変遷—姉小路・江馬から金森へ」『戦国・織豊期の地域社会と城下町—東国編一』戎光洋出版
- 大下永 2021e「<史料紹介>高野山不動院所蔵「飛騨国過去帳（二）」「『飛騨の中世』第12号、飛騨中世史の会
- 大下永 2021f「飛騨における武家拠点」『武家拠点科研』福井研究集会資料集『武家拠点科研』事務局 大野政雄ほか 1960『村山遺跡』
- 大野政雄・佐藤達夫 1967「岐阜県浜遺跡調査予報」『考古学雑誌第53卷』日本考古学会
- 大野政雄編 1970『飛騨国中案内』（上村木曾右衛門 1746『飛騨国中案内』）
- 大平愛子 1997「江馬氏下館跡周辺の近世村落の復原」『江馬氏城館跡III—下館跡南辺の調査—』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室

- 大藏海 2004 「北朝・室町幕府と飛騨国司姉小路氏」『日本歴史』733、2009 『姉小路と広瀬』に再録
- 大藏海 2013 『室町幕府と地域権力』吉川弘文館
- 岡村守彦 1979 『飛騨史考 中世編』
- 岡村利平編 1909 『飛州志』住伊書店（長谷川忠嵩『飛州志』（享保年間））
- 岡村利平校訂 1914 『飛騨叢書第三卷 飛騨遣乗合府』住伊書店（桐山力所編『飛騨遣乗合府』（江戸末期）、1986年復刻版、かずみ文庫を参照）
- 小川剛生 2005 「姉小路基綱についてー仮名日記作者としてー」『国文学研究資料館起用文学研究篇』31、2005 『姉小路と広瀬』に再録
- 小野木学 1997 「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第2号 美濃の考古学刊行会
- 神岡町 1972 『神岡町史 資料編上巻』
- 神岡町 1980 『神岡町史 資料編別巻』
- 神岡町教育委員会 1979 『江馬氏城館跡発掘調査概報』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995 『江馬氏城館跡』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996 『江馬氏城館跡II』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997 『江馬氏城館跡III』
- 神岡町教育委員会 1998 『江馬氏城館跡IV』
- 神岡町教育委員会 2001 『江馬氏城館後V』
- 川村博忠編 2002 『寛永十年巡見使国絵図日本六十余州図』柏書房
- 木下聰 2011 『中世武家官位の研究』吉川弘文館
- 上町遺跡金子・氷見地点発掘調査団 2001 『上町遺跡金子地点・氷見地点発掘調査報告書』古川町教育委員会
- 上町遺跡C地点発掘調査団 1991 『上町遺跡D地点発掘調査報告書』
- 上町遺跡トヨタ地点・O地点・栗原センター地点発掘調査団 1994 『上町遺跡トヨタ地点・O地点・栗原センター地点発掘調査報告書』岐阜県古川町教育委員会
- 上町C地点遺跡発掘調査団 1989 『上町遺跡C地点発掘調査報告書』岐阜県吉城郡古川町教育委員会
- 木下聰 2011 『中世武家官位の研究』吉川弘文館
- 岐阜県 1969 『岐阜県史 史料編 古代・中世1』
- 岐阜県 1972 『岐阜県史 史料編 古代・中世2』
- 岐阜県 1973 『岐阜県史 史料編 古代・中世4』
- 岐阜県 1999 『岐阜県史 史料編 古代・中世補遺』
- 岐阜県 1965 『岐阜県史 史料編 近世1』
- 岐阜県 1966 『岐阜県史 史料編 近世2』
- 岐阜県 1966 『岐阜県史 史料編 近世3』
- 岐阜県 1971 『岐阜県史 史料編 近世7』
- 岐阜県教育委員会 1963 『岐阜県指定文化財調査報告書第六巻』
- 岐阜県教育委員会 2005 『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第4集（飛騨地区・補遺）』
- 岐阜県教育委員会 1990 『岐阜県遺跡地図改訂版』（2007年GIS作成を参照）
- 清見村教育委員会 1995 『清見村誌 資料編上』

- 黒板勝美編 1999『新訂増補国史大系第35巻 後鑑第二篇』吉川弘文館（1932第一版）
- 黒板勝美編 2002『新訂増補国史大系第54巻 公卿補任第二篇』吉川弘文館（1937第一版）
- 黒板勝美編 2002『新訂増補国史大系第55巻 公卿補任第三篇』吉川弘文館（1936第一版）
- 黒板勝美・国史大系編集会編 2002『新訂増補国史大系第59巻 尊卑分脈第二編』吉川弘文館（1959第一版）
- 国府町教育委員会 1992『国府町内遺跡詳細分布調査報告書』
- 国府町教育委員会 1993a『平田垣内遺跡』
- 国府町教育委員会 1993b『岐阜県国府町遺跡地図』
- 国府町教育委員会 2005『石橋廃寺調査報告書』
- 国立歴史民俗博物館 1993『日本出土の貿易陶磁西日本編1』国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書4
- 真宗史料刊行会 2015『大系真宗史料文書記録編8 天文日記I』法藏館
- 真宗史料刊行会 2017『大系真宗史料文書記録編9 天文日記II』法藏館
- 下呂市教育委員会 2014a『桜洞城跡発掘調査報告書』
- 下呂市教育委員会 2014b『萩原諱訪城跡発掘調査報告書』
- 下呂市教育委員会 2014c『城から探る飛騨南部の戦国時代』
- 下呂市教育委員会 2018『下呂市遺跡詳細分布調査報告書』
- 下呂町史編纂委員会 1986『飛騨下呂 史料2』
- 国府町史刊行委員会 2007『国府町史 考古・指定文化財編』
- 国府町史刊行委員会 2008『国府町史 史料編1』
- 国府町史刊行委員会 2011『国府町史 通史編1』
- 小島道裕 1995『地籍図及び絵図による検討』『江馬氏城館跡一下館跡発掘調査報告書I』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 小島道裕 2003『江馬氏館と江馬氏』『国立歴史民俗博物館研究報告』第104集
- 斎木一馬・林亮勝・橋本政宣編 1982『寛永諸家系図第五』続群書類従完成会
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2005『太江遺跡II』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2006『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平5号古墳』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007『中野大洞平遺跡II』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1992『深沼遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1995『岡前遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』
- 佐伯哲也 2006「公園整備前の東町城跡写真について」『濃飛史紳』89、岐阜県歴史史料保存協会
- 佐伯哲也 2018『飛騨中世城郭図面集』桂書房
- 佐藤甚次郎 1986『明治期作成の地籍図』古今書院
- 城郭談話会 2021『考古資料〔遺構・遺物・層位〕から城郭建築〔作事〕に迫る！－その可能性と限界を探る－』第4回城郭談話会特別例会資料集
- 杉崎廃寺跡発掘調査団 1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告書』古川町教育委員会
- 鈴木正貴 2008『遺物の組成と城の年代観（消費地の視点）』『シンポジウム戦国の城と年代観－繩張研究と考古学の方法論－資料集』帝京大学山梨文化財研究所

- 千田嘉博・小島道裕・前川要編 1993『城館調査ハンドブック』新人物往来社
- 高岡徹 1998「佐々成政の飛騨高原郷侵攻について」『飛騨春秋』450号
- 多賀秋五郎 1941『飛騨史の研究』
- 多賀秋五郎 1989『濃飛史研究序説』
- 高橋隆三編 1933『実隆公記 卷3下』続群書類從完成会
- 高田徹 1994「飛騨の中世城郭4題—織豊期を中心として—」『越中の中世城郭第4号』富山の城を考える会
- 高田徹 2005「城館絵図について」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第4集(飛騨地区・補遺)』
- 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬 1965『新訂寛政重修諸家譜 第12』続群書類從完成会
- 高山市教育委員会 1995『岐阜県高山市遺跡地図』
- 高山市教育委員会 2012『高山城下町絵図：江戸～昭和時代』
- 高山市教育委員会 2013『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 2015『高山市史 街道編(上)』
- 高山別院史編さん室 1983『高山別院史 上巻』真宗大谷派高山別院
- 竹井英文 2016「史料紹介」石川県立図書館蔵「横山家士武功書」『東北学院大岳東北文化研究所紀要』
第48号
- 竹井英文 2017「史料紹介」石川県立図書館蔵「山崎家士軍功書」『東北学院大岳東北文化研究所紀要』
第49号
- 谷口研語 1990「飛騨武士団の興亡」『飛騨下呂』通史・民俗、下呂町
- 谷口研語 2007『飛騨三木一族』新人物往来社
- 谷畠博之 1991『金森氏の城と城下町』『飛騨古川金森史』飛騨古川金森史編さん委員会
- 帝京大学山梨文化財研究所 2008『シンポジウム戦国の城と年代観—縄張研究と考古学の方法論—資料集』帝京大学山梨文化財研究所
- 東京大学史料編纂所編 1968『大日本古記録 建内記3』岩波書店
- 東京大学史料編纂所編 1970『大日本古記録 建内記4』岩波書店
- 東京大学史料編纂所編 1972『大日本古記録 建内記5』岩波書店
- 東京大学史料編纂所編 1972『大日本史料 第七編之十四』東京大学出版会
- 東京大学史料編纂所編 1993『大日本史料 第十一編之二十』東京大学出版会
- 東京大学史料編纂所編 2000『大日本古記録 薩戒記1』岩波書店
- 登谷伸宏 2016「中近世移行期における大野城下町の形成について—織豊系城下町の成立に関する覚書—」
『建築史学』66号
- 中井均・内堀信雄編 2019『東海の名城を歩く 岐阜編』吉川弘文館
- 中井均 2020「高原諜訪城を考える—縄張りから見た江馬氏館との関係—」令和2年度江馬氏城館跡歴史
講座記録・資料(飛騨市の文化財HP掲載)
- 中井均編 2019『戦国時代における石垣技術の考古学的研究 平成28～31年度学術研究助成基金助成金
基盤研究(C)(一般)研究成果報告書(織豊期城郭研究会 2019年度彦研究集会資料集)』「戦国時代における石垣技術の考古学的研究」成果報告会実行委員会
- 中野山越遺跡発掘調査団 1993『中野山越遺跡発掘調査報告書』岐阜県吉城郡古川町教育委員会
- 丹生川村史編纂委員会 1997『丹生川村史 資料編1』
- 萩原三雄・中井均編 2014『中世城館の考古学』高志書院

- 八賀晋 2004『岐阜県史跡信包八幡神社古墳測量調査報告書』飛騨市教育委員会
- 塙保己一編纂 1979『群書類從 第六輯上』続群書類從完成会（訂正3版）
- 馬場伸一郎 2014「桜洞城跡・萩原諒訪城跡再考」『城から探る飛騨南部の戦国時代資料集』下呂市教育委員会
- 飛騨市 2010『古川町歴史探訪』
- 飛騨市 2015『飛騨古川 歴史をみつめて』
- 飛騨市 2020『飛騨市総合政策指針～人口減少先進地が示す人口減少時代の処方箋～（令和2～6年度）』
- 飛騨市教育委員会 2010a『増島城跡』
- 飛騨市教育委員会 2010b『江馬氏城館跡VI』
- 飛騨市教育委員会 2013『上町遺跡向町地点』
- 飛騨市教育委員会 2014『黒内細野遺跡』
- 飛騨市教育委員会 2016『上町遺跡第28～33・37次 個人住宅に伴う発掘調査報告書』
- 飛騨市教育委員会 2017a『沢遺跡』
- 飛騨市教育委員会 2017b『百足城跡現地説明会資料』
- 飛騨市教育委員会 2018a『古川城跡現地説明会資料』
- 飛騨市教育委員会 2018b『小島城跡現地説明会資料』
- 飛騨市教育委員会 2018c『東町城跡現地説明会資料』
- 飛騨市教育委員会 2018d『飛騨市遺跡地図』
- 飛騨市教育委員会 2018e『上町遺跡7』
- 飛騨市教育委員会 2019a『飛騨市内遺跡詳細分布調査報告』
- 飛騨市教育委員会 2019b『向小島城跡現地説明会資料』
- 飛騨市教育委員会 2019c『小鷹利城跡現地説明会資料』
- 飛騨市教育委員会 2019d『野口城跡現地説明会資料』
- 飛騨市教育委員会 2019e『史跡江馬氏城館跡・名勝江馬氏館跡庭園 保存活用計画書』
- 飛騨市教育委員会 2020『史跡江馬氏城館跡7・江馬氏殿遺跡』
- 平井聖ほか編 1979『日本城郭大系 第9巻 静岡・愛知・岐阜』新人物往来社
- 平泉澄校訂 1930『後法興院記 下巻』至文堂
- 福井重治 2011「一四〇〇年代の古川周辺一国司姉小路氏と守護京極氏一」『応永飛騨の乱六百年記念誌姉小路と広瀬』
- 福井重治 2003「高山藩の郡奉行・代官」『郷土研究岐阜30周年記念論集』岐阜県郷土資料研究協議会
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窓の研究』高志書院
- 藤澤良祐 2008「瀬戸・美濃大窓編年と城の年代観－流通と消費－」『シンポジウム戦国の城と年代観－繩張研究と考古学の方法論－資料集』帝京大学山梨文化財研究所
- 古川町 1982『古川町史 史料編一』
- 古川町 1984『古川町史 史料編二』
- 古川町 1986a『古川町史 史料編三』
- 古川町 1986b『古川町史 付図 史料編四』
- ふるさと神岡を語る会 2000『神岡の地名（壱）』
- ふるさと神岡を語る会 2012『ふるさと調べ第十八集 神岡の街道（四）』

- 宝月圭吾・岩沢原彦監修 1973『系図纂要 第五冊』名著出版
- 堀祥岳 2011a「応仁の乱前後の古川地域と姉小路氏－姉小路基綱の人物像をめぐって－」『応永飛騨の乱六百年記念誌 姉小路と広瀬』
- 堀祥岳 2011b「飛騨「姉小路」に関する一考察－飛騨関連中世史料を読みなおす－」『濃尾史論』100号
- 堀祥岳 2014a「高山藩における「十代官」の管轄区分」『濃飛史論』105、岐阜県歴史史料保存協会
- 堀祥岳 2014b「文献資料から探る三木氏の動向」『城から探る飛騨南部の戦国時代資料集』下呂市教育委員会
- 堀祥岳 2015a「第2部第4章 古川地域の中世的景観」『飛騨古川歴史をみつめて』飛騨市
- 堀祥岳 2015b「第2部第5章 中世古川をめぐる相克」『飛騨古川歴史をみつめて』飛騨市
- 堀祥岳 2015c「第3部第1章 金森氏と高山藩」『飛騨古川歴史をみつめて』飛騨市
- 堀祥岳 2016「高原郷における金森左京家領三千石の領域」『斐太紀』15
- 前川要 1991「近世城下町の成立」『都市考古学の研究』柏書房
- 松井一明 2016「戦国期～織豊系城郭の門跡－門遺構研究の方向性を探る－」『織豊城郭』第16号 織豊期城郭研究会
- 宮里修 2019「中世山城の築造技術と年代について」『海南史学』第57号 高知海南史学会
- 三好清超 2019a「岡前館跡に関わる研究史と既出資料の再検討」『飛騨の中世』第10号
- 三好清超 2019b「飛騨における軒瓦の一様相」『古代寺院史の研究』思文閣出版
- 三好清超 2020a「岐阜県史跡古川城跡の発掘調査について」『飛騨市歴史文化調査室報』第2集 飛騨市教育委員会
- 三好清超 2020b「飛騨国司姉小路氏城館跡の発掘調査について」『岐阜県新発見考古速報2020－令和二年度岐阜県発掘調査報告会発表資料－』岐阜県文化財保護センター
- 三好清超 2021「姉小路氏関連遺跡で出土する中世土師器皿の編年試案」『中井均先生退職記念論集 城郭研究と考古学』サンライズ出版
- 三好清超 2022「関係人口と共に創した文化財と博物館資料の活用－飛騨市モデルの報告－」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用4－オープンサイエンス・Wikipedia・GIGAスクール・三次元データ・GIS－』奈良文化財研究所研究報告第33冊 奈良文化財研究所
- 森本一雄 1966a「小島城」『日本城郭全集⑦』人物往来社
- 森本一雄 1966b「小鷹利本城」『日本城郭全集⑦』人物往来社
- 森本一雄 1966c「野口城」『日本城郭全集⑦』人物往来社
- 森本一雄 1966d「蛤城」『日本城郭全集⑦』人物往来社
- 森本一雄 1966e「向小島城」『日本城郭全集⑦』人物往来社
- 森本一雄 1968『飛騨の城』濃飛展望社
- 森本一雄 1987『定本 飛騨の城』郷土出版社
- 山村亜希 2006「中世都市の景観復原と地籍図」『愛知県立大学文学部論集（日本文化学科編）』54号
- 横田洋三 1982「出土土師器皿編年試案」『平安京左京五条三坊十五町』平安京跡研究調査報告書第5集 勇古代学協会
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 鹿王院文書研究会編 2000『鹿王院文書の研究』思文閣出版